

小国町地域創生総合戦略策定のための住民等意識調査の結果について

1. 調査の概要

地方版総合戦略では、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」が示す4つの基本目標、すなわち「地方における安定した雇用を創出する」、「地方への新しい人の流れを創出する」、「若い世代の結婚・出産・子育ての希望を叶える」、「時代に合った地域をつくり、安全な暮らしを守るとともに、地域と地域を連携する」の各分野の施策を幅広くカバーすることが求められる。また、地方版総合戦略の策定に際しては、各世代の地域住民や産官学金など様々な分野の関係者の意見を反映することが重要とされている。

このため、将来の地域づくりに向けて幅広い世代の住民のニーズを把握し、小国町地域創生総合戦略の策定に反映するため、中学生以上の全町民を対象とした意識調査を実施した。

また、全国的に人口減少・高齢化が進む中で、その傾向がより顕著である小国町において地域の活力を取り戻すためには、特にUターンをはじめとする地域外からの移住・定住の促進をより積極的に図ることが重要となる。そこで、町民を対象としたアンケート調査に加え、小国町出身者にもアンケート調査を実施し、将来的な移住意向や望まれている地域づくりの方向性等に関し、幅広い意見を把握した。

表－1 住民等意識調査の実施概要

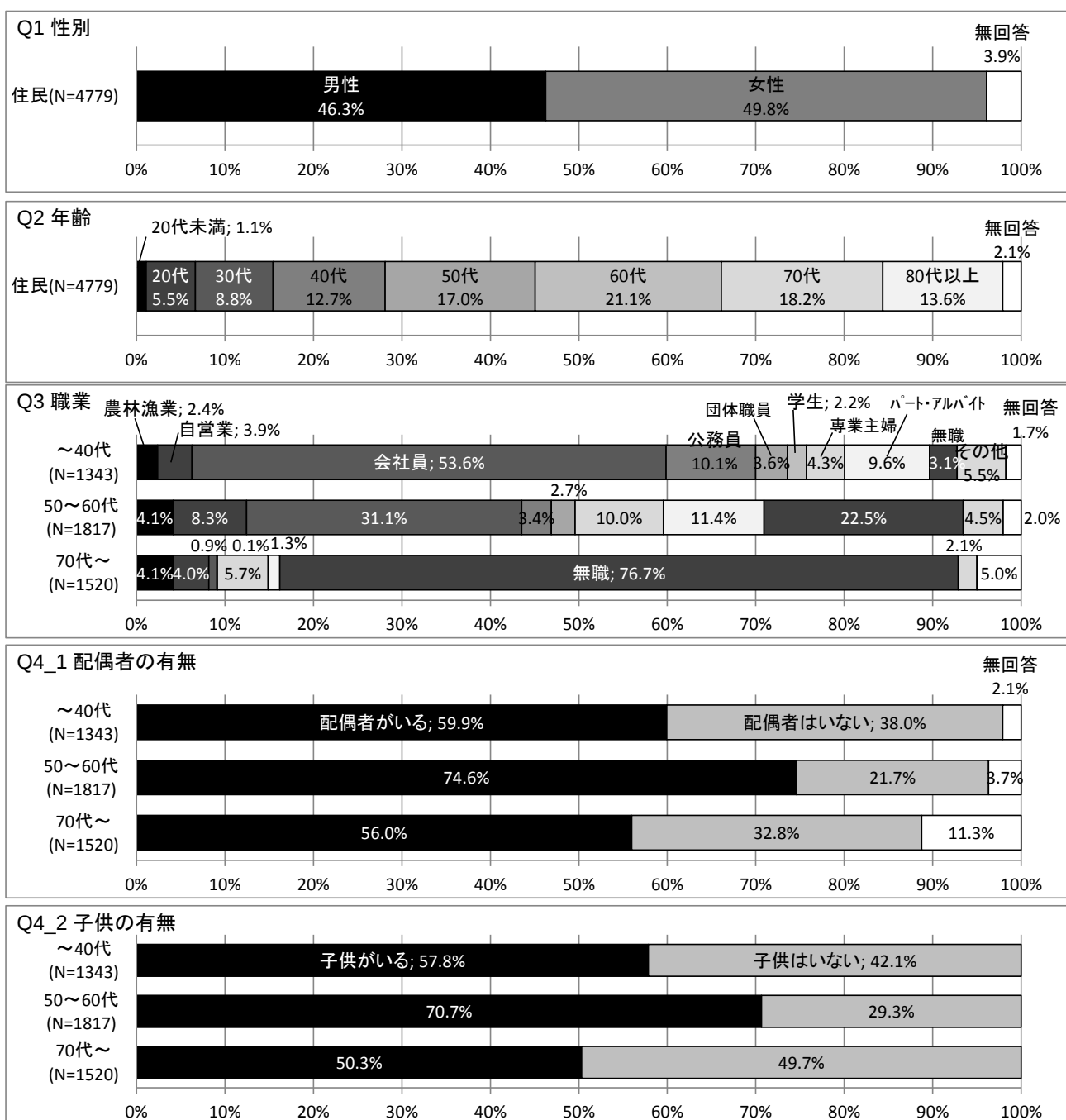
調査の種類	①一般住民調査	②中学生・高校生調査	③小国町出身者調査
調査の対象	小国町在住者 (18 歳以上全員)	小国町在住の中学生・高校生全員	山形おぐに会会員 小国郷人会会員
調査の方法	6/17 駐在員文書にて各世帯に必要票数(住基ベース)配布 各家庭にて一人ひとり回答の上、世帯分をまとめて隣組長に提出(6/28 まで)、7/1 に駐在員経由で回収		6/18～22 両会の会員宛に 郵送配布 郵送回収(6/30 投函〆切)
配布対象数	対象世帯:全 3,018 世帯 対象:全世帯人員 6,907 人	対象世帯:392 世帯 対象:全中学・高校生 472 人	349 人
回収数	回収世帯数:2,351 世帯 回収票数:5,377 票(77.9%)	回収票数:316 票(69.9%)	208 票(60.0%)
有効回答数	白紙(無効票):598 票 有効回答数:4,779 票	白紙(無効票):19 票 有効回答数:297 票	白紙(無効票):0 票 有効回答数:208 票
調査項目	○属性 ○小国町の魅力・イメージ ○日常生活の状況 ○これからのまちづくりについて ○まちづくりの拠点施設について	○属性 ○小国町の魅力・イメージ ○地域活動等への参加状況 ○これからのまちづくりについて ○まちづくりの拠点施設について	○属性 ○小国町の魅力・イメージ ○小国町との関わり ○今後の小国町との関わりに関する意向 ○まちづくりの拠点施設について

2. 調査結果

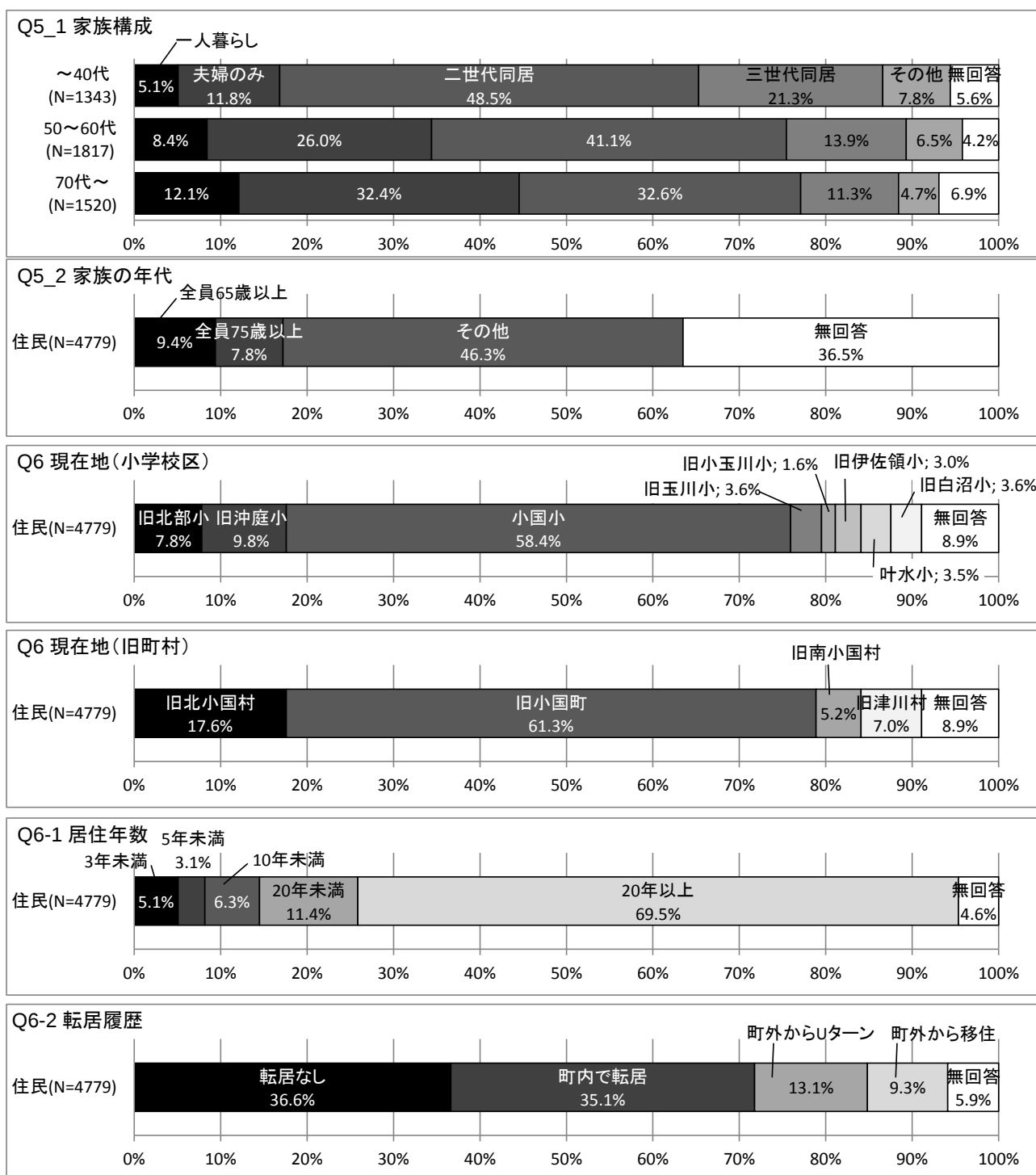
2-1. 一般住民アンケートの結果

(1) 回答者属性

- 回答者の性別をみると、やや女性が多いが、男女ほぼ半数ずつであった。
- 回答者の年齢構成は、60代以上が半数以上を占めている。
- 回答者の職業をみると、40代までは「会社員」が半数以上を占めているが、50～60代になると「無職」が2割強と多くなり、70代以上は「無職」が8割近くを占めている。
- 各世代とも、配偶者や子供がいると回答した人が半数以上を占めている。



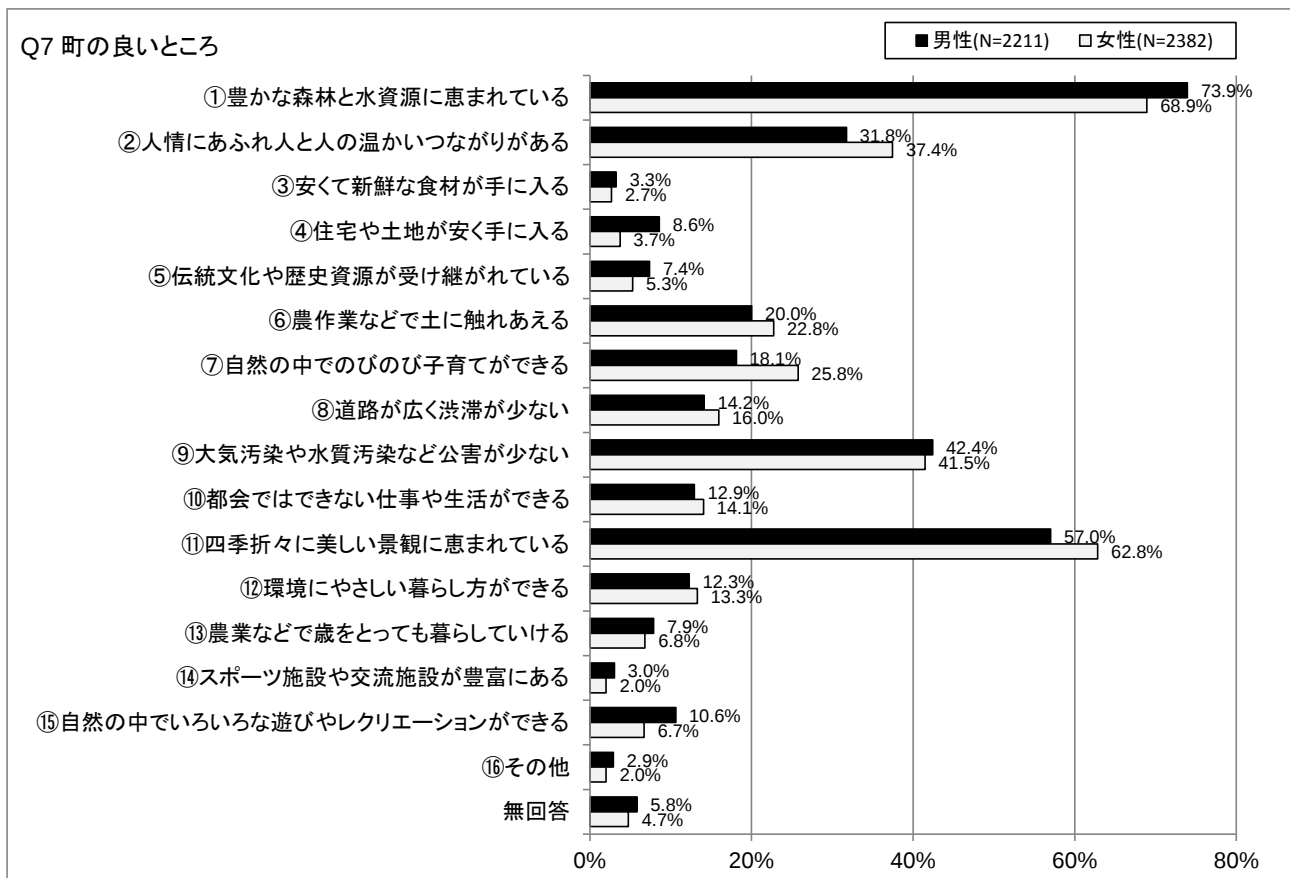
- 回答者の家族構成をみると、40代までの比較的若い世代では、「二世世代同居」が約半数を占め、「三世世代同居」も2割程度みられるが、年齢層が高くなるほど「一人暮らし」及び「夫婦のみ」の割合が大きくなり、70代以上では5割近くが「一人暮らし」又は「夫婦のみ」世帯である。
- 現在の住まいについて、小学校区単位でみると「小国小学校区」が約6割と大部分を占めており、旧町村単位では、旧北小国村が2割弱、旧南小国村及び旧津川村が各5～7%程度となっている。
- 回答者の約7割は小国町に「20年以上」住んでおり、また36.6%が転居経験はないとしているが、町内で転居した経験がある人も35.1%みられた。



(2) 小国町の魅力・イメージ

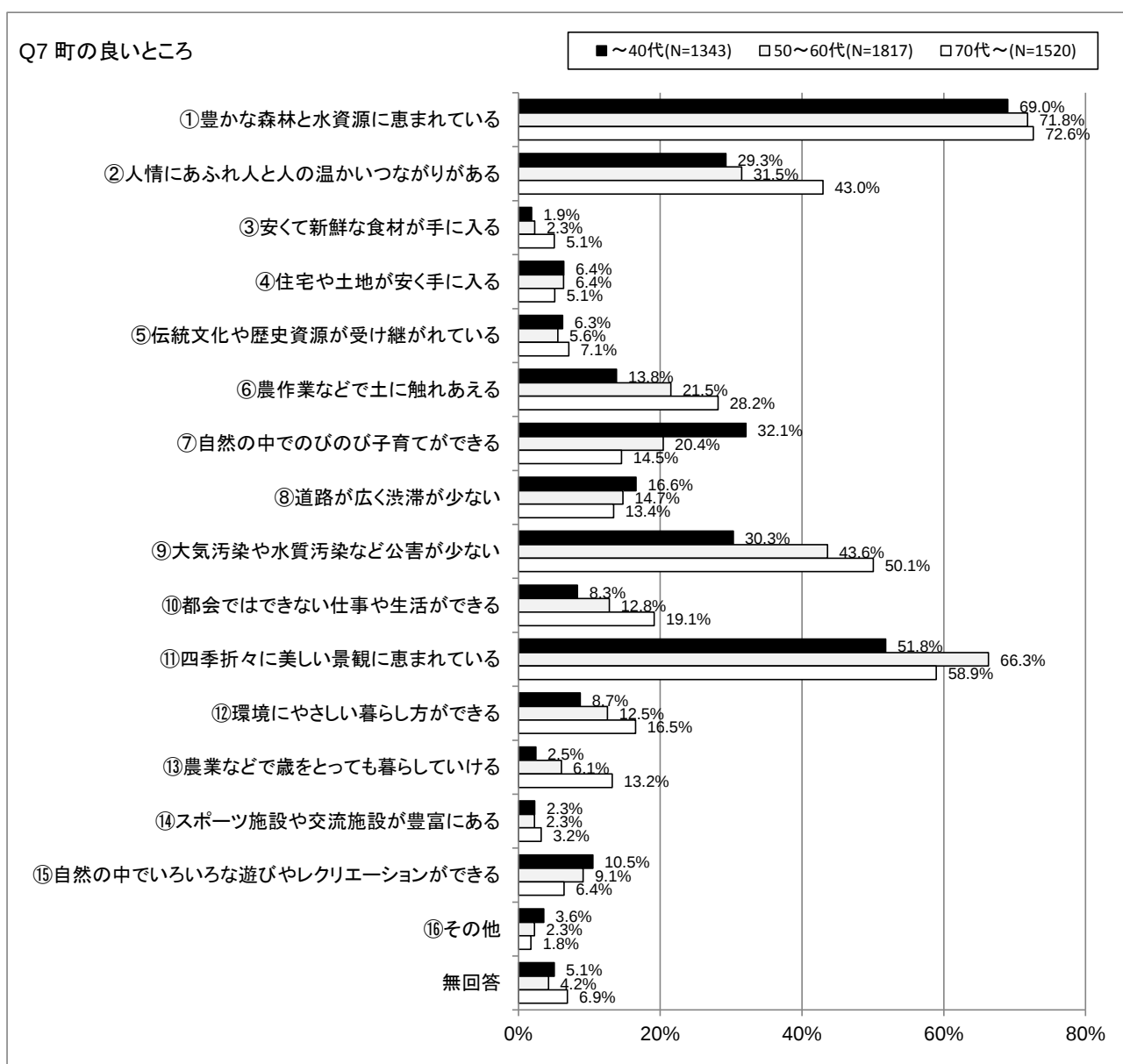
Q7 あなたにとって、小国町の良いところは何ですか。(〇は5つまで)

- 町の良いところとしては、男女とも「豊かな森林と水資源に恵まれている」が第1位に、「四季折々に美しい景観に恵まれている」が第2位に、「大気汚染や水質汚染など公害が少ない」が第3位に挙げられており、小国町が有する豊かでかつ良質な自然環境について高く評価されていることがうかがえる。
- 上位3項目以外では、男女でやや差がみられる項目もみられる。「人情にあふれ人と人の温かいつながりがある」点や、「自然の中でのびのび子育てができる」点については、男性よりも女性の方が高い割合となっている。
- 一方、全体での割合自体は低いものの、「自然の中でいろいろな遊びやレクリエーションができる」点や「住宅や土地が安く手に入る」点などについては、男性の方が女性よりやや高い割合となっている。



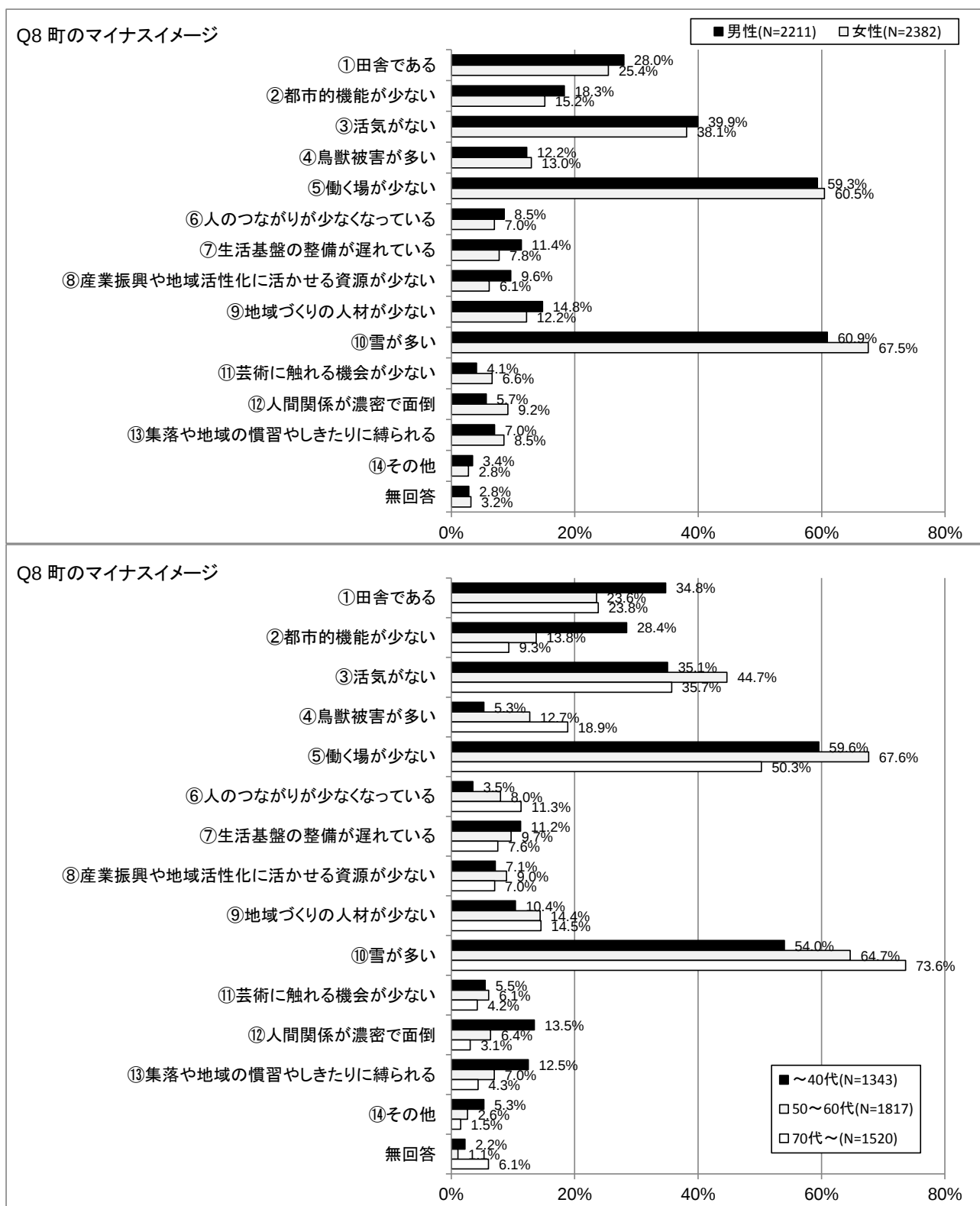
Q7 あなたにとって、小国町の良いところは何ですか。(〇は5つまで)

- 町の良いところについて世代別で比較すると、自然の豊かさ（①豊かな森林と水資源に恵まれている、⑨大気汚染や水質汚染など公害が少ない、⑪四季折々に美しい景観に恵まれている）や、人々の温かいつながり（②人情にあふれ人と人の温かいつながりがある）については、特に高齢世代の方が高く評価している。
- また、高齢世代では、若い世代と比べると、「⑥農作業などで土に触れあえる」点や「⑩都会ではできない仕事や生活ができる」点、「⑬農業などで年をとっても暮らしていける」点など、農業を中心とした生活についてプラスに評価する人が多いことが分かる。
- 一方、「自然の中でのびのび子育てができる」点や「⑮自然の中で色々な遊びやレクリエーションができる」点などは、40代までの若い世代で比較的高く評価されている。



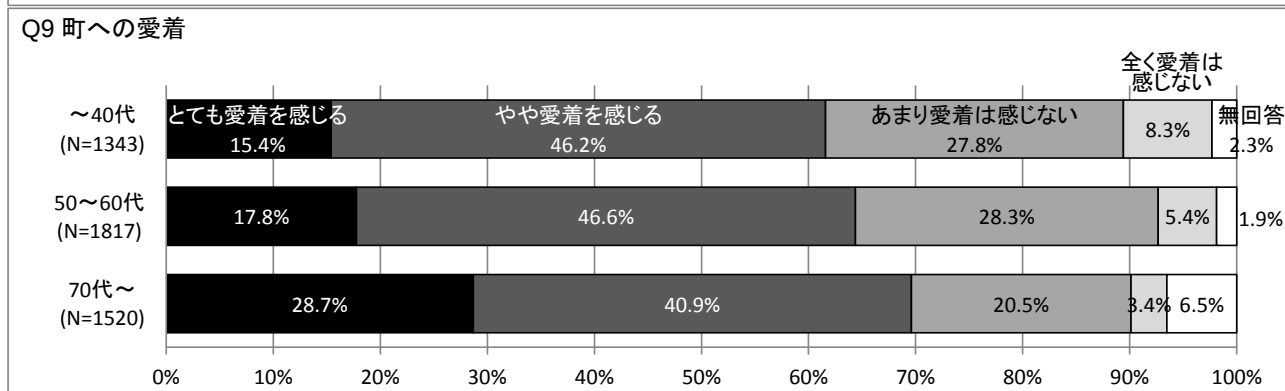
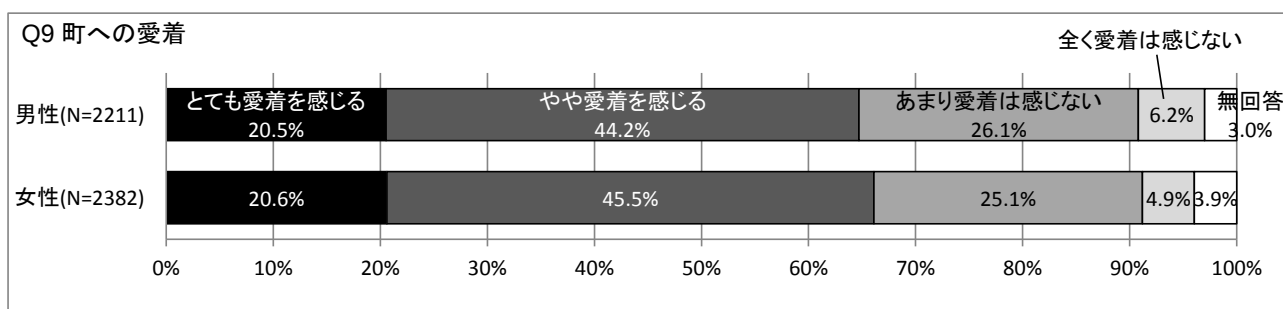
Q8 あなたは、小国町にどんなマイナスイメージをお持ちですか。(〇は3つまで)

- 町のマイナスイメージとしては、男女とも約6割超が「⑩雪が多い」と「⑤働く場が少ない」の2点を挙げており、これらに次いで「③活気がない」点が4割近くとなっている。
- 「⑤働く場が少ない」は特に60代までの現役世代で高い割合である一方、「⑩雪が多い」は年代が上がるにつれて割合が高くなっている。

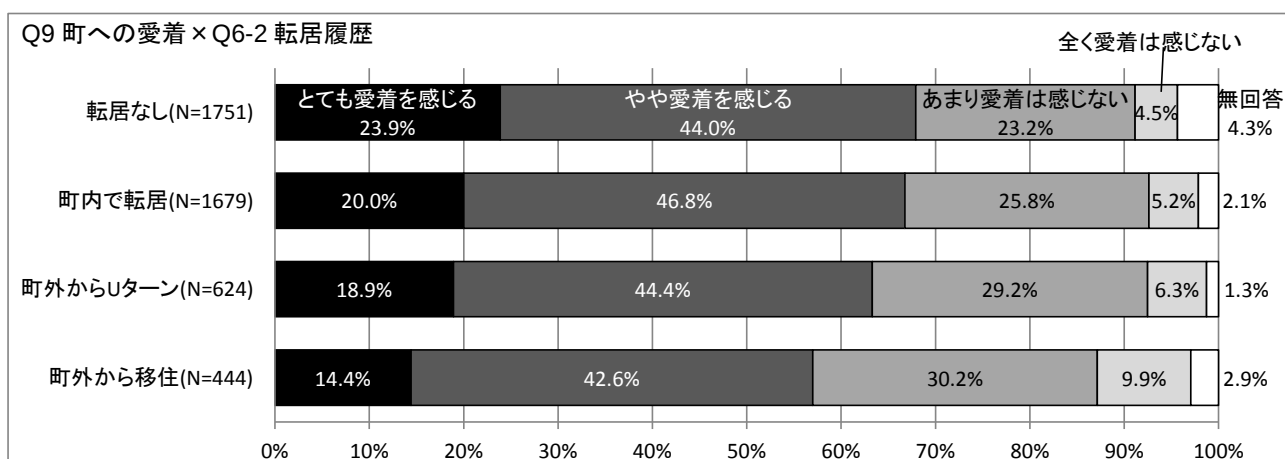


Q9 あなたは、小国町に愛着を感じますか。(〇は1つ)

- 男女とも約2割が「とても愛着を感じる」としており、「やや愛着を感じる」と合わせると、約65%が町に愛着があると回答している。
- 「全く愛着は感じない」は、男女とも5%前後（男性6.2%、女性4.9%）である。
- 世代別でみると、高齢世代になるほど「とても愛着を感じる」の割合が高くなり、70代以上では約3割が町に「とても愛着を感じる」としている。
- 40代までの比較的若い世代でも、6割以上が愛着を感じる（「とても愛着を感じる」＋「やや愛着を感じる」）としているが、愛着は感じない（「あまり愛着は感じない」＋「全く愛着は感じない」）という人も4割近くと、50代以上と比べると愛着が薄い人の割合がやや高くなっている。



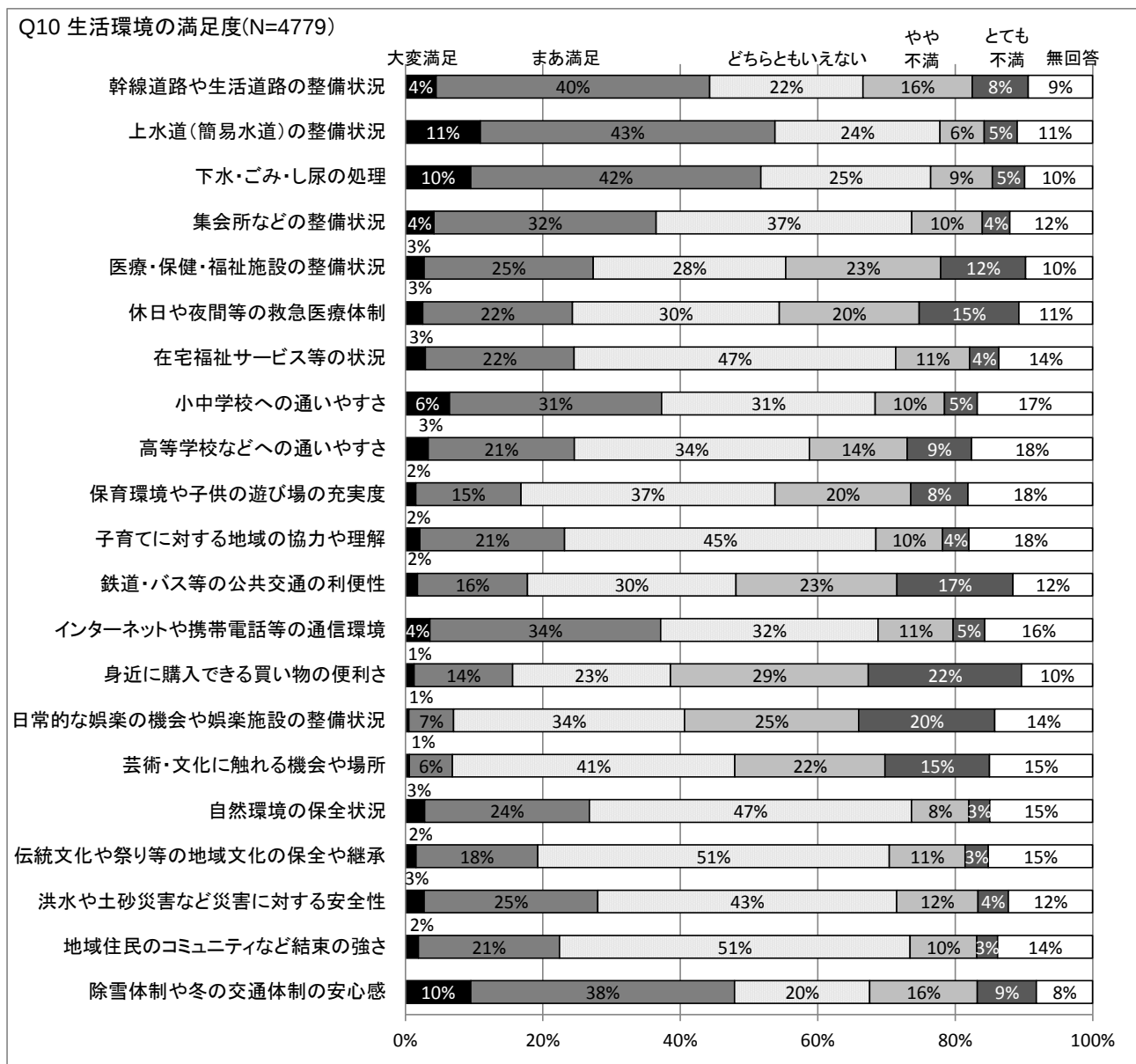
- 町への愛着について転居履歴とのクロスでみると、転居経験がない人が最も町に愛着を感じており、町内で転居した人、町外からUターンした人、町外から移住した人の順に愛着を感じる割合が低くなる（逆に愛着を感じないという割合が高くなる）傾向が見て取れる。



(3) 日常生活の状況

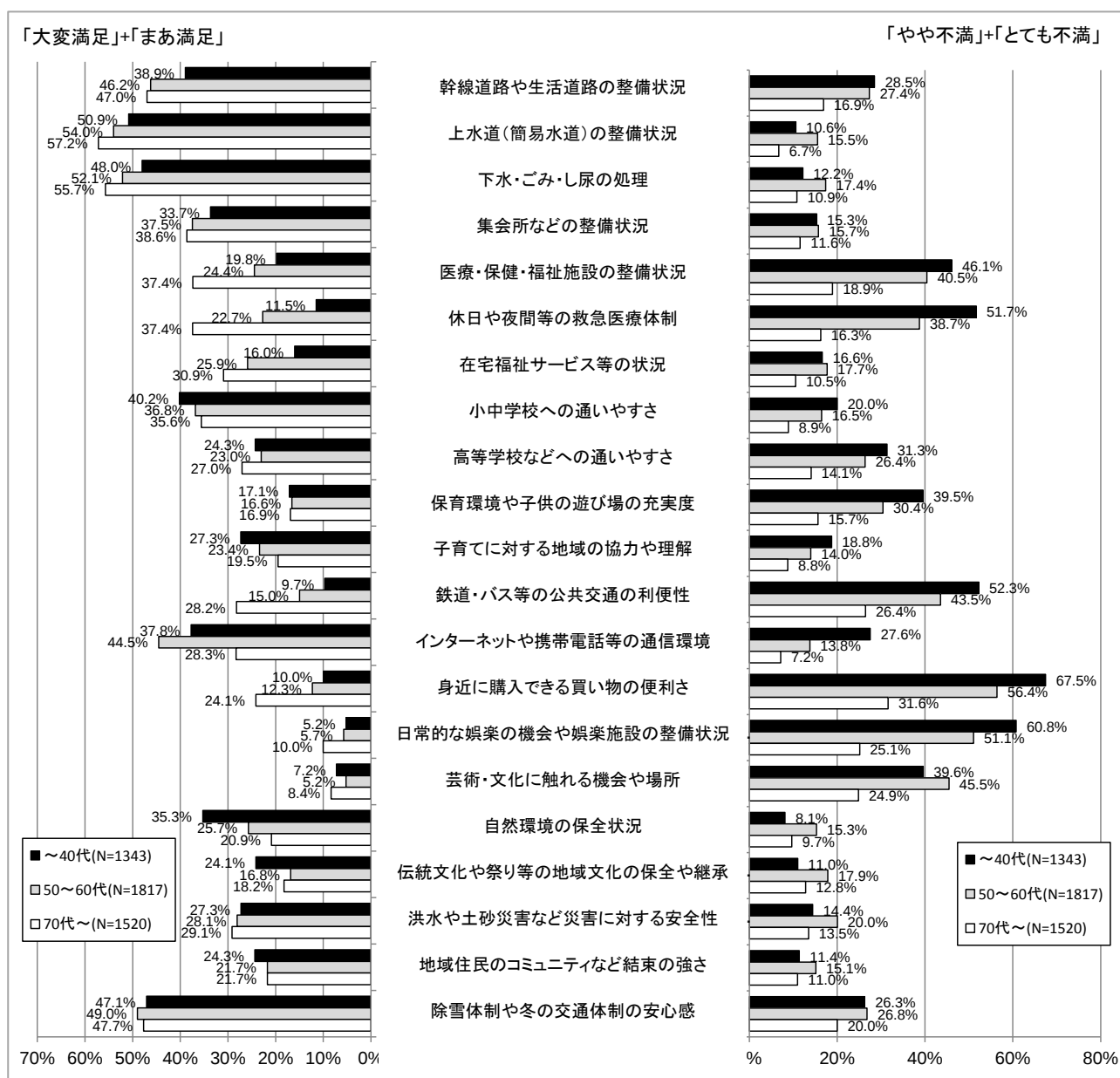
Q10 小国町の生活環境について、あなたの満足度を教えてください。(〇はそれぞれ1つ)

- 日常生活を送る上で、生活環境にどの程度満足しているか項目ごとに5段階で評価してもらったところ、道路や上下水道の整備状況、通信環境、除雪等の冬期交通体制などについては比較的満足度が高くなっている。
- 一方、医療・福祉体制や買い物環境、娯楽施設の整備状況、公共交通等については、満足度が低く、特に「身近に購入できる買い物の便利さ」については「やや不満」と「とても不満」を合わせると半数以上が不満としている。



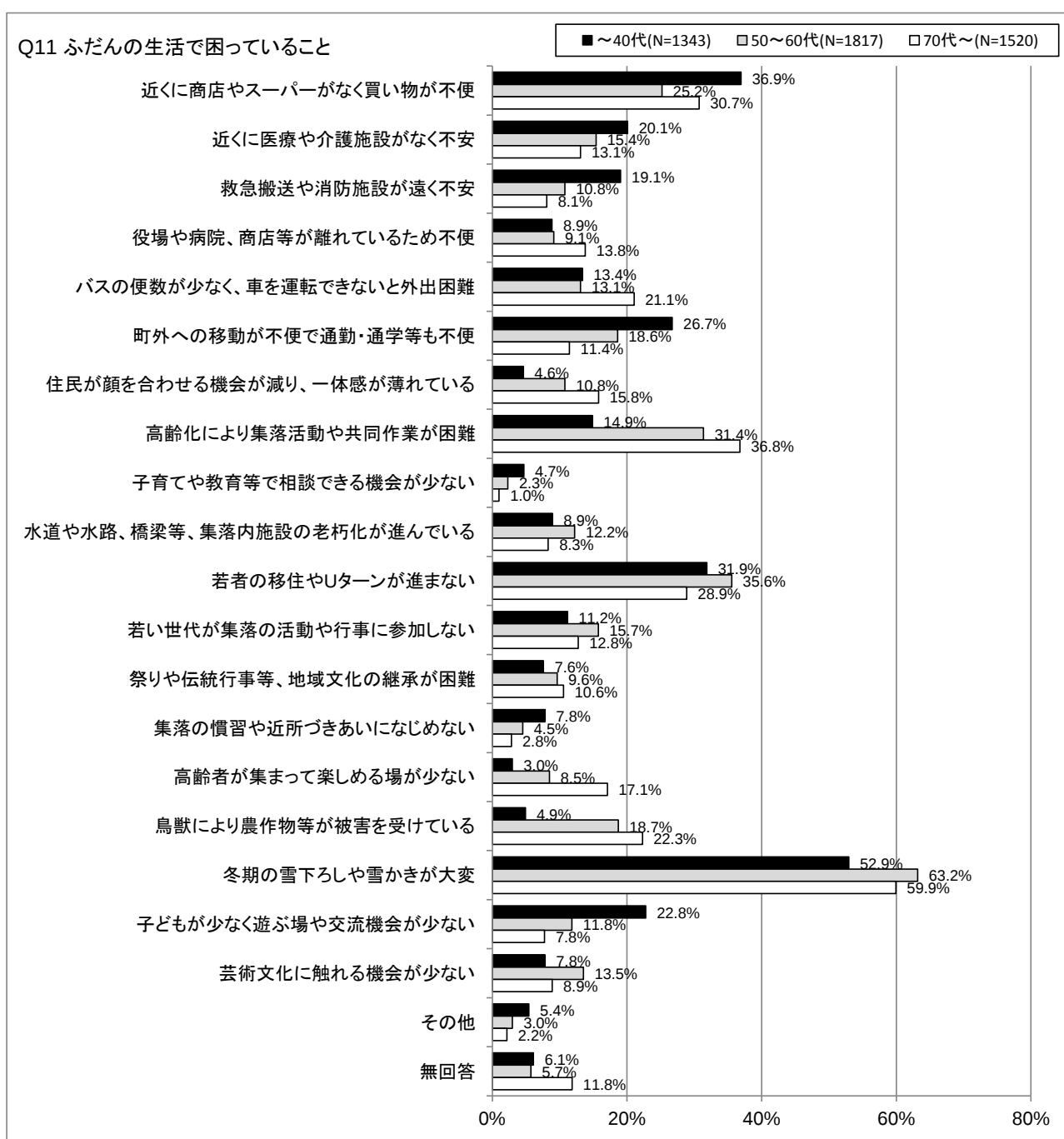
Q10 小国町の生活環境について、あなたの満足度を教えてください。(〇はそれぞれ1つ)

- 世代別に生活環境の満足度を比較すると、上下水道の整備状況や除雪等の冬期交通体制については、いずれの世代も5割前後が満足としている。また、道路の整備状況については、50代以上は5割近くが満足としているのに対して、40代までの比較的若い世代ではやや満足度が低い。
- 医療・福祉体制や公共交通の利便性については年代により評価が大きく分かれた。具体的にみると、「医療・保健・福祉施設の整備状況」や「休日や夜間等の救急医療体制」について、70代以上は4割近くが満足としており、不満とした人の割合よりも高くなっているのに対し、40代までの比較的若い世代では、満足は1～2割程度であり、5割前後が不満としている。同様に、「鉄道・バス等の公共交通の利便性」について、70代以上は満足が3割近くと不満より高いのに対して、40代までの世代では満足は1割に満たず、5割以上が不満としている。
- 「身近に購入できる買い物の便利さ」や「日常的な娯楽の機会や娯楽施設の整備状況」、「保育環境や子供の遊び場の充実度」などについても、若い世代の方がより不満を強く感じている。



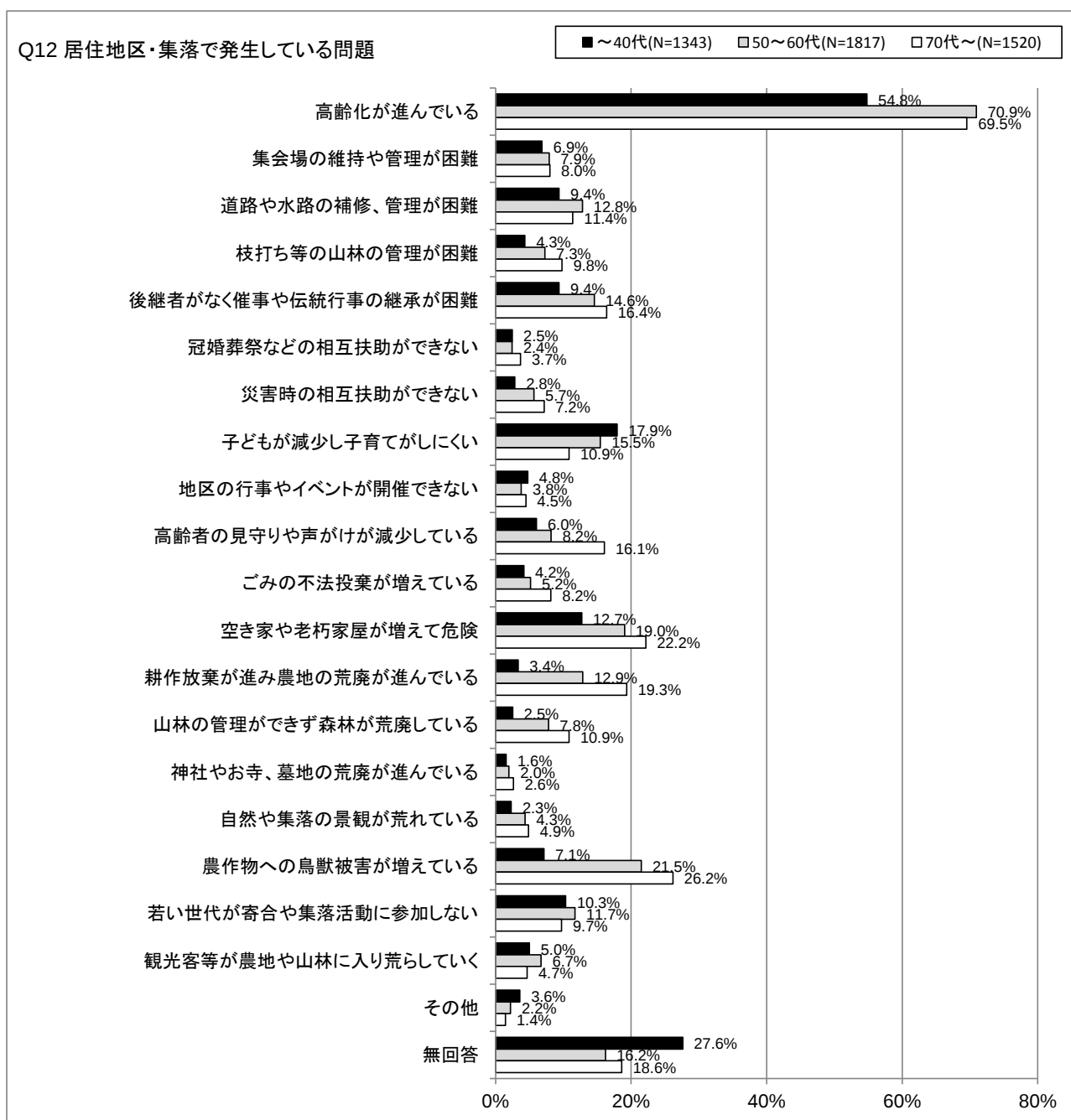
Q11 あなたが、普段の生活で困っていることは何ですか。(〇は5つまで)

- ふだんの生活で困っていることについてみると、いずれの世代も「冬期の雪下ろしや雪かきが大変」が5割以上と第1位に挙げられており、特に50～60代では63.2%、70代以上では59.9%と、高齢世代ほど冬期の雪処理に困っていることが分かる。
- 第2位に挙げられた項目は世代により差がみられる。40歳までの比較的若い世代では、「近くに商店やスーパーがなく買い物が不便」(36.9%)が、50～60代では「若者の移住やUターンが進まない」(35.6%)が、70代以上では「高齢化により集落活動や共同作業が困難」(36.8%)がそれぞれ第2位となっている。
- また、医療体制や通勤・通学に関する不安・不便さは若い世代から、地域コミュニティの一体性の低下や高齢者が集う場の少なさについては高齢世代からより多く指摘されている。



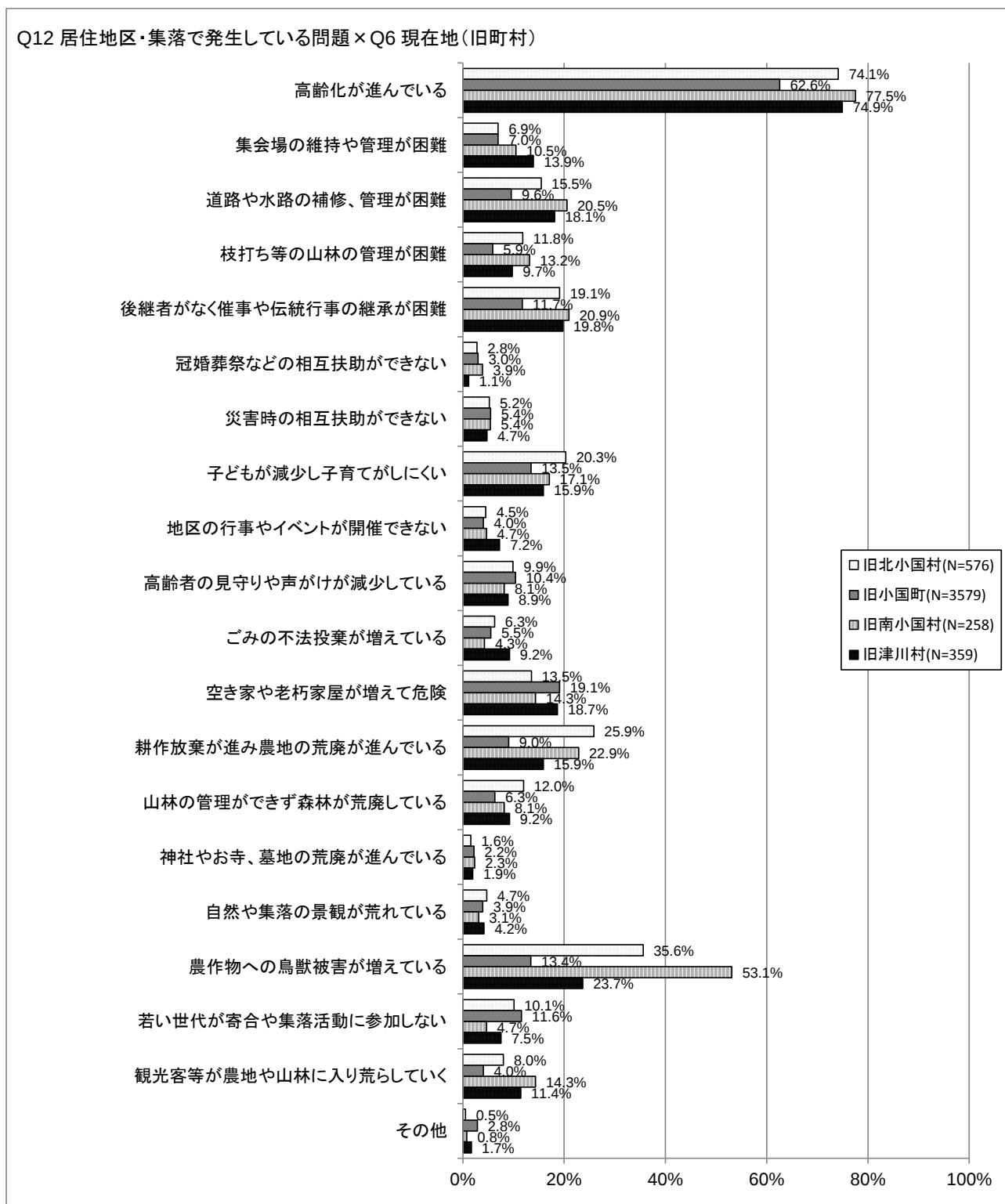
Q12 あなたの地区や集落で発生している問題は何ですか。(〇は5つまで)

- 居住地区・集落で発生している問題として指摘された事項をみると、いずれの世代でも「高齢化が進んでいる」が突出して高いが、50代以上の世代では7割前後と特に高くなっている。
- 50代以上では、これに次いで「農作業への鳥獣被害が増えている」が第2位に挙げられているのに対して、40代までの比較的若い世代では「子どもが減少し子育てがしにくい」が17.9%と2番目に高い割合となっている。



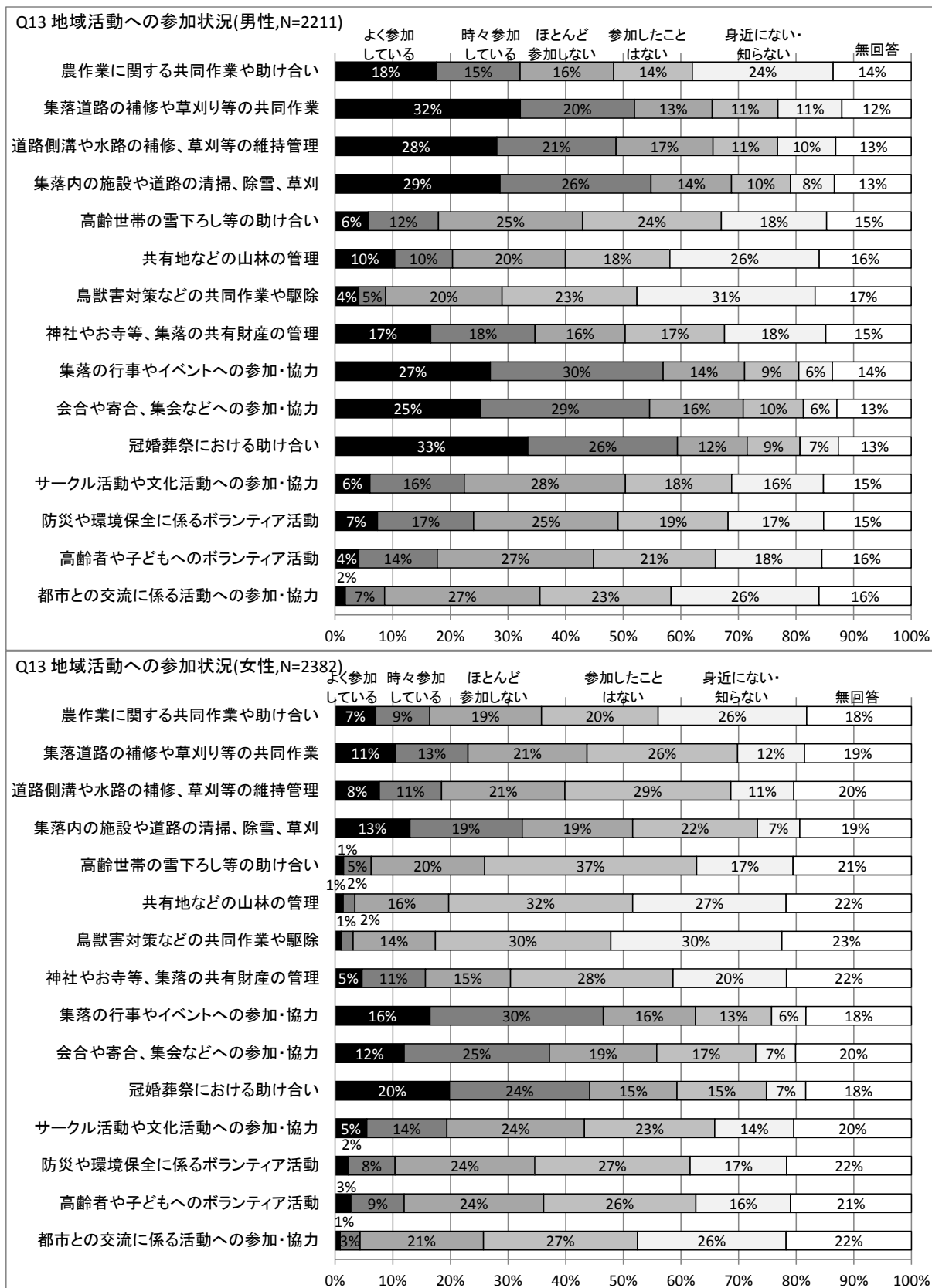
Q12 あなたの地区や集落で発生している問題はありませんか。(〇は5つまで)

- 居住地区・集落で発生している問題を旧町村別に比較すると、「高齢化が進んでいる」は旧小国町以外の旧3村エリアでは7割超の住民から問題として指摘されている。
- 「農作物への鳥獣被害が増えている」については、旧南小国村で53.1%と半数以上から指摘されており、旧北小国村でも35.6%と比較的高い割合となっている。



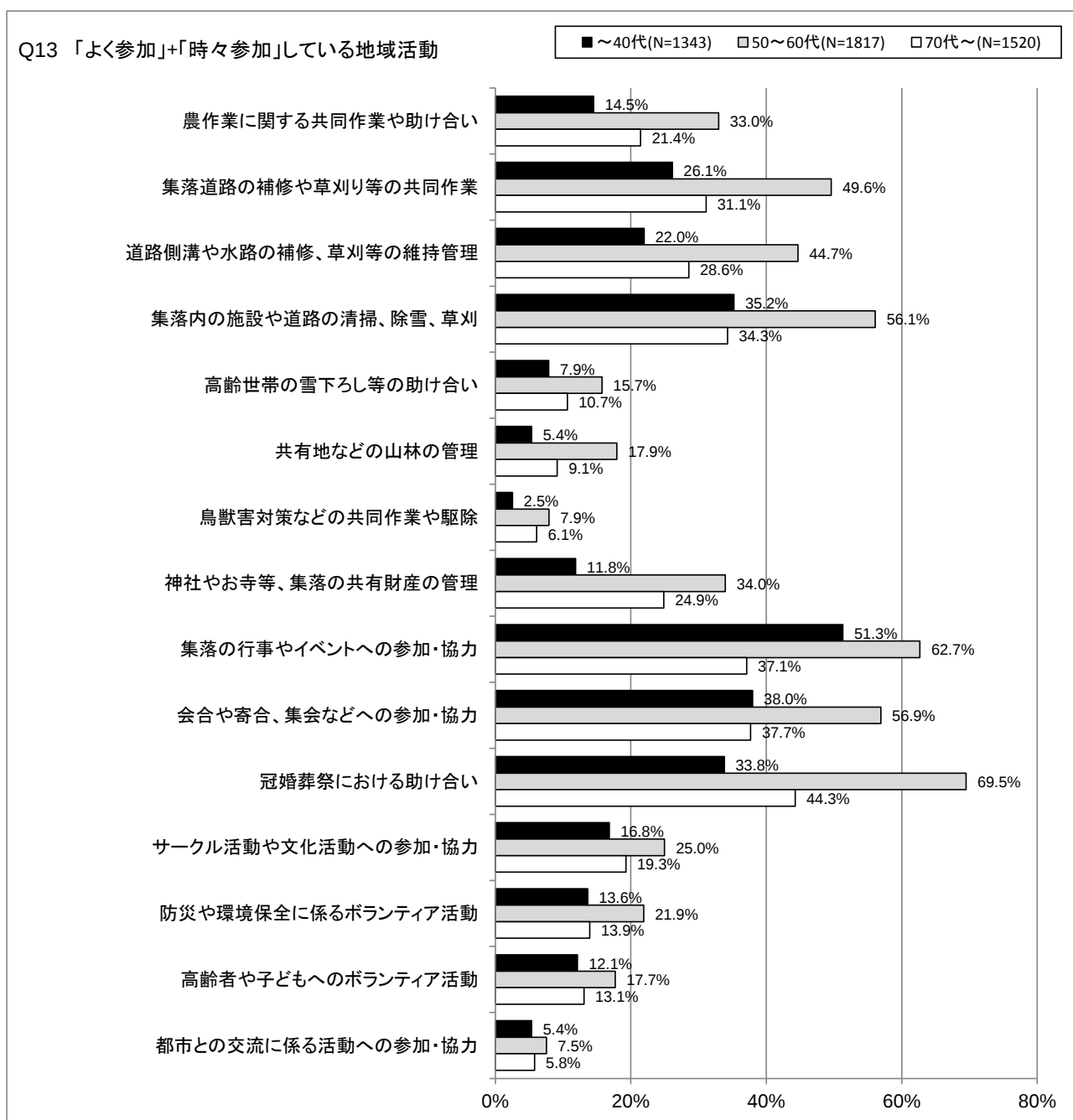
Q13 あなたご自身は、次の地域活動に参加していますか。(〇はそれぞれ1つ)

- 冠婚葬祭における助け合いや集落道路・側溝・水路等の補修・草刈り、集落の行事や会合・集会などは比較的多くの住民が参加しており、総じて男性の方が参加割合が高い。



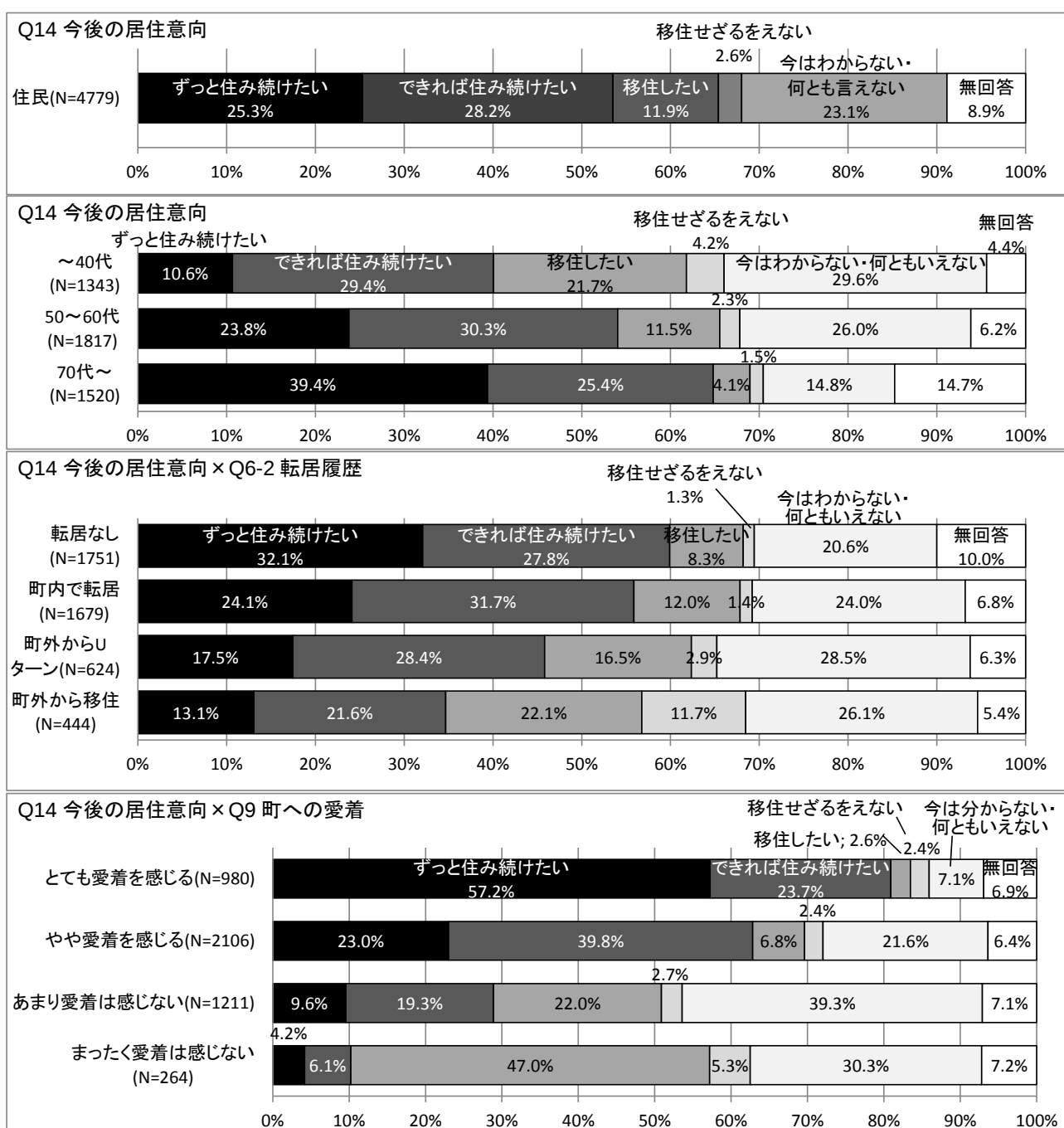
Q13 あなたご自身は、次の地域活動に参加していますか。(〇はそれぞれ1つ)

- それぞれの地域活動に対して参加している（「よく参加している」又は「時々参加している」）割合を世代別で比較すると、多くの地域活動について 50～60 代が中心となって維持していることが分かる。
- 集落の行事やイベントについては 40 代までの比較的若い世代も半数以上が参加している一方で、冠婚葬祭については高齢世代を中心に行われており、70 代以上も 4 割強が参加している。



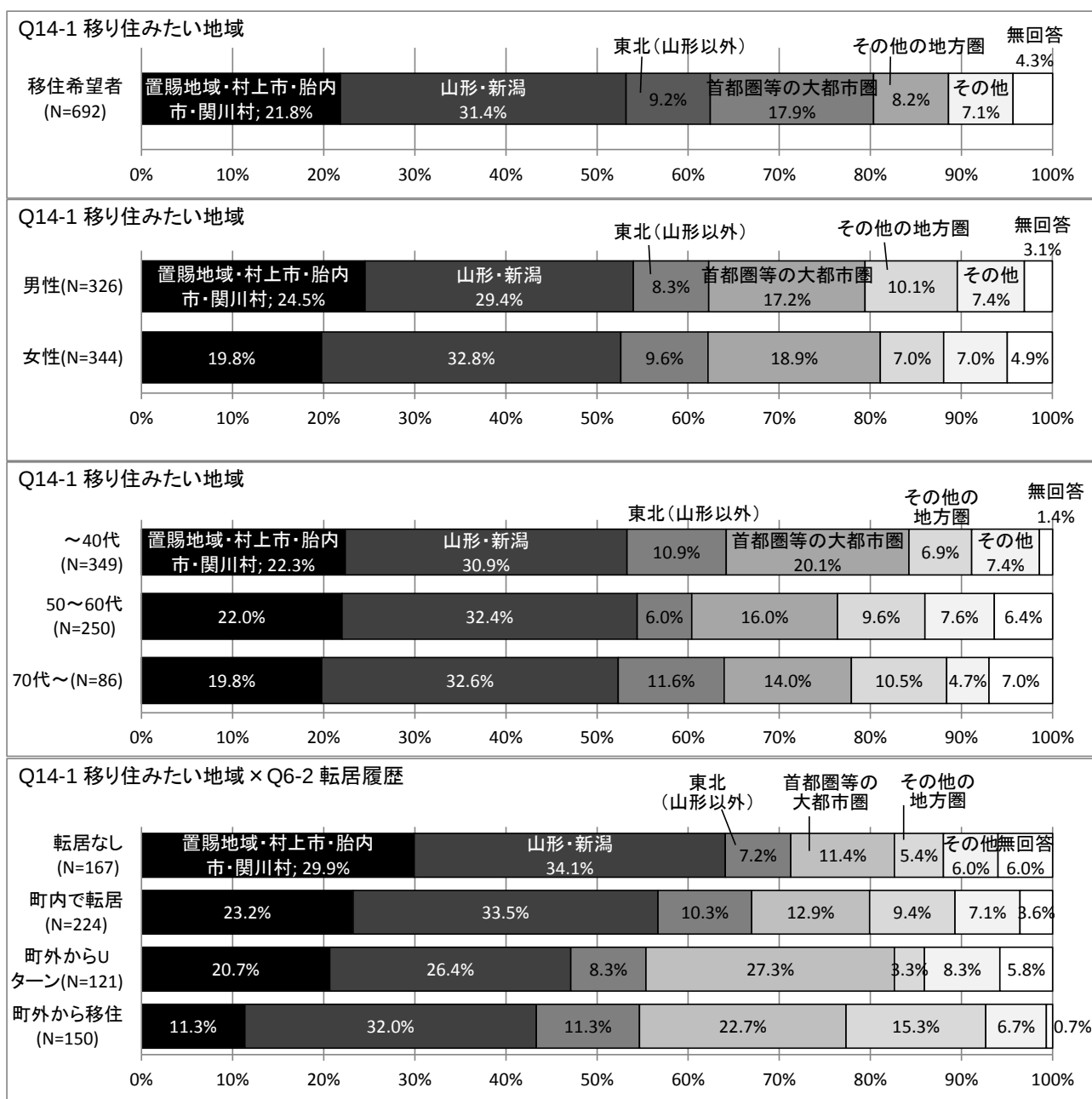
Q14 あなたは、将来も小国町に住み続けたいですか。(○は1つ)

- 半数以上の住民は小国町に住み続けたい（「ずっと住み続けたい」＋「できれば住み続けたい」と考えている。
- 居住継続意向は高齢世代になるほど強く、逆に 40 代までの比較的若い世代の約 25%は「移住したい」又は「移住せざるをえない」、約3割は「今はわからない・何ともいえない」としている。
- 転居履歴とのクロスでみると、転居経験がない人の約3分の1は「ずっと住み続けたい」としており、「できれば住み続けたい」と併せると約6割が住み続けたいとしている一方、町外から移住してきた人は2割強が「移住したい」としている。
- 町への愛着の有無と定住意向の相関は非常に強く、「とても愛着を感じる」人の6割は「ずっと住み続けたい」としているが、「全く愛着は感じない」人の半数近くは「移住したい」としている。



Q14-1 Q14で③または④と答えた方にお聞きします。移り住みたい地域を教えてください。(〇は1つ)

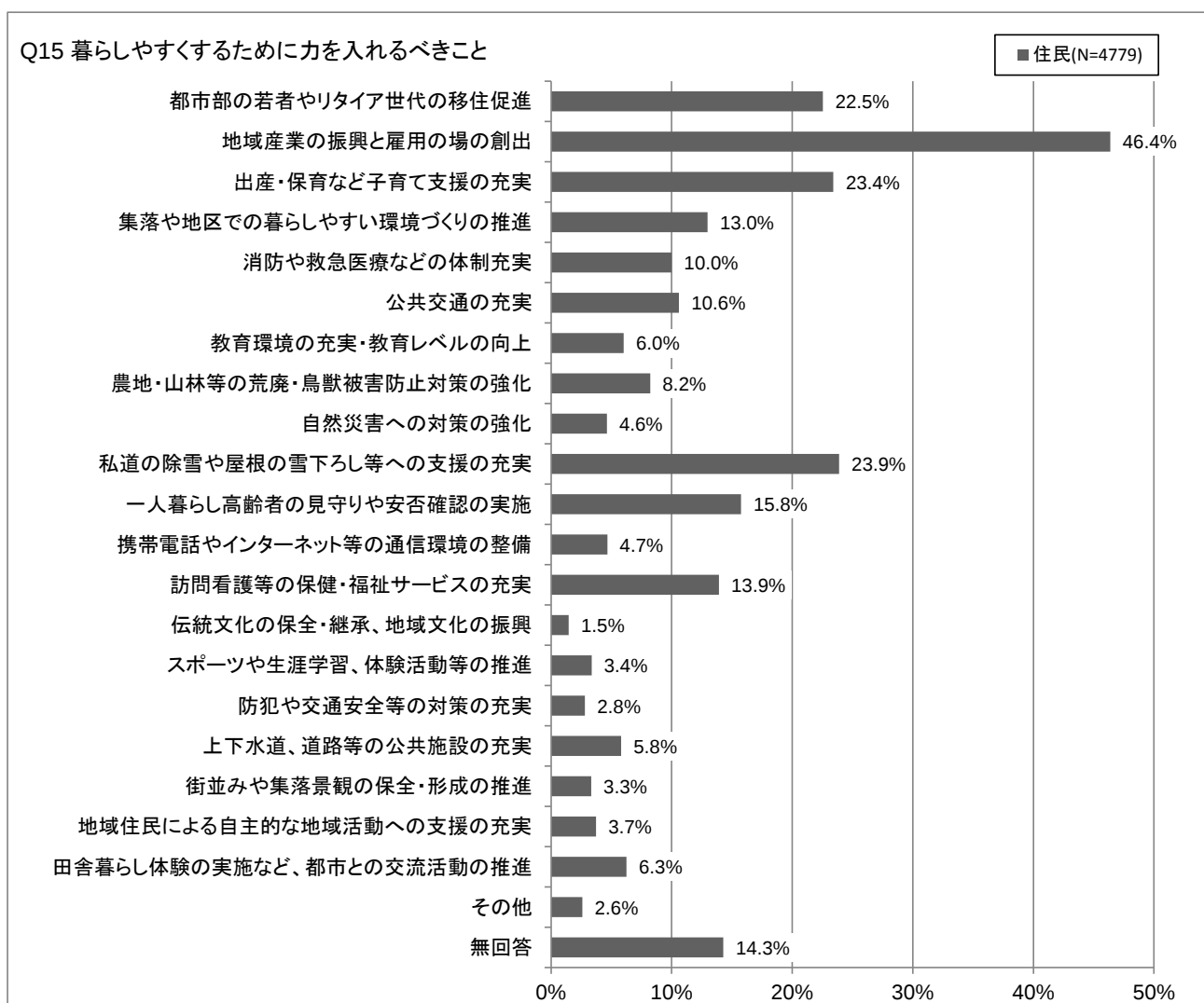
- 「移住したい」又は「移住せざるを得ない」と回答した人に対し、希望する移住先を聞いたところ、「置賜地域・新潟県村上市・胎内市・関川村」(21.8%)、「それ以外の山形県・新潟県」(31.4%)が多く挙げられている。
- 40代までの比較的若い世代では、「首都圏等の大都市圏」への移住を希望する割合が約2割と、他の世代と比べるとやや高くなっている。
- 転居履歴とのクロスでみると、町外への転居経験がない人は、近隣市町村あるいは山形県・新潟県と比較的町に近い地域への移住を考えているのに対して、町外から転入した人は、近隣地域への移住よりも首都圏等の大都市圏への移住を望む人が多いことが分かる。



(4) これからのまちづくりについて

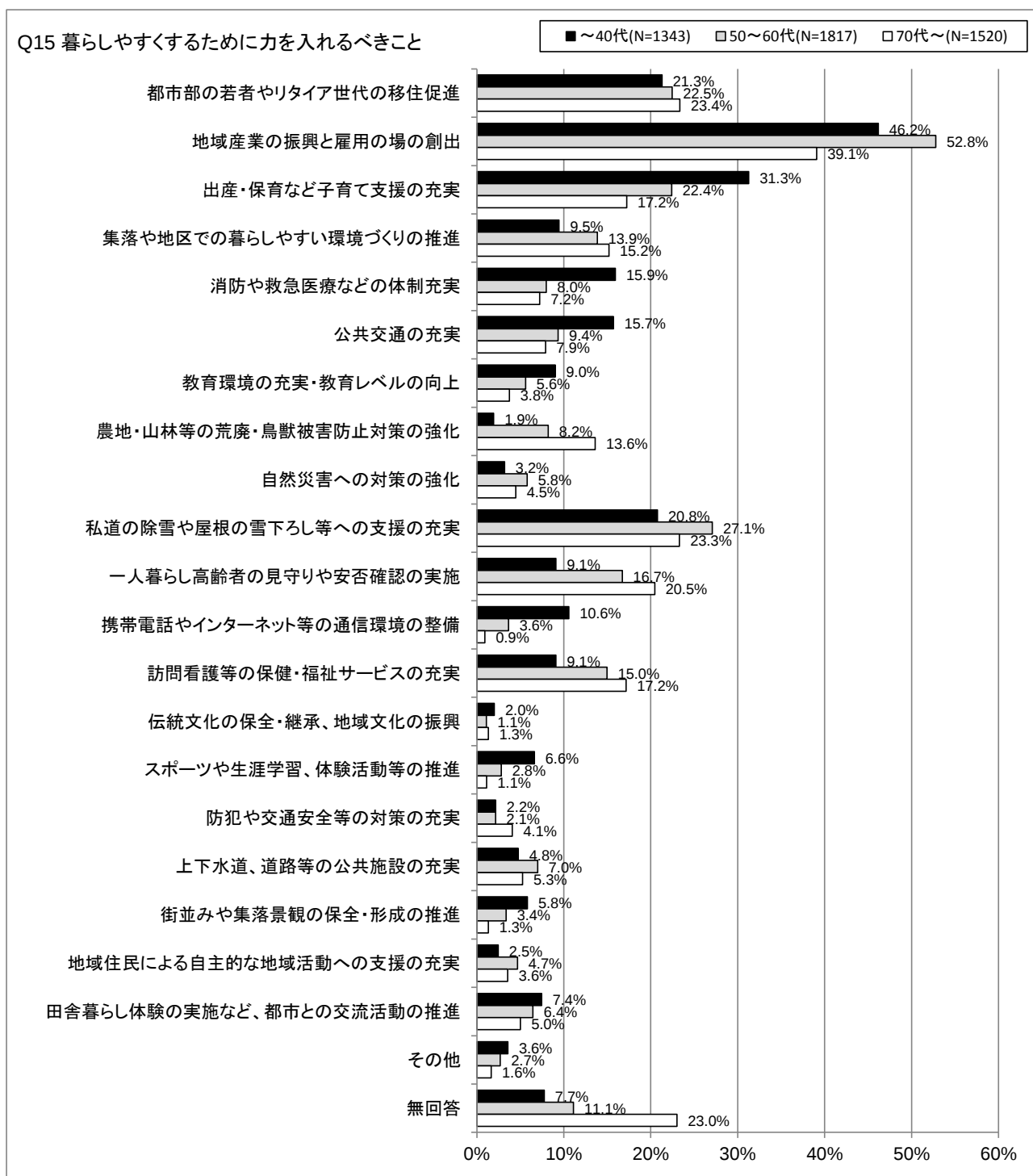
Q15 今後、小国町で暮らしやすくしていくためには、どのようなことに力を入れるべきとお考えですか。(〇は3つまで)

- 町で暮らしやすくしていくために力を入れるべきこととして、上位に挙げられた項目を見ると、第1位が「地域産業の振興と雇用の場の創出」(46.4%)、第2位が「私道の除雪や屋根の雪下ろし等への支援の充実」(23.9%)、第3位が「出産・保育など子育て支援の充実」(23.4%)、第4位が「都市部の若者やリタイア世代の移住促進」(22.5%)となっている。
- これらは、地方版総合戦略で掲げるべき4つの基本目標に合致しており(第1位=しごとづくり、第2位=安全な暮らしづくり、第3位=結婚・出産・子育て支援、第4位=人の流れづくり)、総合戦略の柱となる政策と同様の認識を住民が持っている結果が示されている。



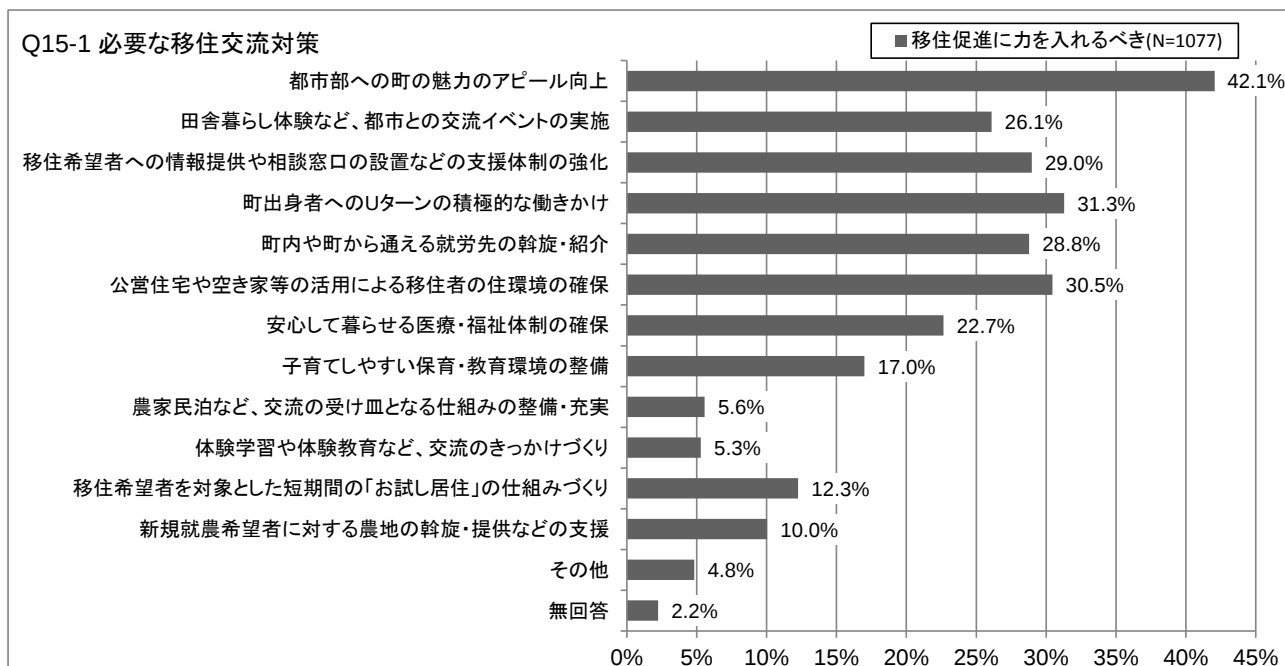
Q15 今後、小国町で暮らしやすくしていくためには、どのようなことに力を入れるべきとお考えですか。(〇は3つまで)

- 世代別で比較すると、「地域産業の振興と雇用の場の創出」についてはいずれの世代でも第1位に挙げられているが、特に50～60代では52.8%と高い割合となっている。
- 40代までの比較的若い世代では「出産・保育など子育て支援の充実」が3割強と高齢世代より高く、消防・医療体制や公共交通の充実についても若い世代の方が高い割合となっている。
- 一方、高齢世代では、「一人暮らし高齢者の見守りや安否確認の実施」や「訪問看護等の保健・福祉サービスの充実」を求める声がより多く聞かれている。



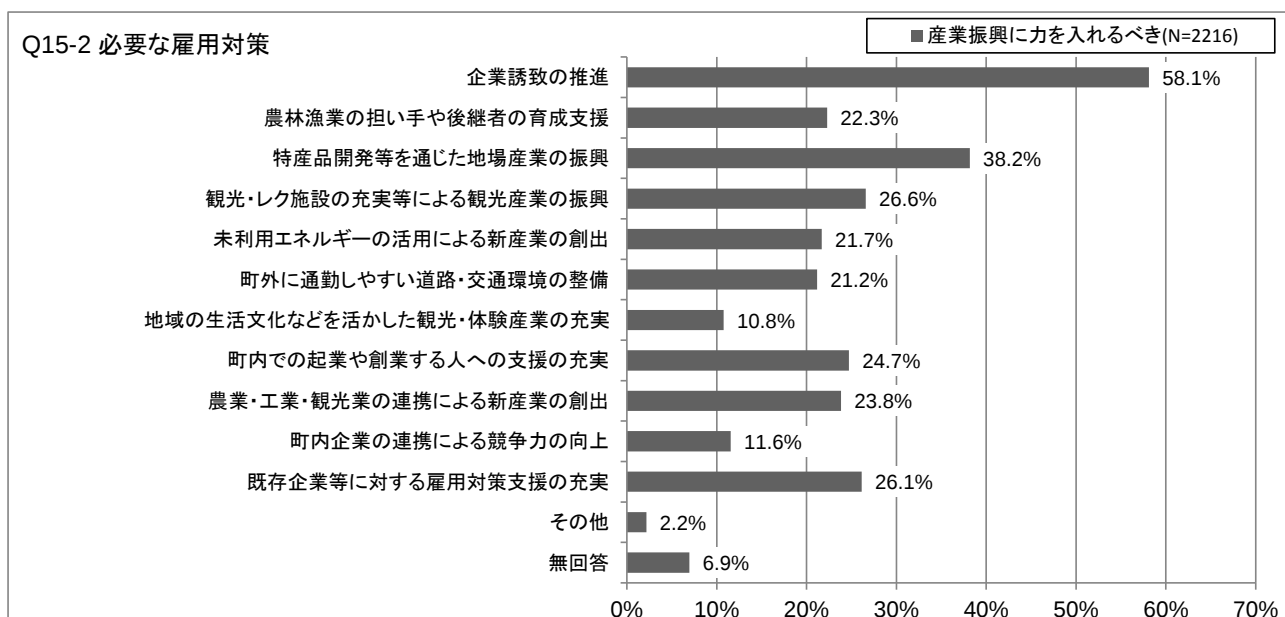
Q15-1 Q15で①を選択した方に伺います。都市部から小国町への移住や交流を活発にしていくためにはどのような対策が必要とお考えですか。(〇は3つまで)

- 総合戦略の柱ごとに必要な対策を具体的に聞いたところ、まず「ひとの流れ（移住交流対策）」については、「都市部への町の魅力のアピール向上」が最も必要とされ、次いで「町出身者への U ターンの積極的な働きかけ」が高い割合となった。



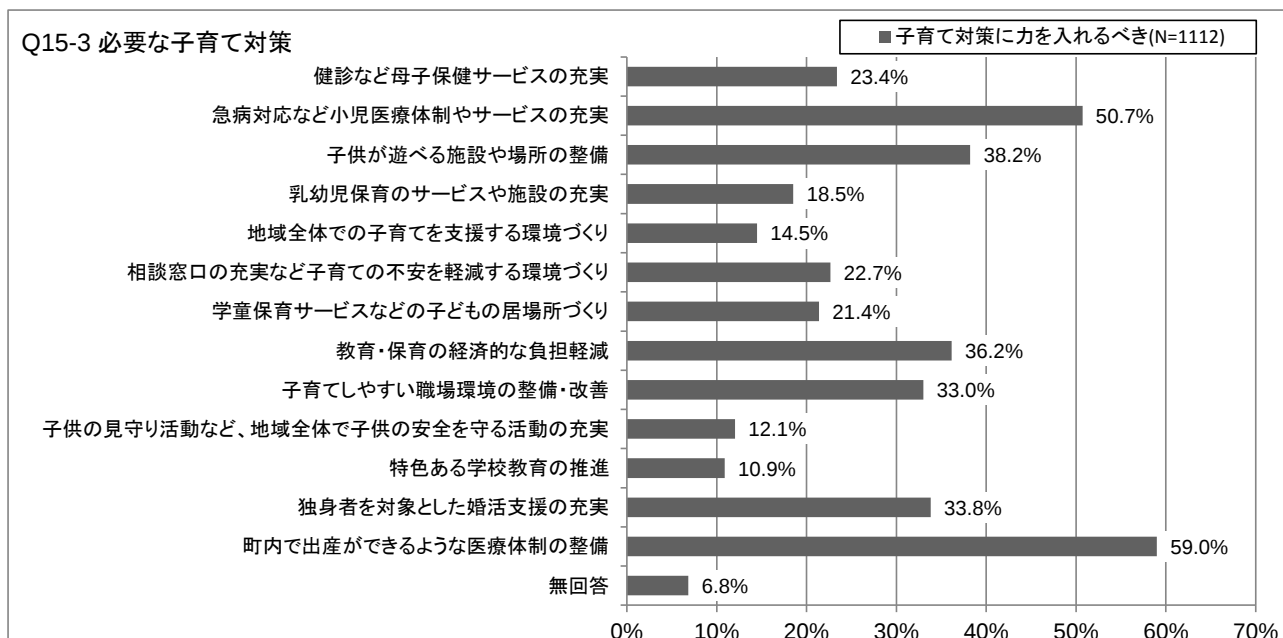
Q15-2 Q15で②を選択した方に伺います。今後、小国町で雇用の場を増やしていくためにはどのような対策が必要とお考えですか。(〇は3つまで)

- 「しごとづくり（雇用対策）」に関しては、「企業誘致の推進」が 58.1%と最も必要とされたほか、「特産品開発等を通じた地場産業の振興」も 4 割近くから必要な対策として挙げられている。



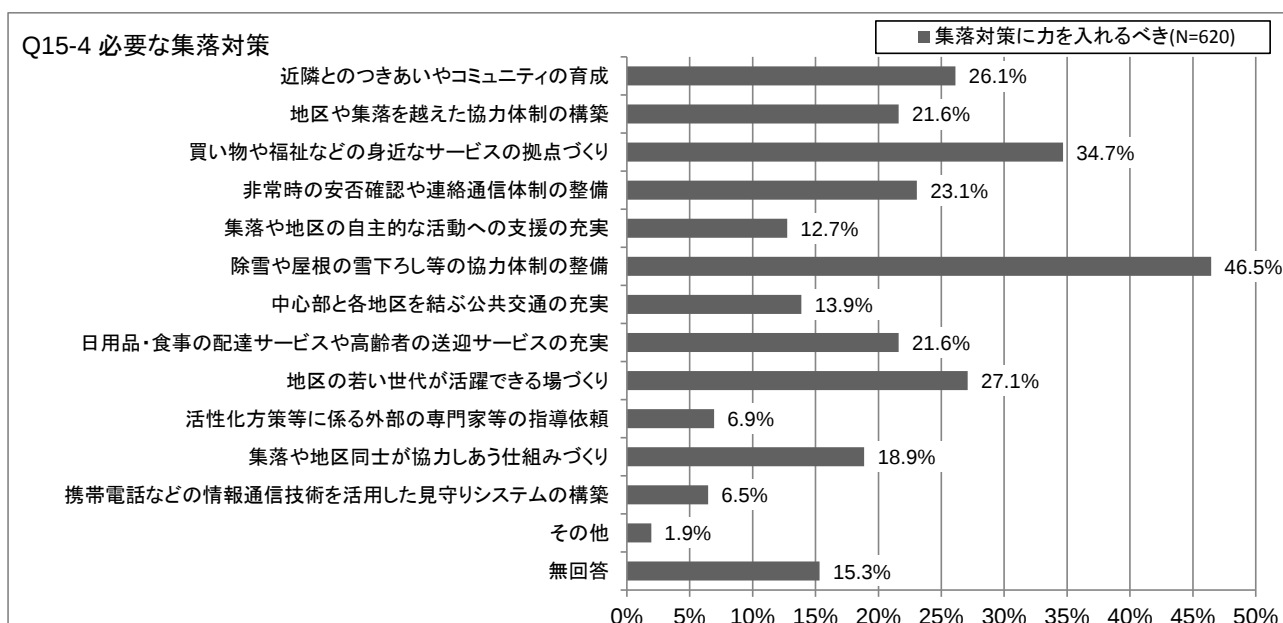
Q15-3 Q15で③を選択した方に伺います。小国町での出産や子育ての推進にはどのような対策が必要とお考えですか。(〇は3つまで)

- 「子育て対策」についてみると、「町内で出産ができるような医療体制の整備」が 59.0%と第1位に挙げられているほか、「急病対応など小児医療体制やサービスの充実」を求める声も半数以上～挙げられている。



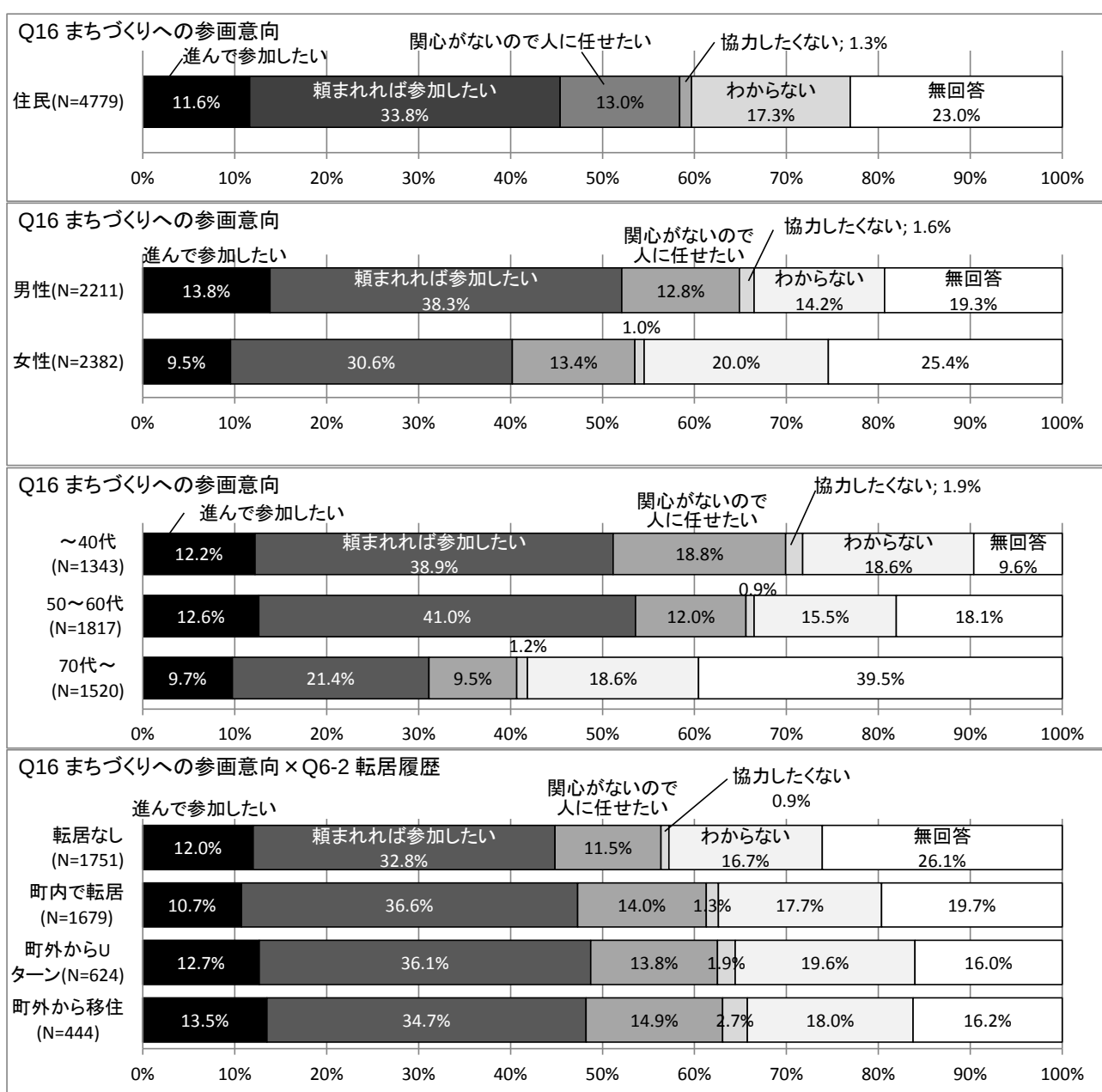
Q15-4 Q15で④を選択した方に伺います。地区や集落で住みやすくするためにはどのような対策が必要とお考えですか。(〇は3つまで)

- 「まちづくり（集落対策）」に関しては、「除雪や屋根の雪下ろし等の協力体制の整備」が第1位に挙げられているほか、国の総合戦略の主要プロジェクトに位置づけられている「小さな拠点」づくりに相当する対策（買い物や福祉などの身近なサービスの拠点づくり）を望む声も高い。



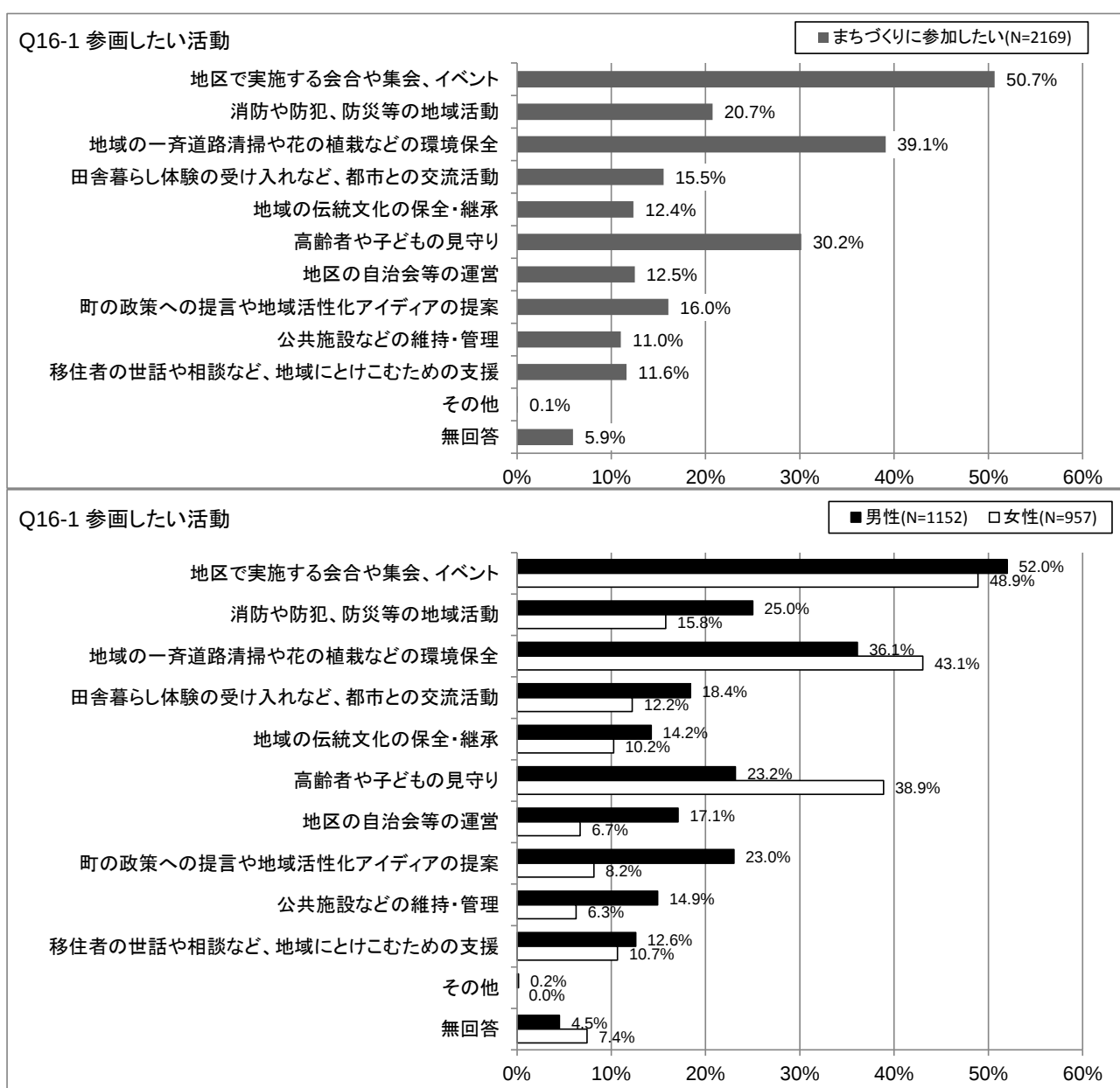
Q16 これからの地域づくりに向けては住民参加が求められていますが、これについてあなたはどのようにお考えですか。(〇は1つ)

- まちづくりへの住民参加に対する考えとして、1割強は「進んで参加したい」、3割強は「頼まれれば参加したい」としており、約45%の住民は今後のまちづくりに参画意向を示している。
- 性別で比較すると、男性の方が参画意向は高く、5割以上が参加したいとしている。
- 世代別で比較すると、「進んで参加したい」と「頼まれれば参加したい」と合わせた割合は50～60代で最も高くなっている。また、40代までの比較的若い世代では、「進んで参加したい」が12.2%と比較的高い一方で、「関心がないので人に任せたい」も18.8%と高く、関心の高い層と低い層に分かれている。
- 転居履歴とのクロスでみると、「進んで参加したい」という割合は転居経験の有無に関わりなく、むしろ町外から移住した人で13.5%と最も高くなっている。



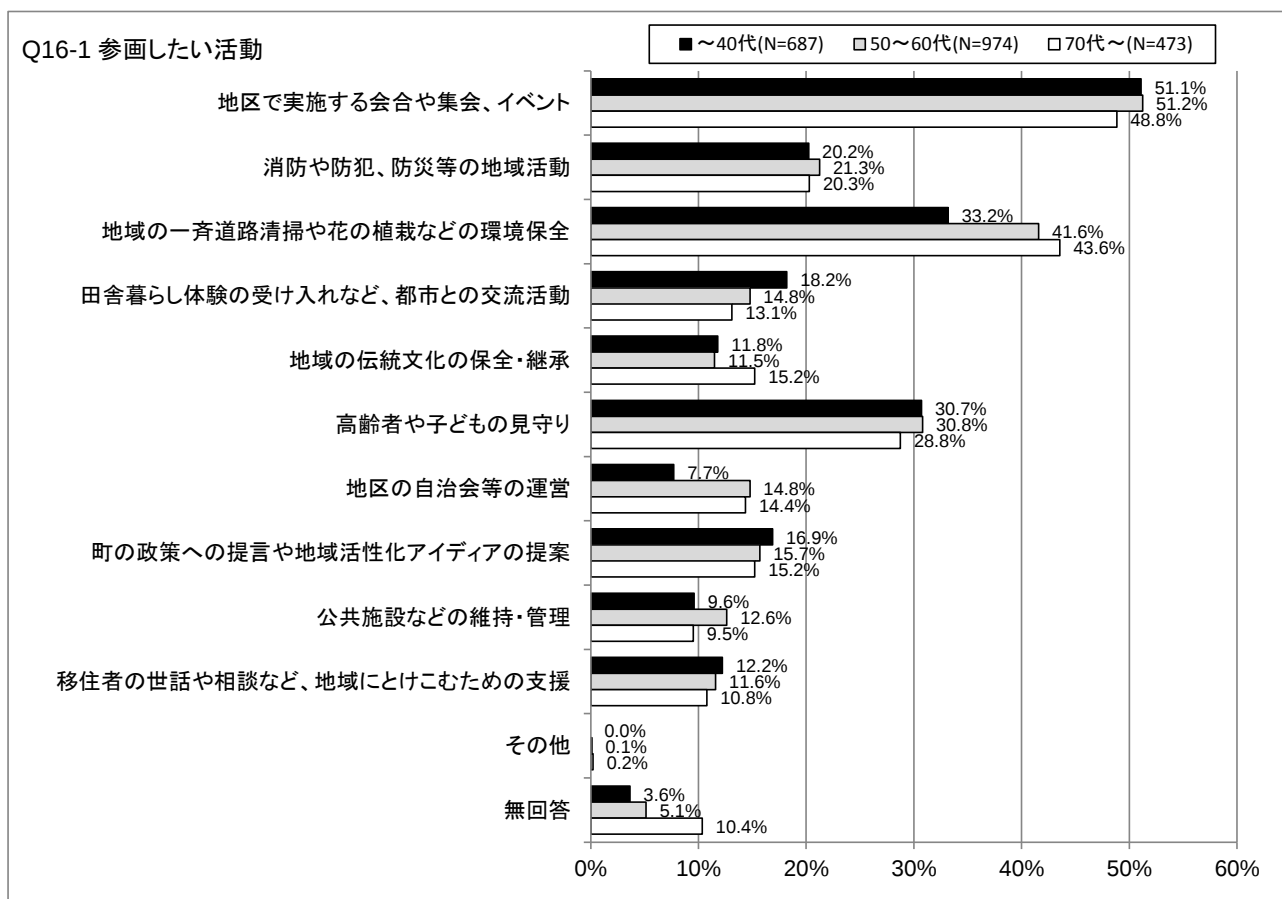
Q16-1 Q16で①または②を選択した方に伺います。どのような活動に参加したいですか。(〇はいくつでも)

- 今後のまちづくり活動に参加したいと回答した人に対し、参画したい活動の種類を聞いたところ、「地区で実施する会合や集会、イベント」が最も多くから挙げられており、次いで「地域の一斉道路清掃や花の植栽などの環境保全活動」、「高齢者や子どもの見守り」などが多くなっている。
- 男女で比較すると、「地区で実施する会合や集会、イベント」は男女とも5割前後と高いが、「地域の一斉道路清掃や花の植栽などの環境保全活動」や「高齢者や子どもの見守り」については女性においてより参画意向が高くなっている。
- 男女で最も差が大きかった活動は、「町の政策への提言や地域活性化アイデアの提案」であり、男性は2割強が参画意向を示している。



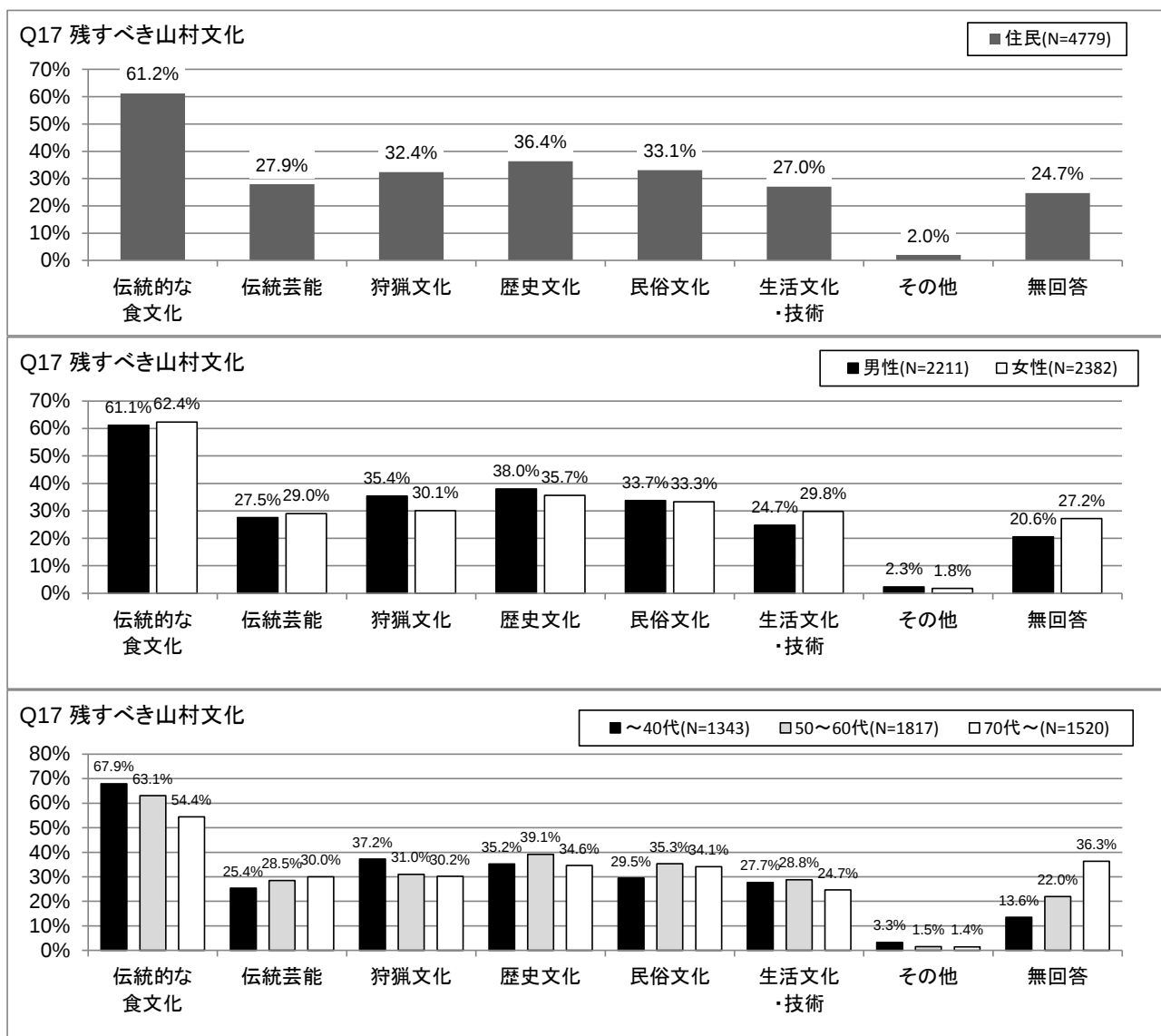
Q16-1 Q16で①または②を選択した方に伺います。どのような活動に参加したいですか。(〇はいくつでも)

- 参加したい地域活動について世代別で比較すると、「地区で実施する会合や集会、イベント」についてはどの世代でも高い参画意向が示されているのに対し、環境保全活動については高齢世代の方がより参画意向が高くなっている。
- 「田舎暮らし体験の受入れなど、都市との交流活動」や「町の政策への提言や地域活性化アイデアの提案」については、40歳までの比較的若い世代が高齢世代より高い参画意向を示している。



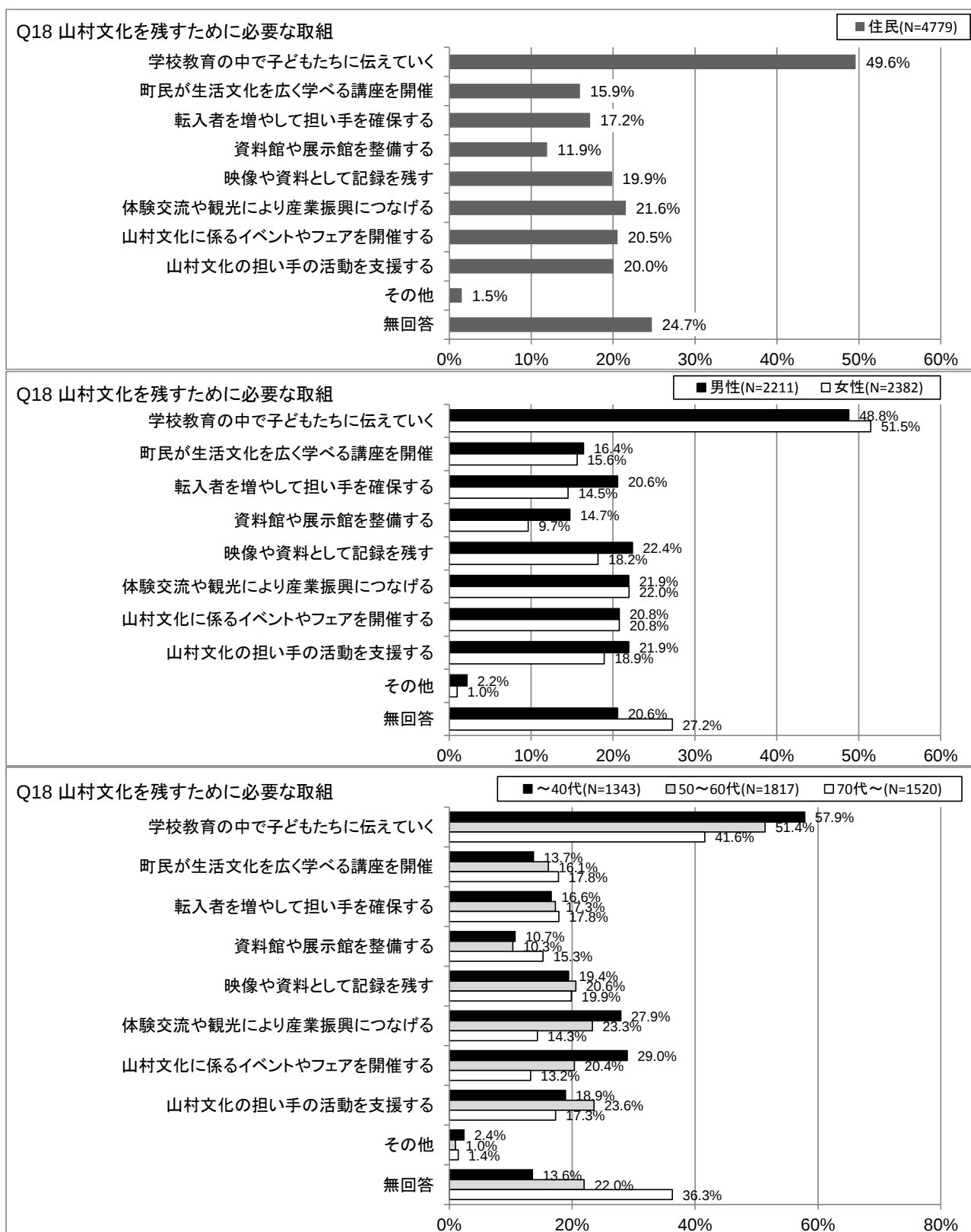
Q17 小国町には全国的にみても独特な山村文化があります。こうした小国町の文化のうち、あなたが後世に残したいと思うものは何ですか。(〇はいくつでも)

- 小国町の魅力を高めるためには独特の山村文化の保全・継承が重要となるが、住民の6割強は、後世に残すべき小国町独特の山村文化として「伝統的な食文化」を挙げており、他の項目を大きく引き離している。
- 性別で比較しても大きな違いは見られないが、世代別でみると、「伝統的な食文化」は若い世代の方がより残すべき山村文化としての評価が高くなっている。



Q18 小国町独自の山村文化を後世に継承していくためにはどのような取組が必要とお考えですか。(〇はいくつでも)

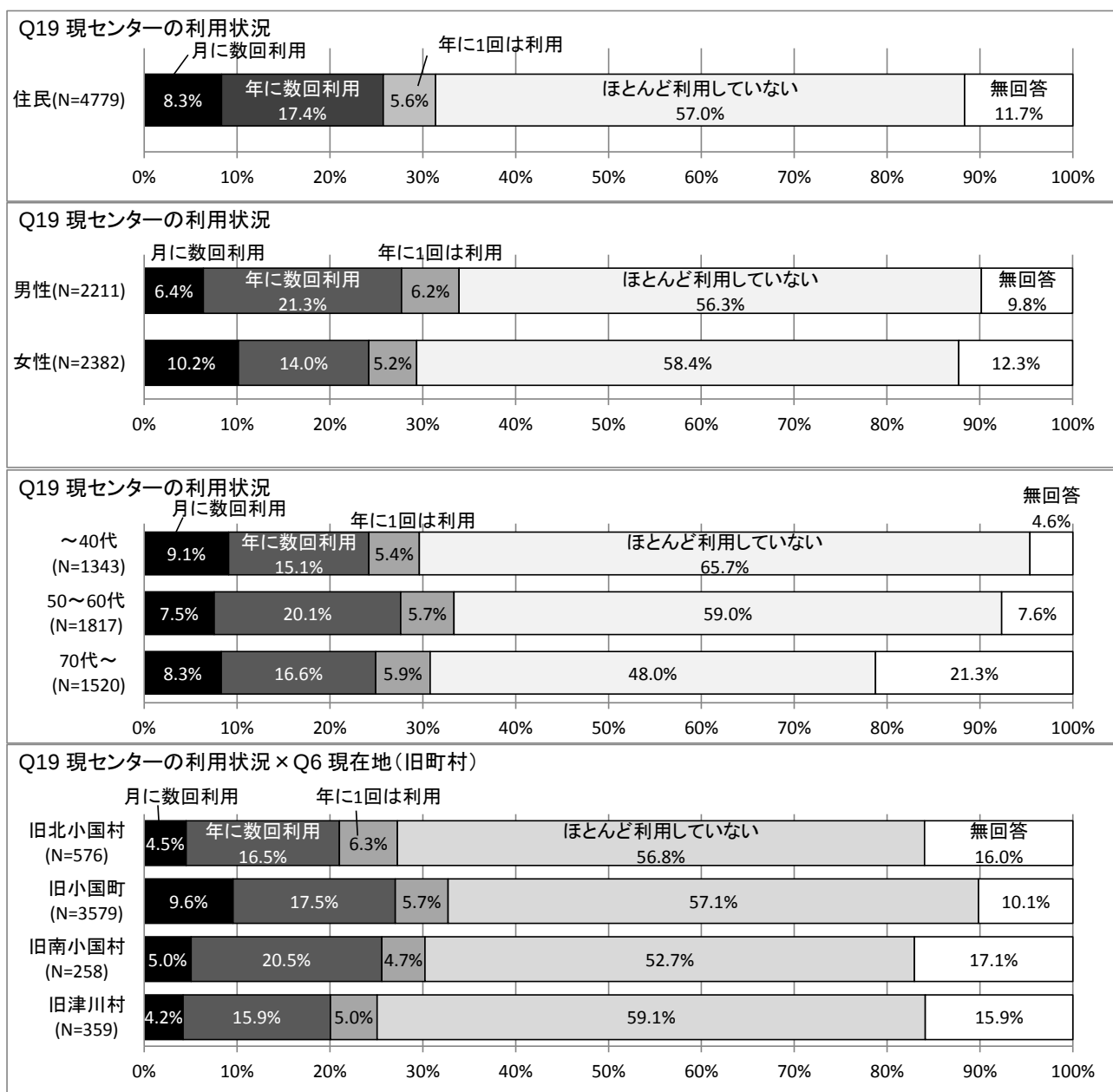
- 町独自の山村文化を後世に残すために必要な取組としては、「学校教育の中で子どもたちに伝えていく」が約半数から挙げられており、女性の方が、また若い世代の方がその割合は高い。



(5) まちづくりの拠点施設について

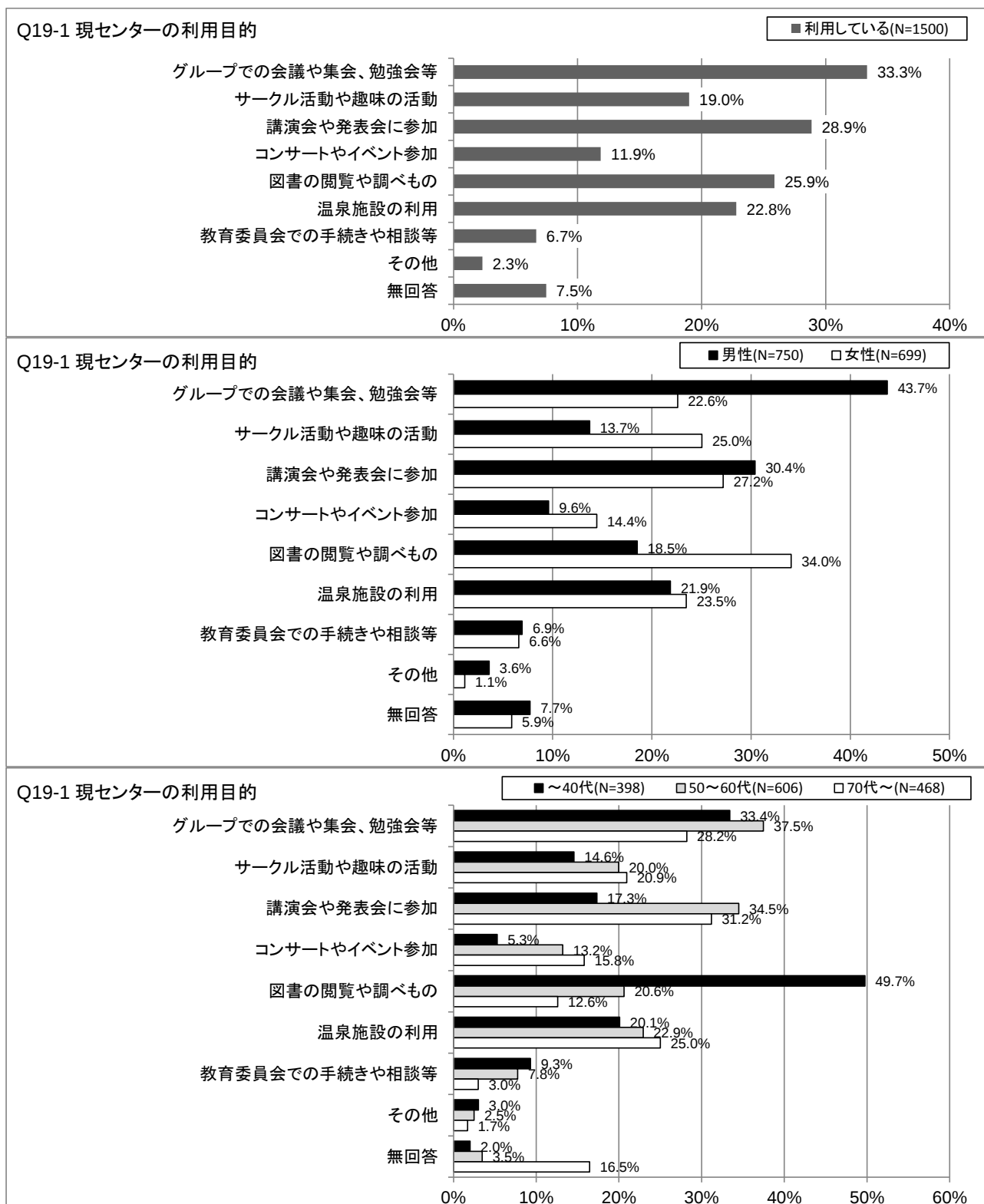
Q19 あなたは、おぐに開発総合センターをどのくらい利用していますか。(〇は1つ)

- 現センターを年に1回以上利用している町民は約35%で、6割近くは「ほとんど利用していない」としている。
- 「月に数回程度」利用しているのは1割弱であり、その割合は女性の方が高い。
- 世代別でみても、利用状況にあまり大きな違いは見られない。
- 居住地区別でみると、現センターが立地する旧小国町の住民が最も利用頻度が高く、「月に数回利用」も1割近くみられる。



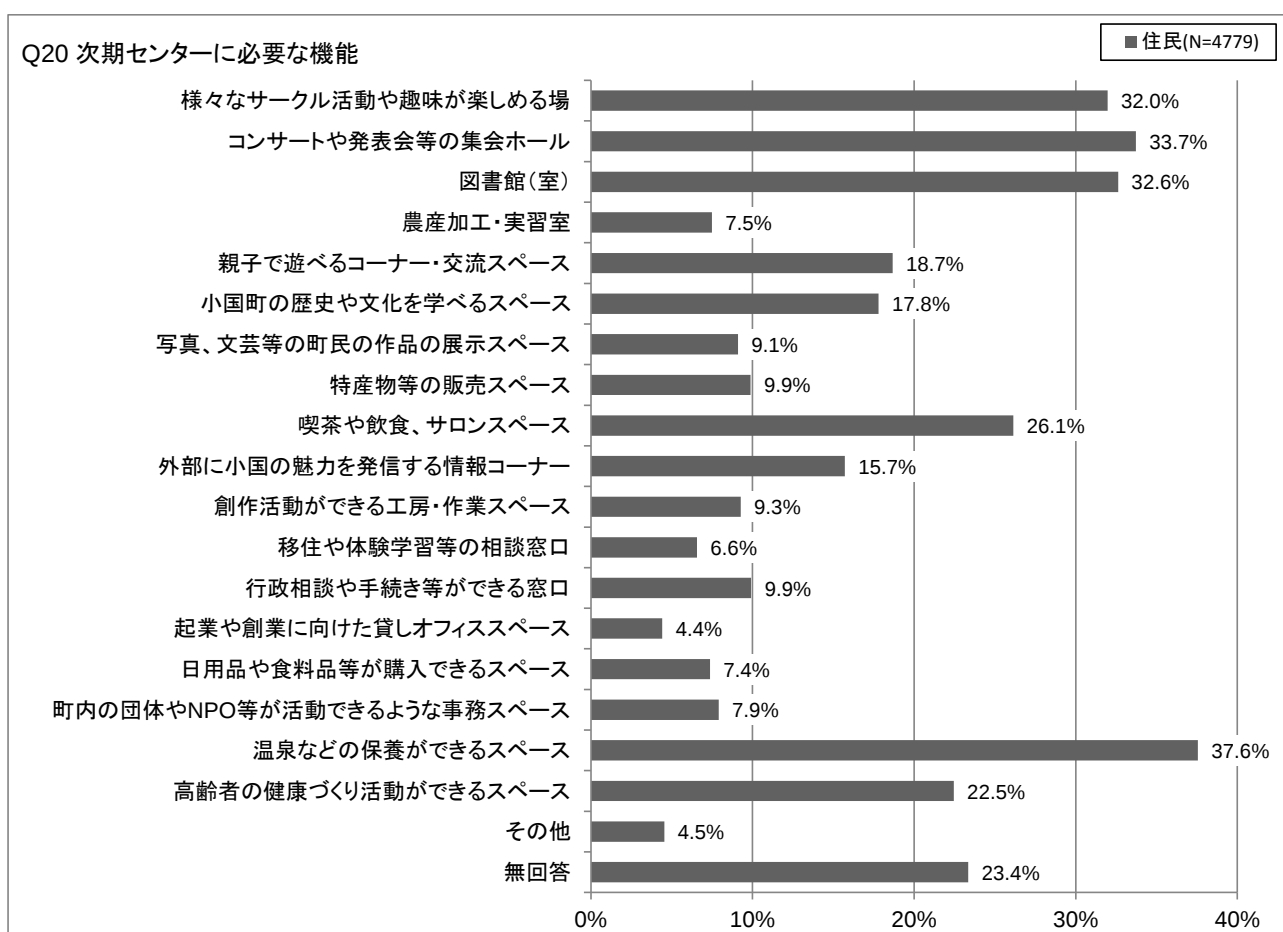
Q19-1 Q19で①～⑥を選択した方に伺います。どのような目的で利用していますか。(〇は3つまで)

- 現センターの利用目的は男女で異なり、男性は「グループでの会議や集会、勉強会等」が、女性は「図書の閲覧や調べもの」が多くなっている。
- 世代別でみると、40代までの比較的若い世代は「図書の閲覧や調べもの」での利用が多く、50代以上になると「講演会や発表会に参加」が多くみられる。



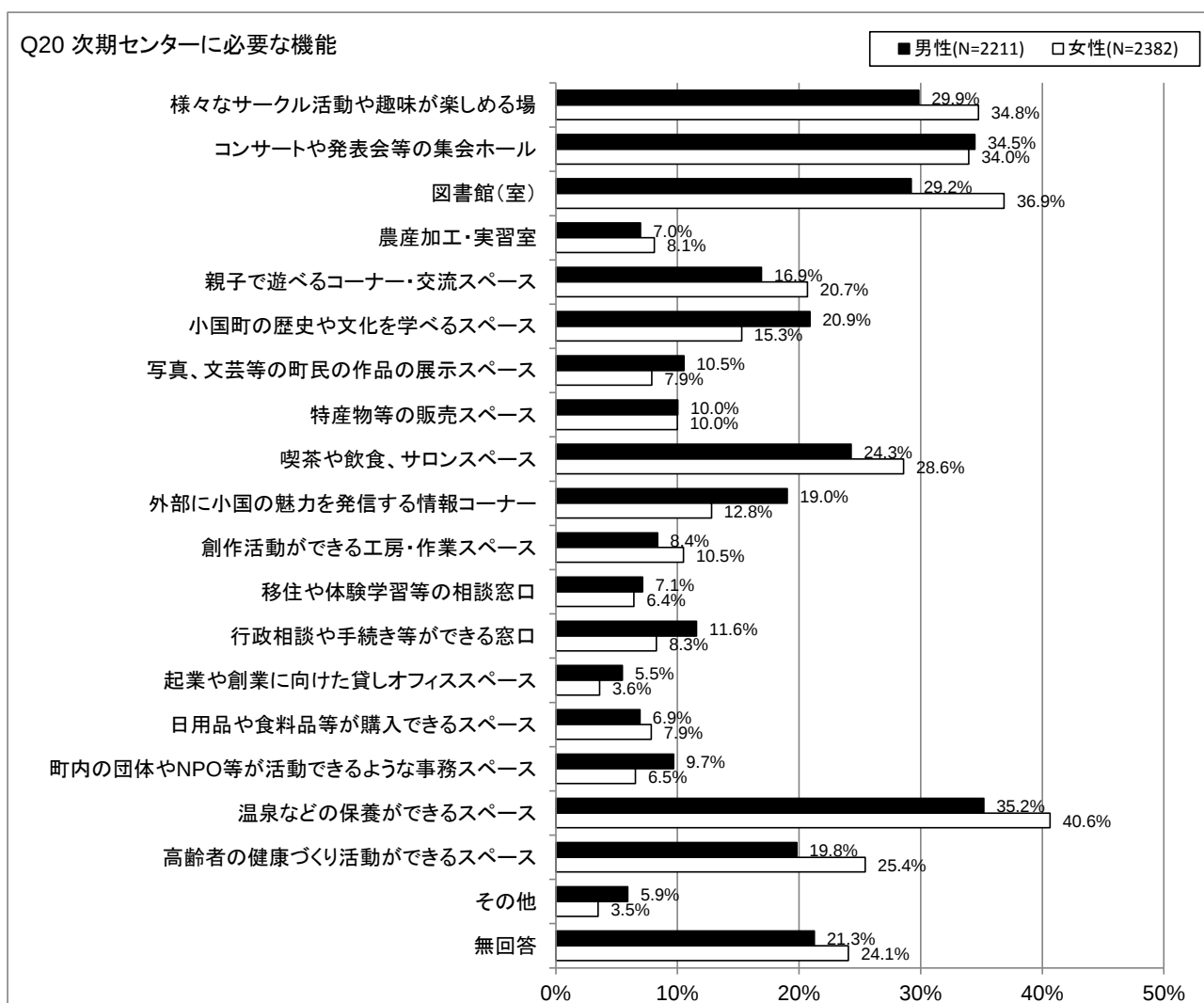
Q20 これからのまちづくりの拠点施設として、おぐに開発総合センターを建替えるとした場合、どのような機能が必要とお考えですか。(〇はいくつでも)

- 現センターに代わるまちづくりの拠点施設（次期センター）にどのような機能が求められているかをみると、最も必要とされている機能は「温泉等の保養スペース」（37.6%）であった。
- これに次いで、「コンサートや発表会等の集会ホール」や「図書館（室）」、「様々なサークル活動や趣味が楽しめる場」など3割超から必要な機能として挙げられている。
- 上位に挙げられた機能のうち、現センターにない機能として、「喫茶や飲食、サロンスペース」（26.1%）が第5位に挙げられている。



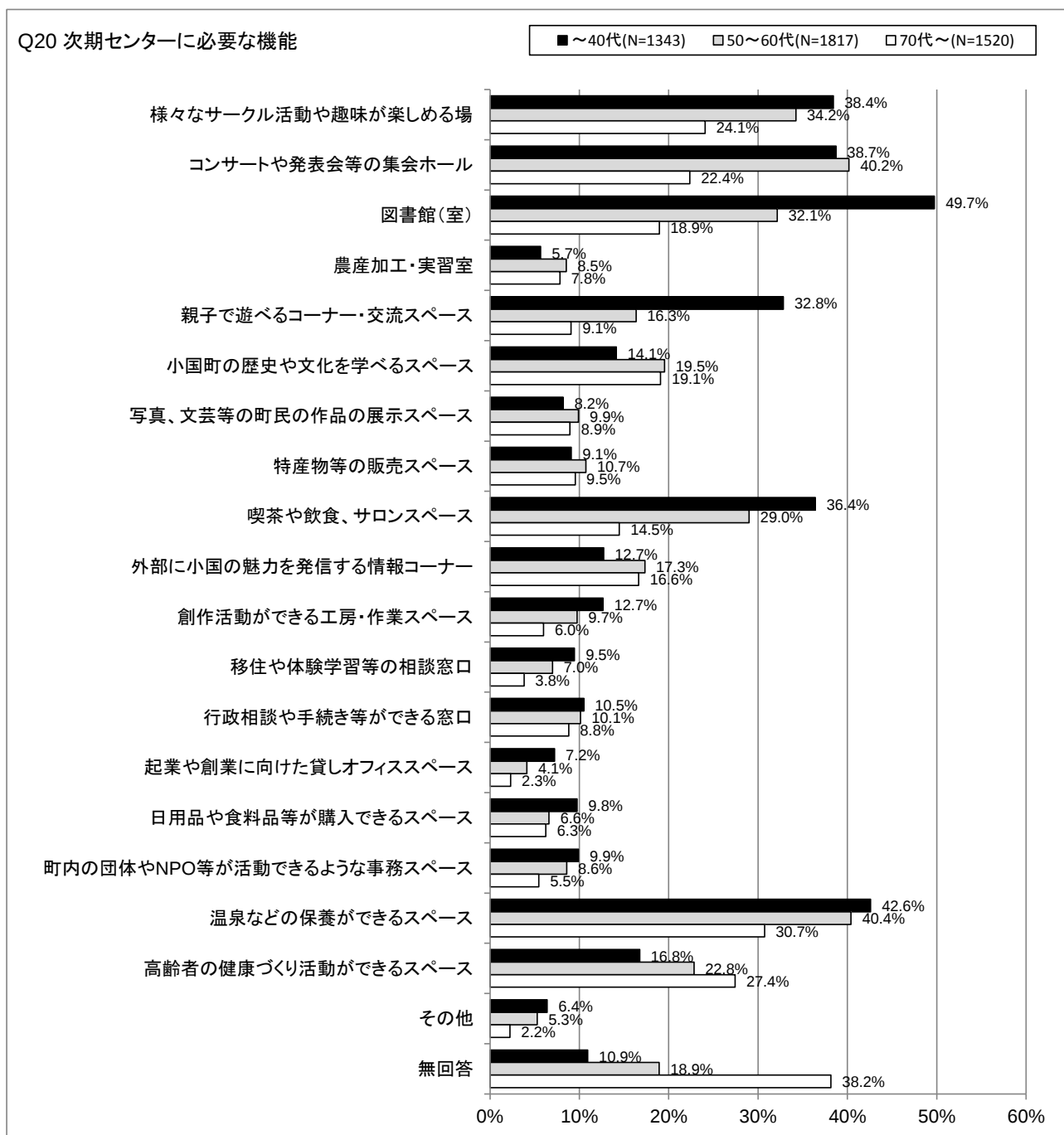
Q20 これからのまちづくりの拠点施設として、おぐに開発総合センターを建替えるとした場合、どのような機能が必要とお考えですか。(〇はいくつでも)

- 次期センターに望む機能について、性別で比較すると、「温泉などの保養ができるスペース」や「図書館(室)」、「様々なサークル活動や趣味の会が楽しめる場」、「高齢者の健康づくり活動ができるスペース」、「喫茶や飲食、サロンスペース」、「親子で遊べるコーナー・交流スペース」など、保養や交流のための機能については、男性より女性から多く求められていることが分かる。
- 一方、男性の方が女性より高い割合となっているものとしては、「小国町の歴史や文化を学べるスペース」や「外部に小国の魅力を発信する情報コーナー」、「行政相談や手続き等ができる窓口」、「町内の団体やNPO等が活動できる事務スペース」などが挙げられる。



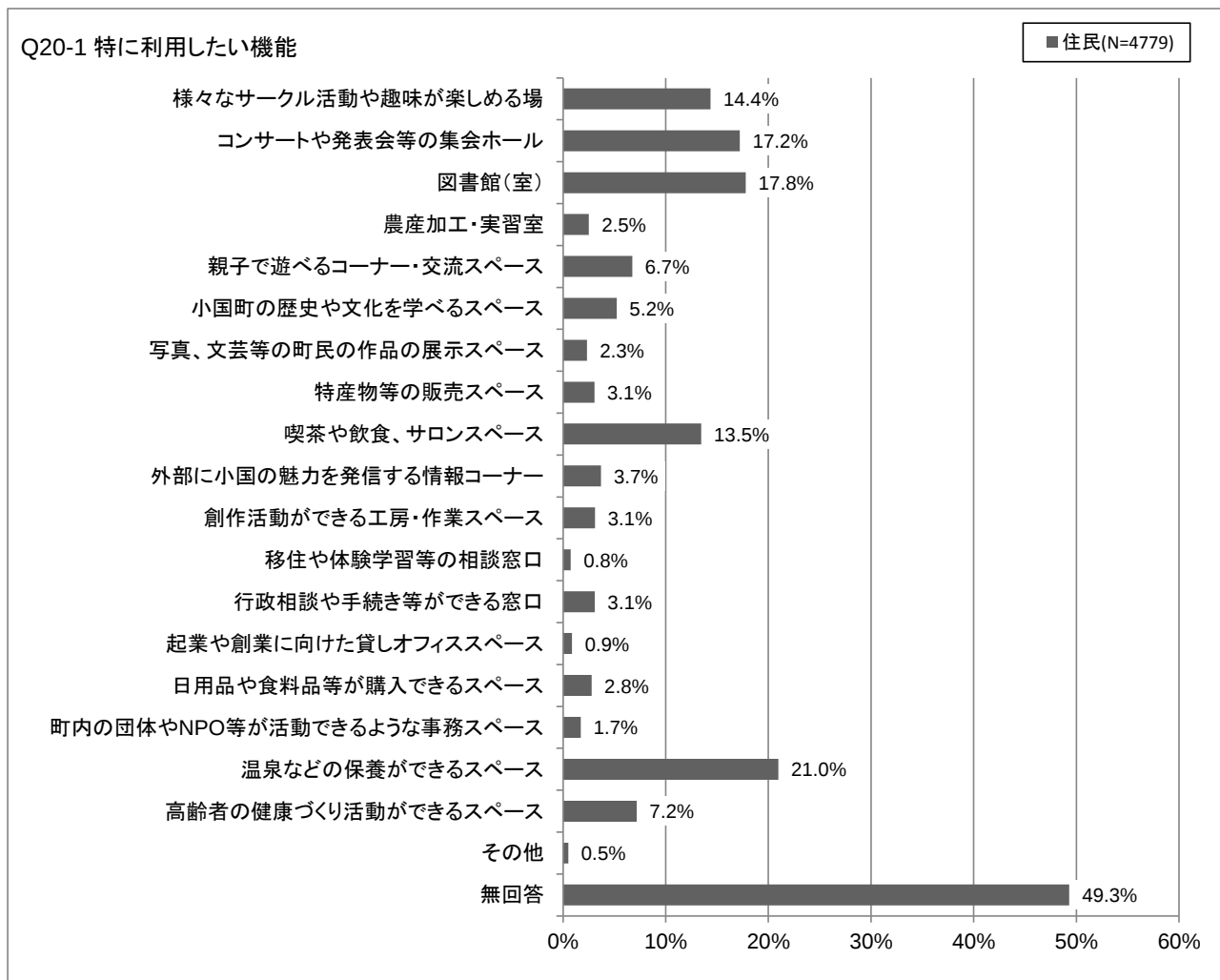
Q20 これからのまちづくりの拠点施設として、おぐに開発総合センターを建替えるとした場合、どのような機能が必要とお考えですか。(〇はいくつでも)

- 次期センターに望む機能について、世代別でみると、「図書館（室）」は40代までの比較的若い世代の約半数が必要としているほか、「温泉などの保養ができるスペース」や「喫茶や飲食、サロンスペース」、「親子で遊べるコーナー・交流スペース」なども40代までの比較的若い世代でより望まれている。
- 一方、高齢世代では「高齢者の健康づくり活動ができるスペース」を求める声が比較的多い。



Q20-1 Q20で選択した機能の中で、特に利用したいと思うものはどれですか。(3つまで)

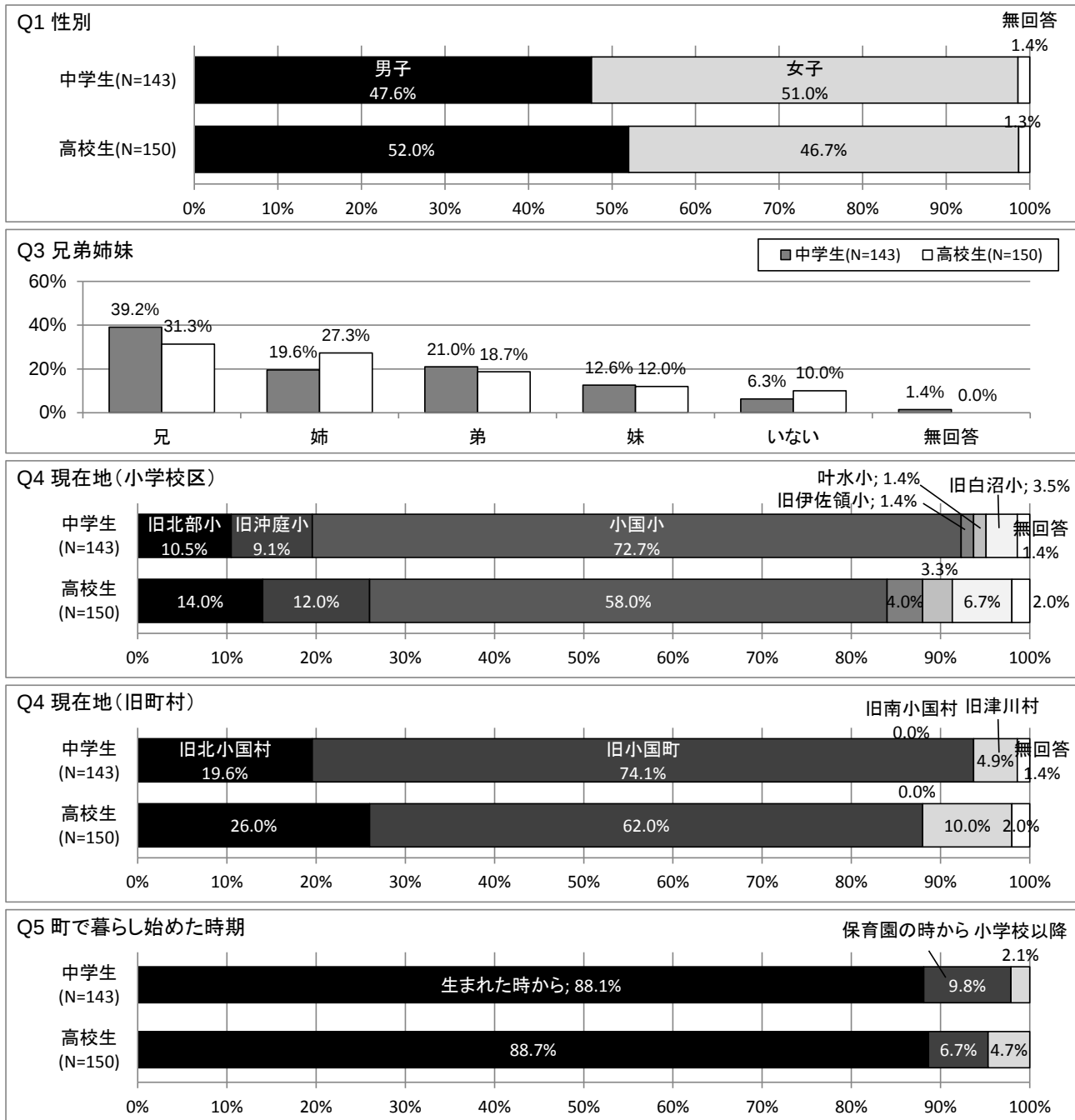
- 次期センターに求める機能のうち特に利用したいものについては無回答が多かったが、回答された中では、「温泉等の保養ができるスペース」が2割強と最も高い割合となった。



2-2. 中学生・高校生アンケートの結果

(1) 回答者属性

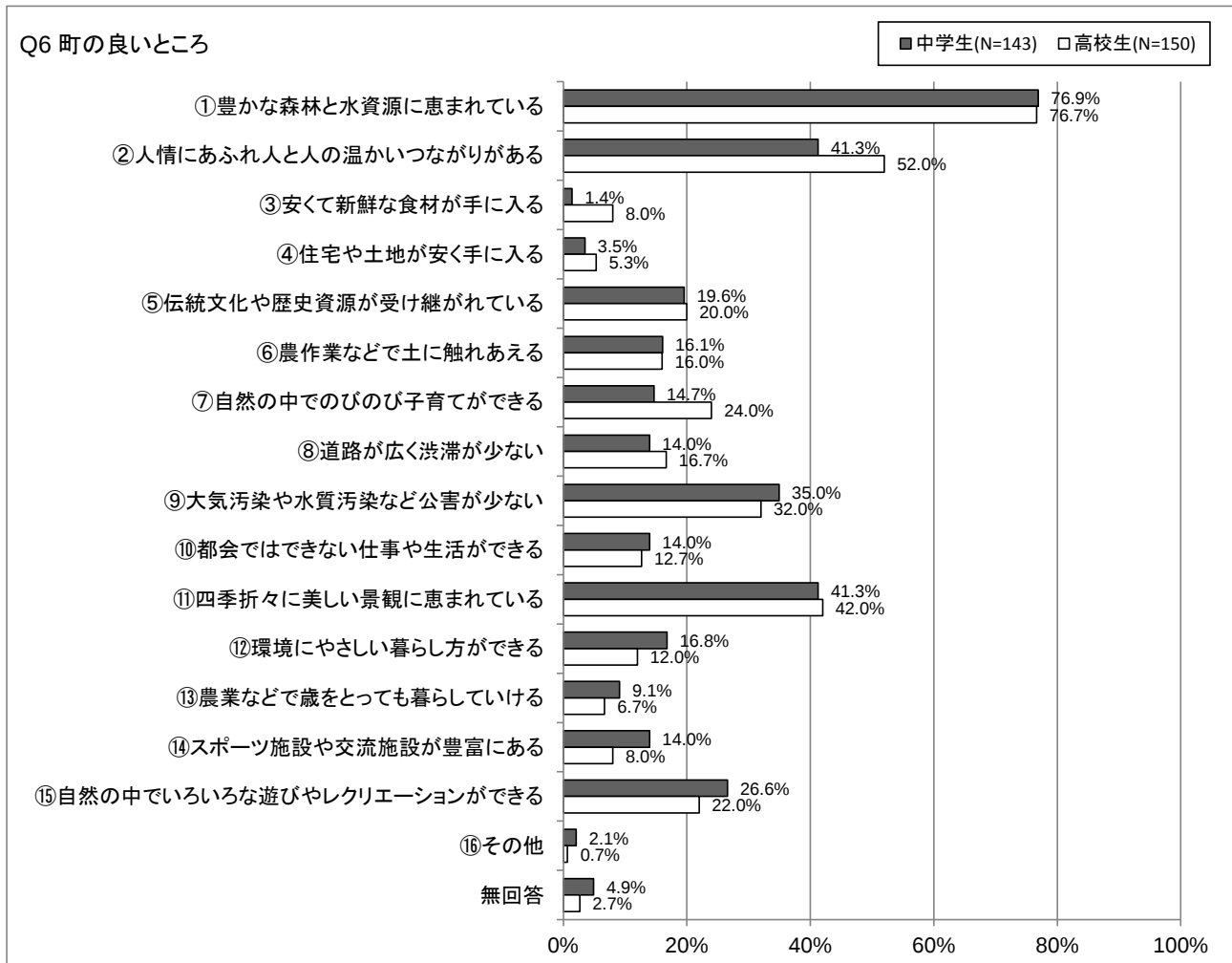
- 回答した中学生・高校生それぞれで性別をみると、中学生は女子の方が、高校生は男子の方がやや多くなっている。
- 回答した中学生・高校生の大部分は小国小学校区に住んでいる。
- 小国町で暮らし始めた時期についてみると、中学生・高校生ともに「生まれた時から」が9割近くを占めている。



(2) 小国町の魅力・イメージ

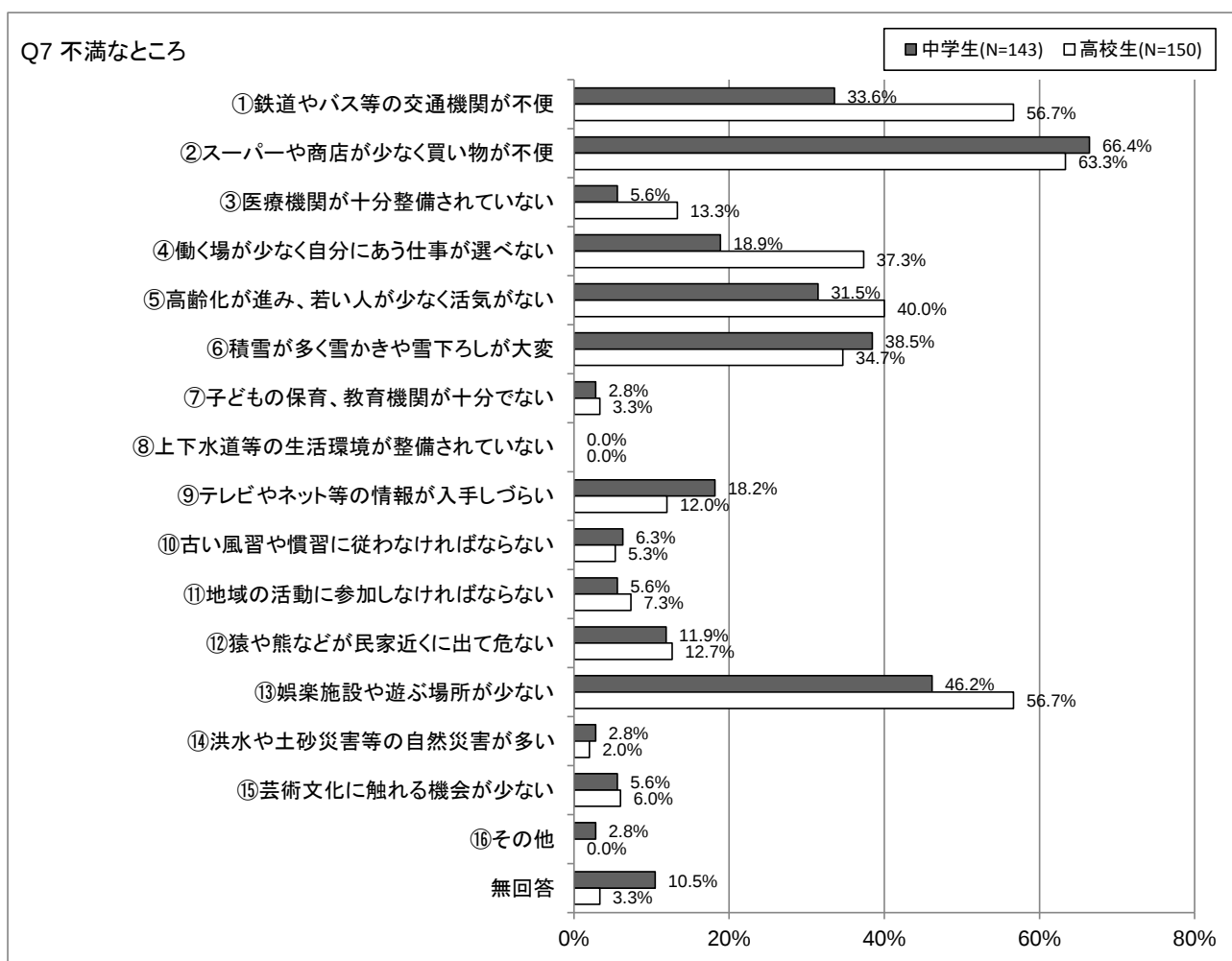
Q6 あなたにとって、小国町の良いところは何ですか。(〇は5つまで)

- 町の良いところとしては、中学生・高校生とも「豊かな森林と水資源に恵まれている」が8割近くと突出して高い割合となっている。これに次いで、「人情にあふれ人と人の温かいつながりがある」が第2位に、「四季折々に美しい景観に恵まれている」が第3位に挙げられている。



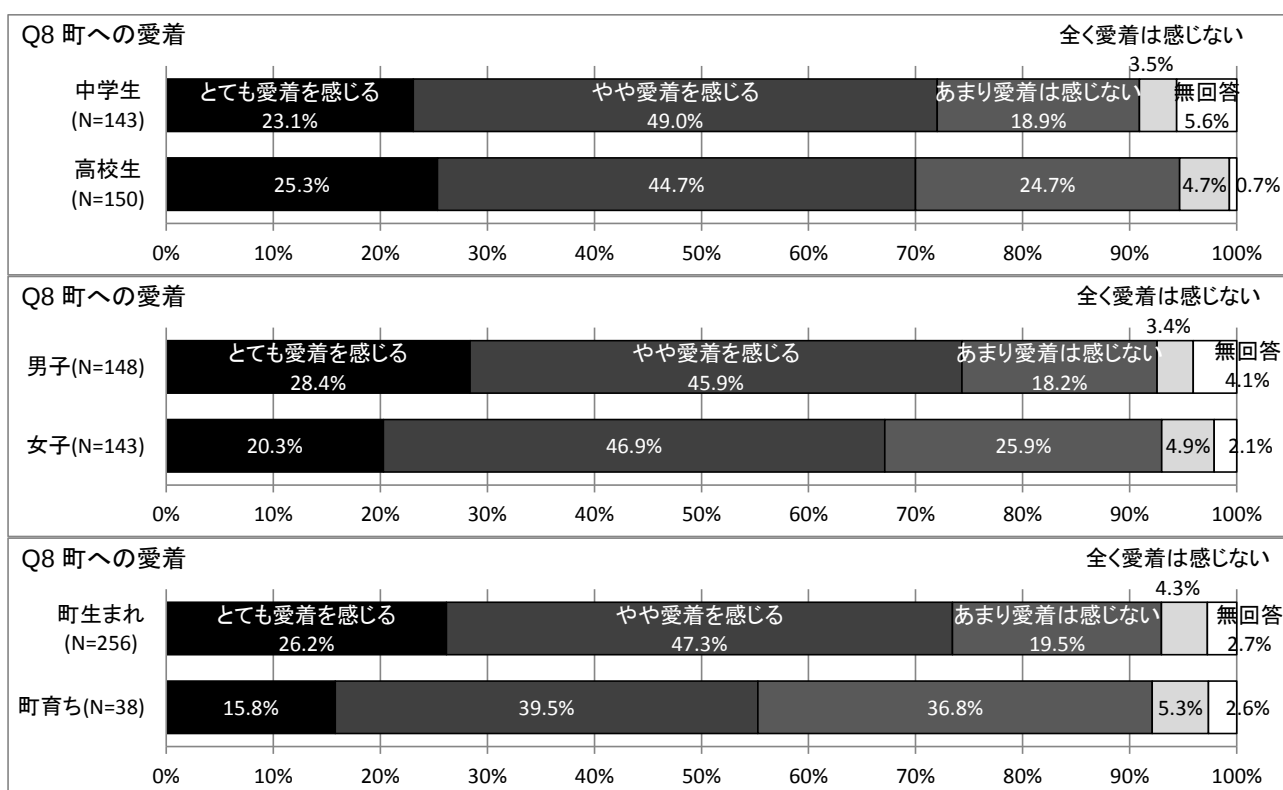
Q7 小国町に住んでいて、あなたが不満と覚じることは何ですか。(○は5つまで)

- 町で暮らしていて不満と覚じることとしては、中学生・高校生とも「スーパーや商店が少なく買い物が不便」な点が6割以上と最も多くから挙げられている。
- 高校生ではこれ以外にも不満と覚じることが多く、「鉄道やバス等の交通機関が不便」や「娯楽施設や遊ぶ場所が少ない」も半数以上が不満としている。
- また、「鉄道やバス等の交通機関が不便」な点や、「働く場が少なく自分にあう仕事を選べない」点などは、進学・就職という進路選択に直面する高校生の方が中学生よりもより強く不満を感じており、卒業後も町に住み続けながら進学・就職することを考える際のネックとなっていることが示唆される。



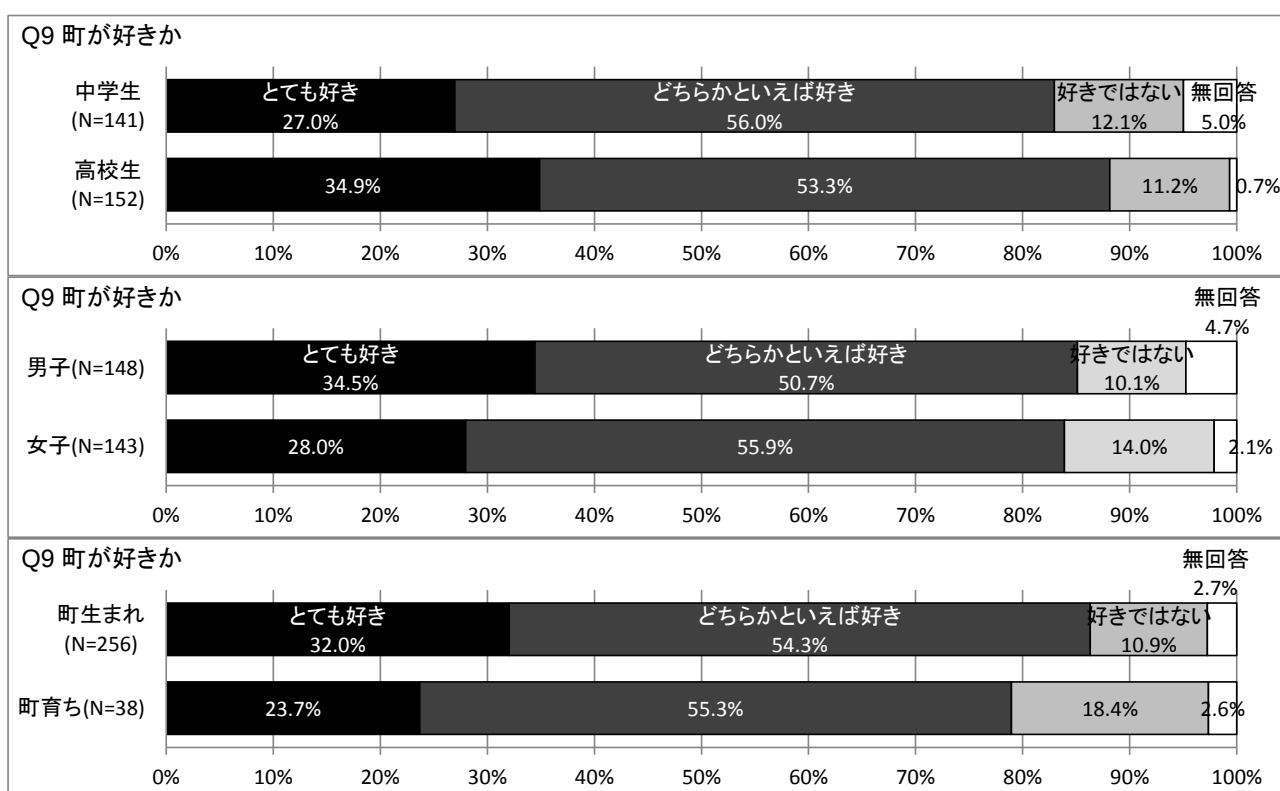
Q8 あなたは小国町に愛着を感じますか。(〇は1つ)

- 中学生・高校生とも、約4分の1が小国町に「とても愛着を感じる」としており、「やや愛着を感じる」と合わせると、7割以上の中高生が町に愛着があると回答している。
- 性別で比較すると、男子の方が女子よりも町に愛着を感じている。
- 町への愛着を町で暮らし始めた時期とのクロスで見ると、町生まれ（生まれた時から町で居住）の中高生は「とても愛着を感じる」が26.2%、「やや愛着を感じる」が47.3%と、7割以上が愛着を感じるとしているのに対して、町育ち（保育園以降から町で居住）の中高生では「とても愛着を感じる」は15.8%であり、「あまり愛着は感じない」が4割近くとなっている。



Q9 あなたは、小国町が好きですか。(〇は1つ)

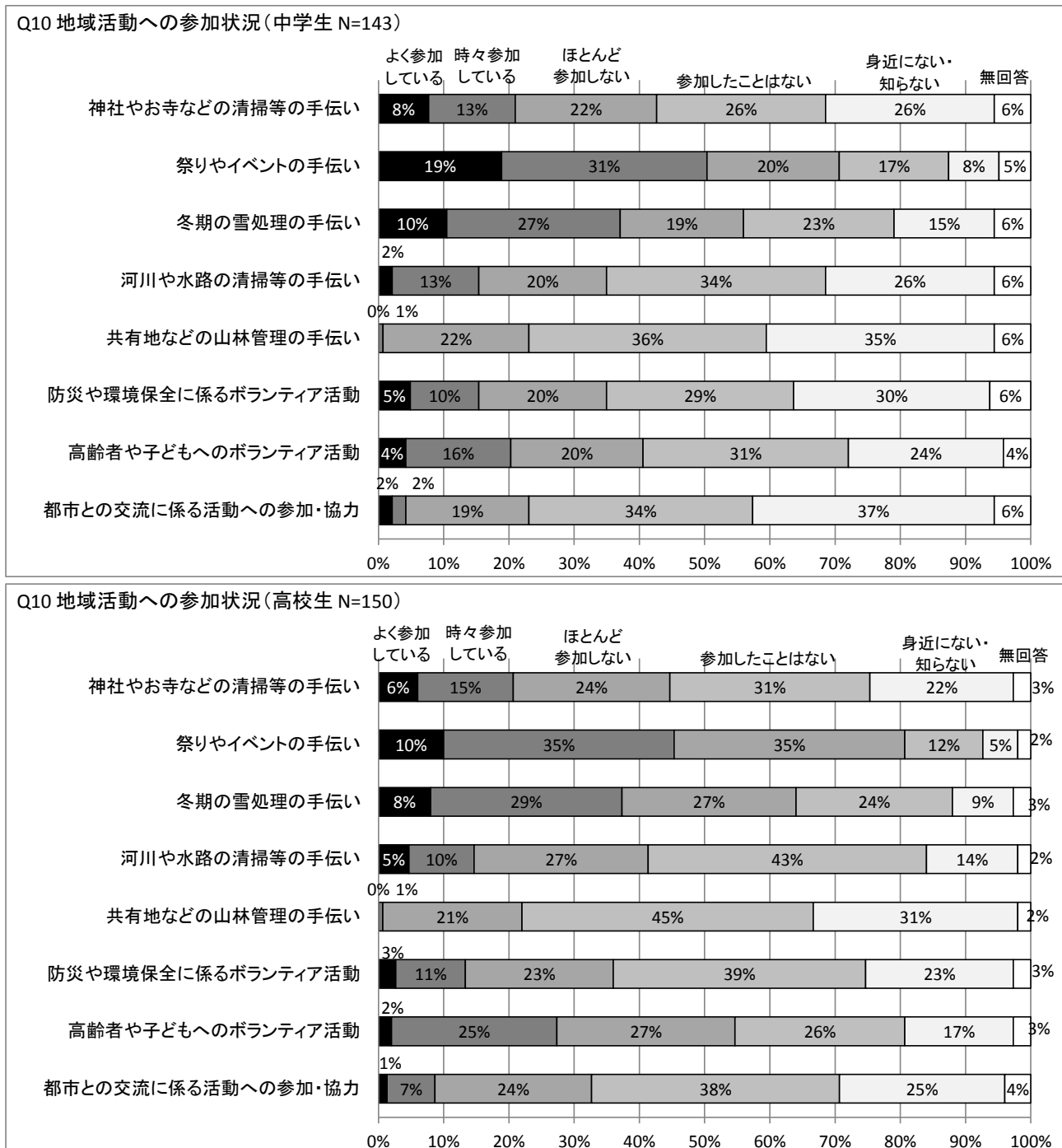
- 町が好きかどうかについて聞いたところ、中学生では 28.0%が、高校生では 34.7%が「とても好き」と回答しており、「どちらかといえば好き」と合わせると、8割以上の中高生が町を好きと回答している。
- また性別で比較すると、町が好き（とても好き＋どちらかといえば好き）と回答した割合は男子の方が女子よりも高くなっている。
- 町で暮らし始めた時期とのクロスでみると、町生まれ（生まれた時から町で居住）の中高生は、「とても好き」が 32.0%、「どちらかといえば好き」が 54.3%と、8割以上が町を好きと回答しているのに対し、町育ち（保育園以降から町で居住）の中高生では「好きではない」という割合が2割近くみられる。



(3) 地域活動等への参加状況

Q10 あなたは、次の地域活動に参加していますか。(〇はそれぞれ1つ)

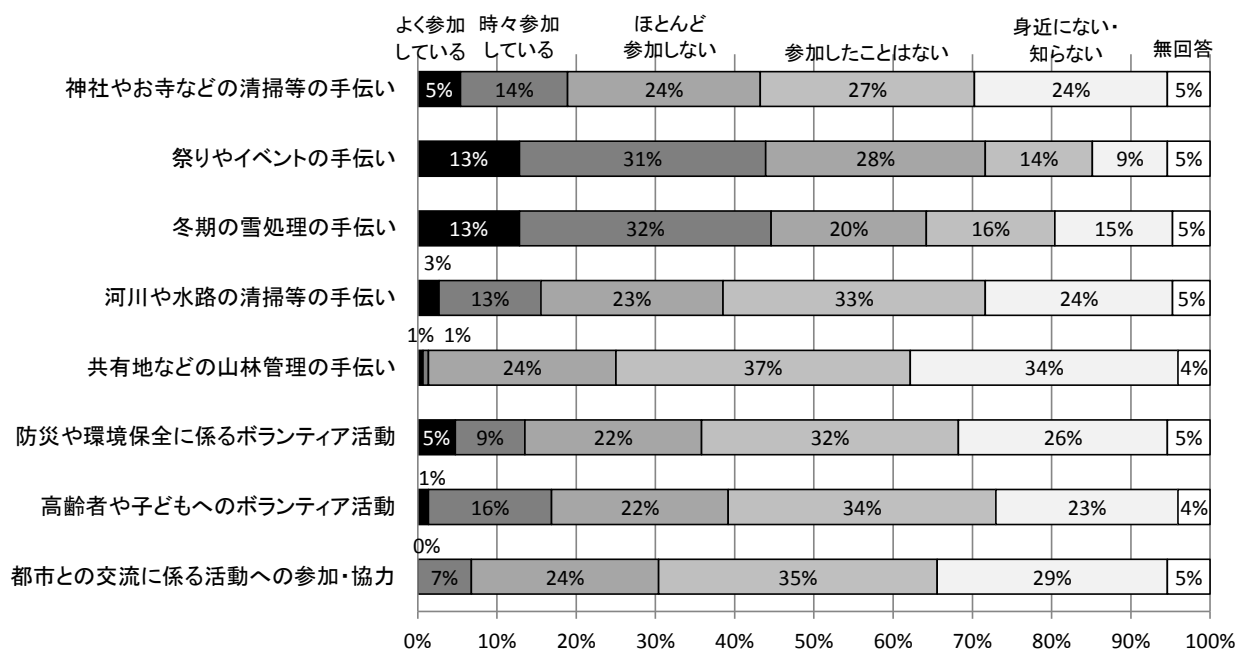
- 地域活動への参加状況をみると、中学生・高校生とも約半数が「祭りやイベントの手伝い」に参加している（「よく参加している」＋「時々参加している」）と回答している。
- これに次いで「冬期の雪処理の手伝い」の参加割合が比較的高く、中学生・高校生とも4割近くが参加している。



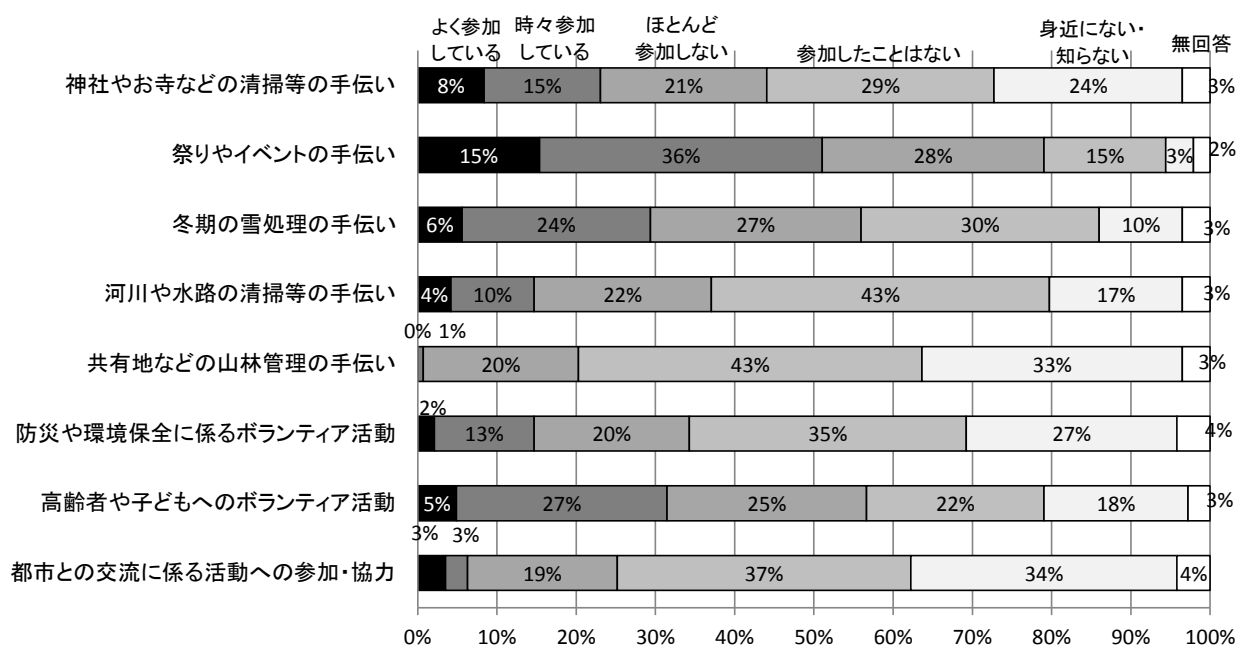
Q10 あなたは、次の地域活動に参加していますか。(〇はそれぞれ1つ)

- 地域活動への参加状況について、男子と女子とで比較すると、「祭りやイベントの手伝い」については男子よりも女子の方が参加している（「よく参加している」＋「時々参加している」）割合が高く、女子の半数以上が参加していると回答している。
- これに対し、「冬期の雪処理の手伝い」については、男子の方が女子よりも参加割合が高い。

Q10 地域活動への参加状況(男子 N=148)

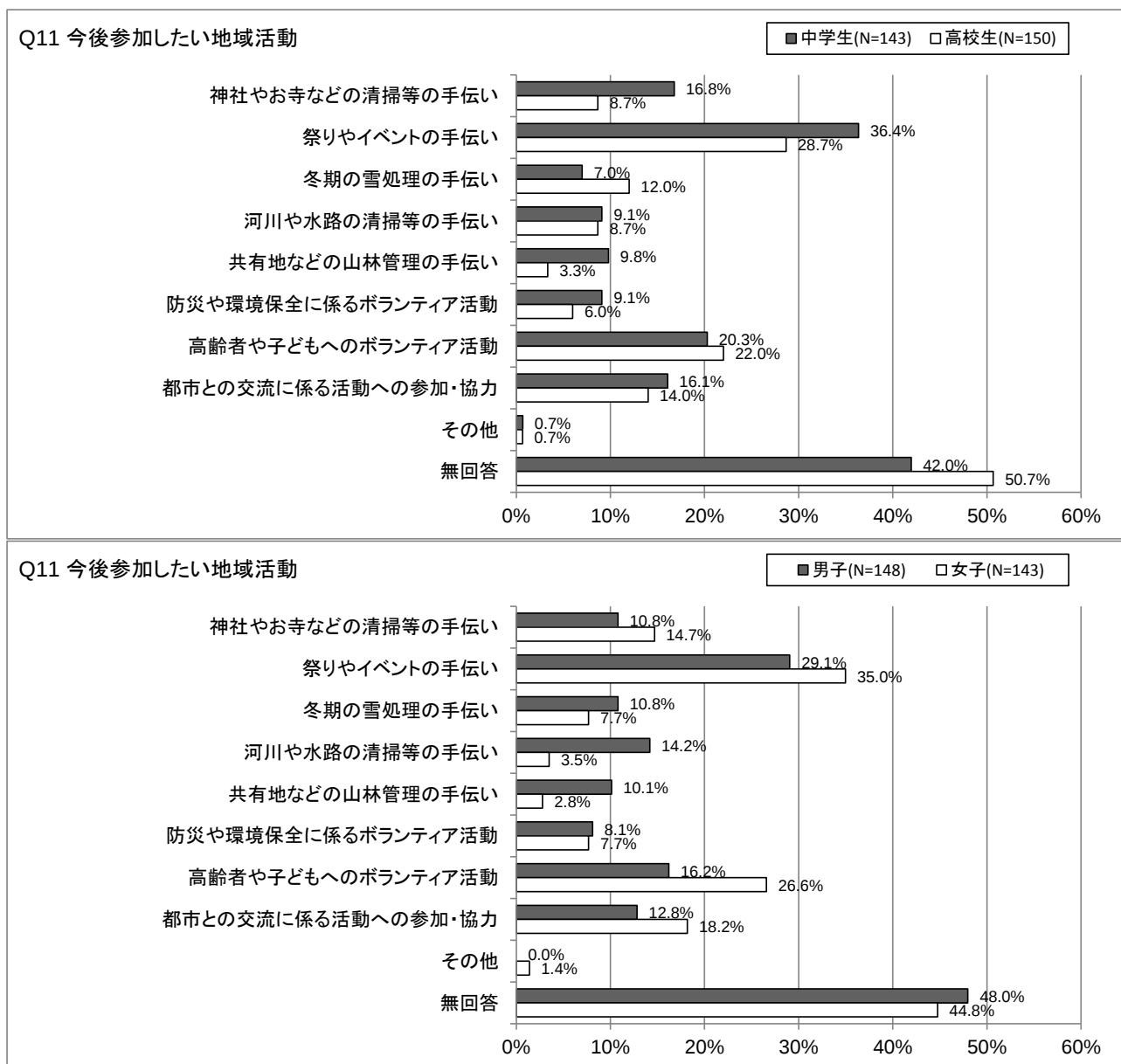


Q10 地域活動への参加状況(女子 N=143)



Q11 Q10の地域活動の中で、今後参加してみたいものがあれば、その番号を3つまで記入してください。

- 今後参加してみたい地域活動に関しては、無回答が多いものの、現在も約半数の中高生が参加していると回答した「祭りやイベントの手伝い」については、今後も参加したいとする割合が高くなっている。
- また、中学生・高校生ともに2割強が「高齢者や子どもへのボランティア活動」に関心を示しており、性別でみると、女子の方がその関心は高い

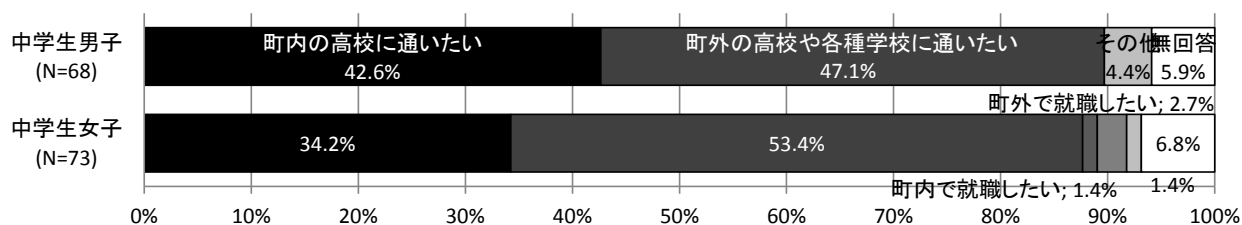


Q13 あなたは卒業後の進路について、どのように考えていますか。(○は1つ)

【中学生】

- 中学生は、男子・女子とも「町外の高校や各種学校に通いたい」が最も高い割合となっており、特に男子よりも女子の方が町外への進学を希望する割合が高くなっている。

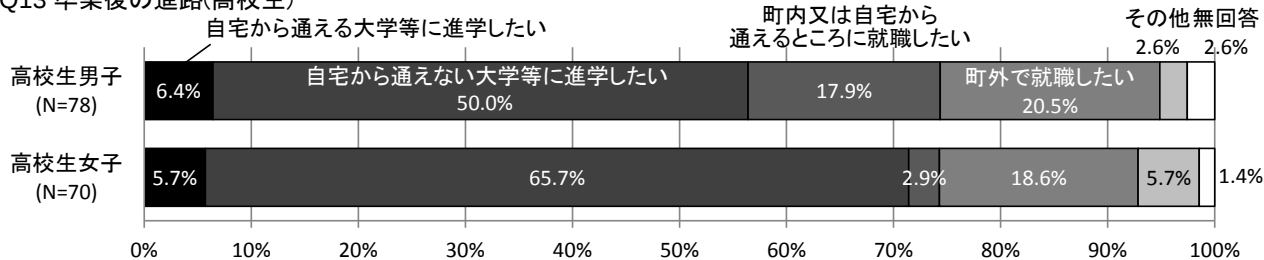
Q13 卒業後の進路(中学生)



【高校生】

- 高校生は、男子・女子とも半数が「自宅から通えない大学等に進学したい」としており、「町外で就職したい」も2割前後と、約7割が町外への進学・就職を希望していることが分かる。

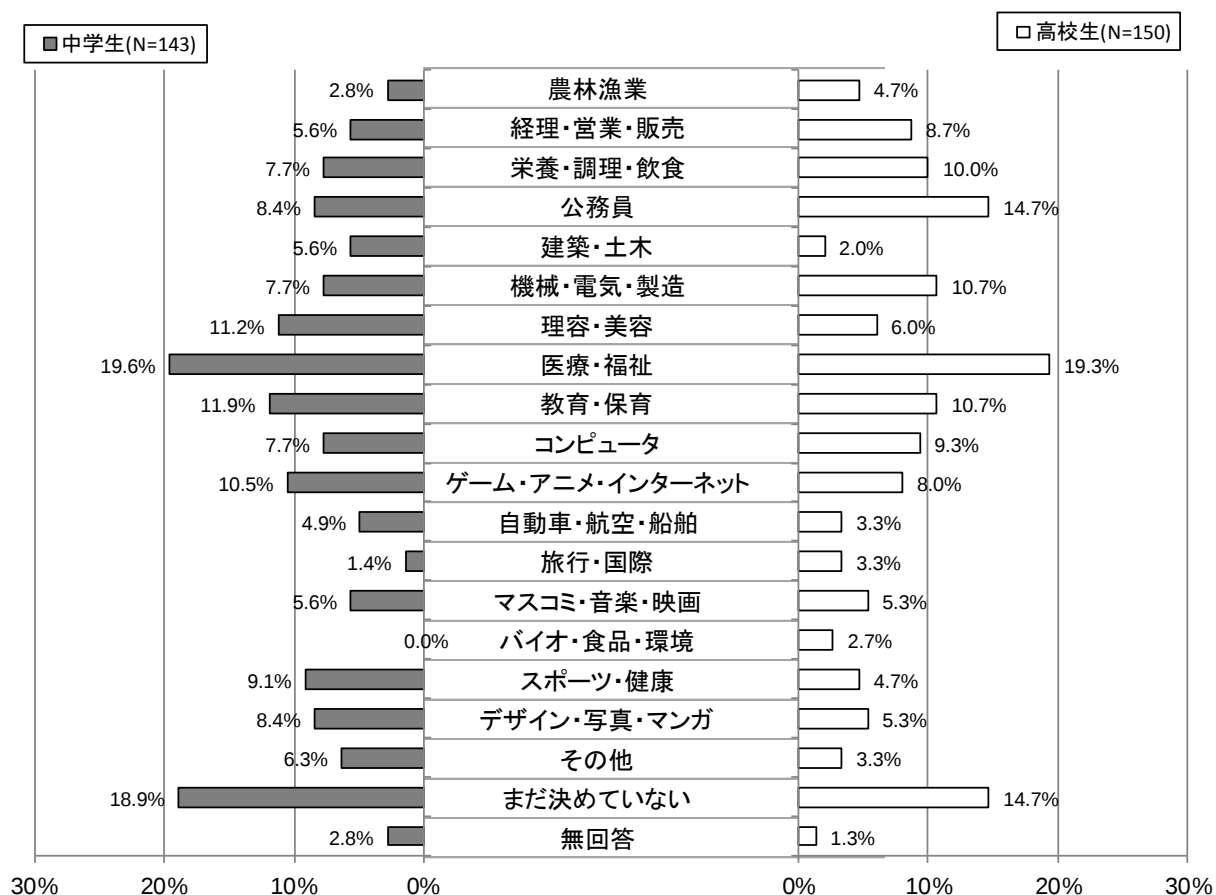
Q13 卒業後の進路(高校生)



Q14 あなたは将来、どのような職業につきたいですか。(〇は3つまで)

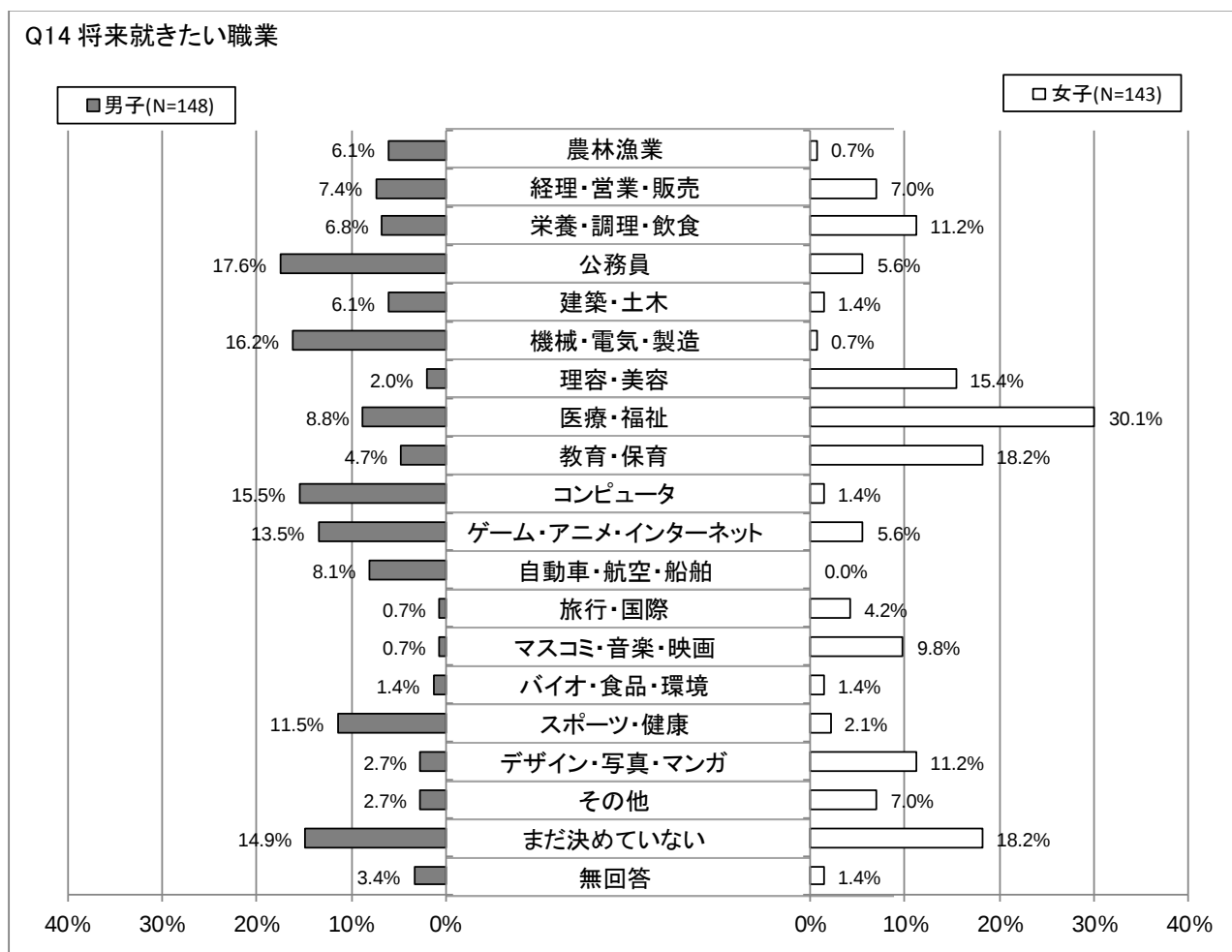
- 将来就きたい職業についての回答をみると、中学生は2割近くが「まだ決めていない」としており、また全体的に中学生よりも高校生の方が回答率が高く、高校生の方が就職についてより具体的に考えていることがうかがえる。
- 中学生・高校生ともに「医療・福祉」が一番人気があり、ともに2割近くが就きたい職業に挙げている。
- これに次いで、中学生では「教育・保育」、「理容・美容」、「ゲーム・アニメ・インターネット」などが、高校生では「公務員」、「機械・電気・製造」、「教育・保育」、などが比較的人気となっている。

Q14 将来就きたい職業



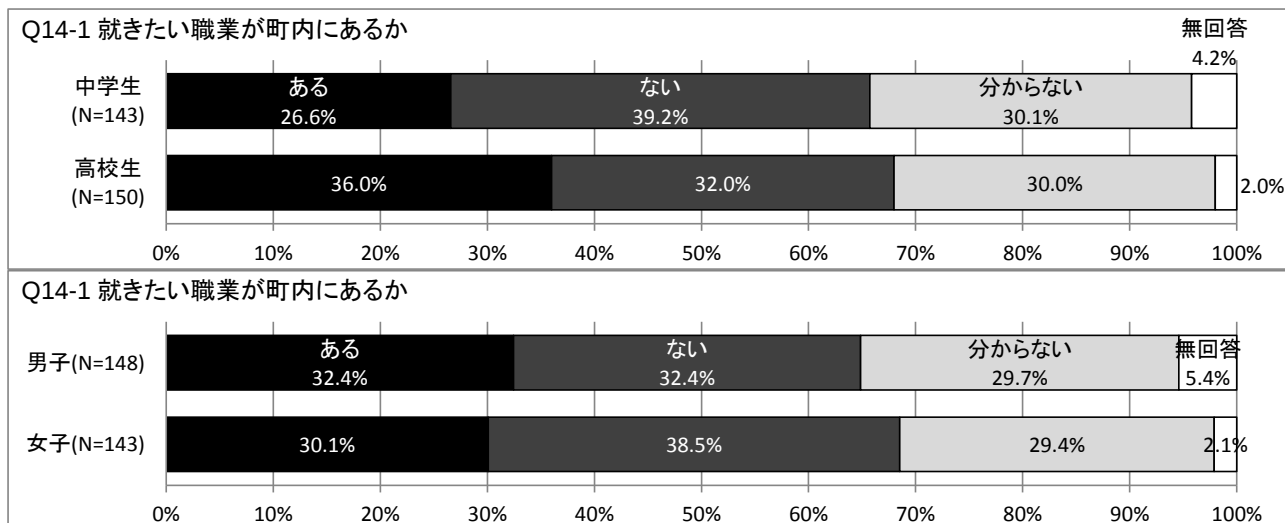
Q14 あなたは将来、どのような職業につきたいですか。(〇は3つまで)

- 将来就きたい職業について、男子と女子とでは就職先の志向が異なることがみてとれる。
- 男子は第1位の「公務員」(17.6%)、第2位の「機械・電気・製造」(16.2%)、第3位の「コンピュータ」(15.5%)の上位3項目にあまり開きがない。
- 一方、女子を見ると、第1位が「医療・福祉」で30.1%と突出しており、次いで第2位が「教育・保育」(18.2%)、「理容・美容」(15.4%)となっている。

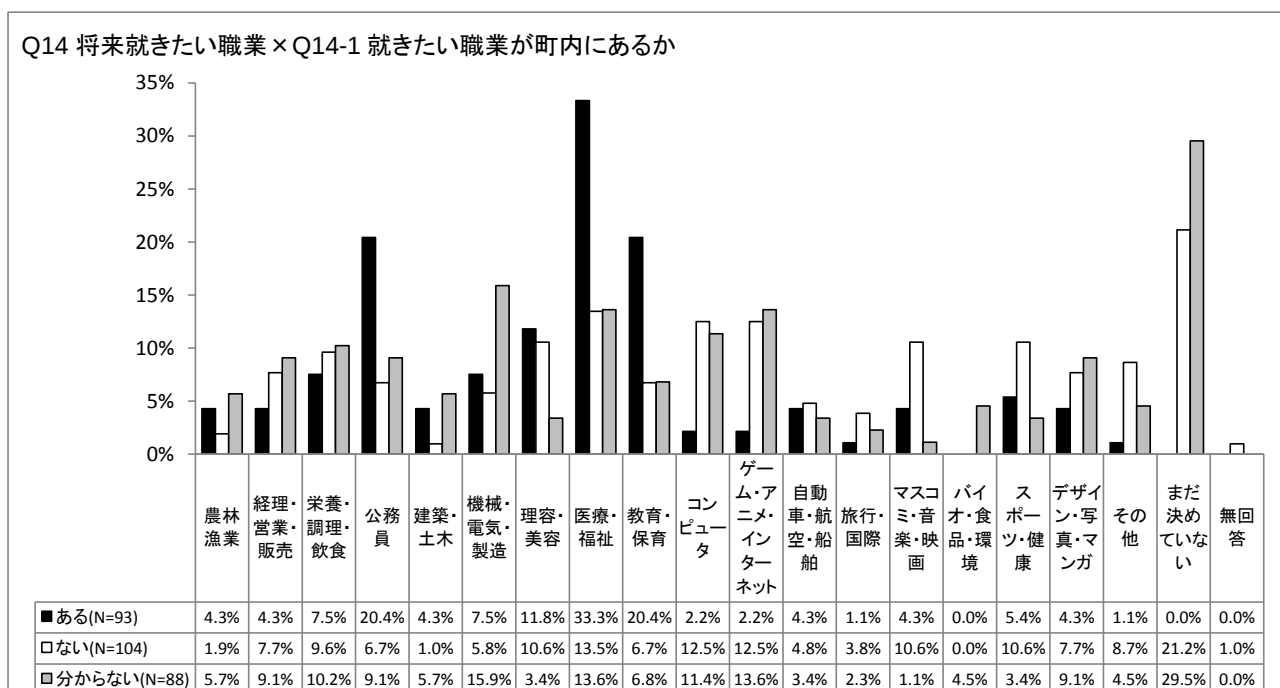


Q14-1 あなたが付きたい職業は、小国町にありますか。(〇は1つ)

- 就きたい職業を具体的に回答した中高生に対し、それらが小国町にあるかどうかを聞いたところ、「分からない」という回答が多かったものの、高校生では36%が「ある」としている。

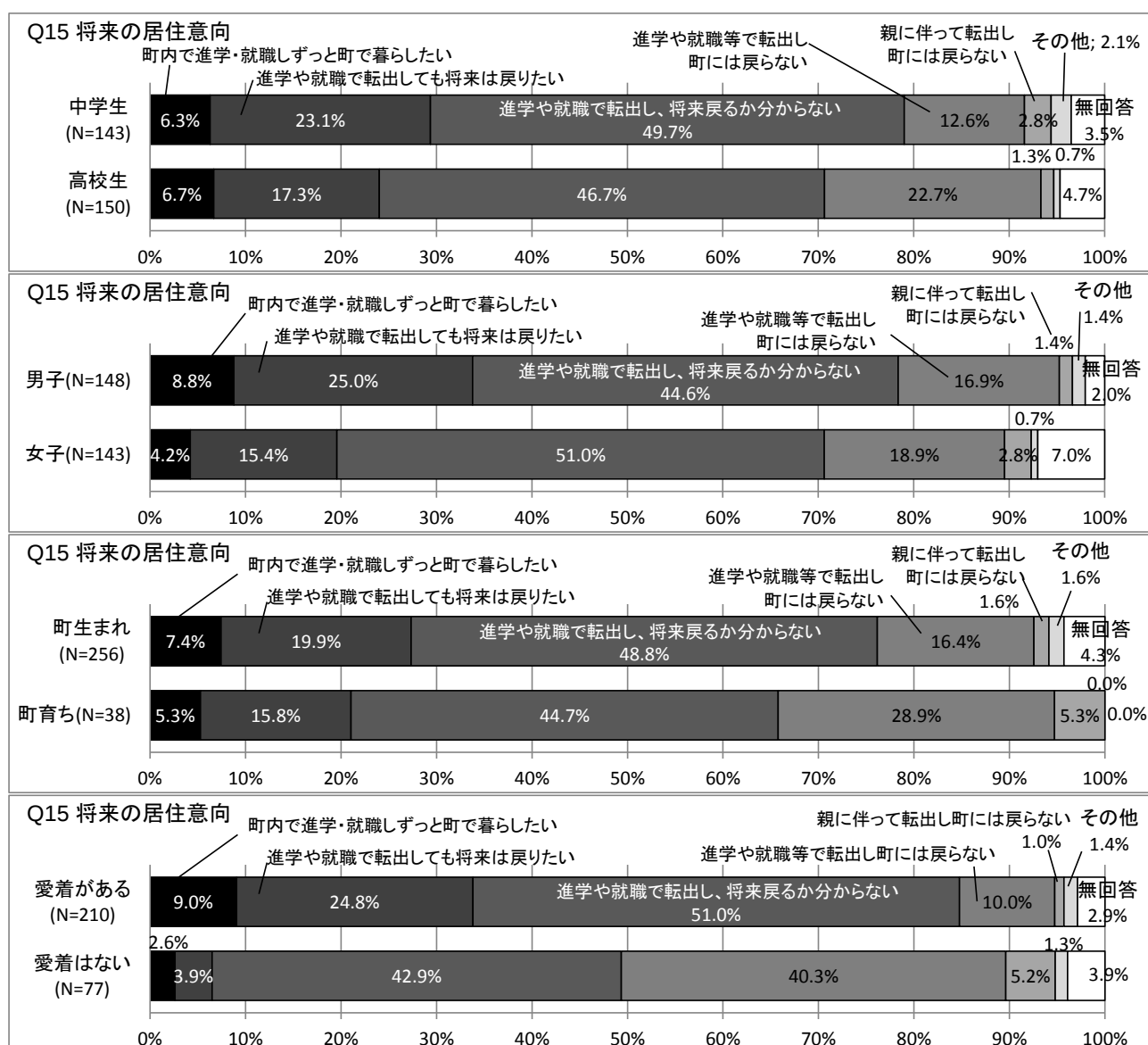


- 就きたい職業とのクロスでどのような職業への就職希望が小国町で叶いそうだと考えているかを詳しく見ると、小国町に就きたい職業が「ある」と回答した中では、「医療・福祉」や「公務員」、「教育・保育」への就職を希望する割合が比較的高い。
- これに対して、小国町には就きたい職業が「ない」という中では、「医療・福祉」のほか、「コンピュータ」や「ゲーム・アニメ・インターネット」への就職を希望する割合が比較的高い。



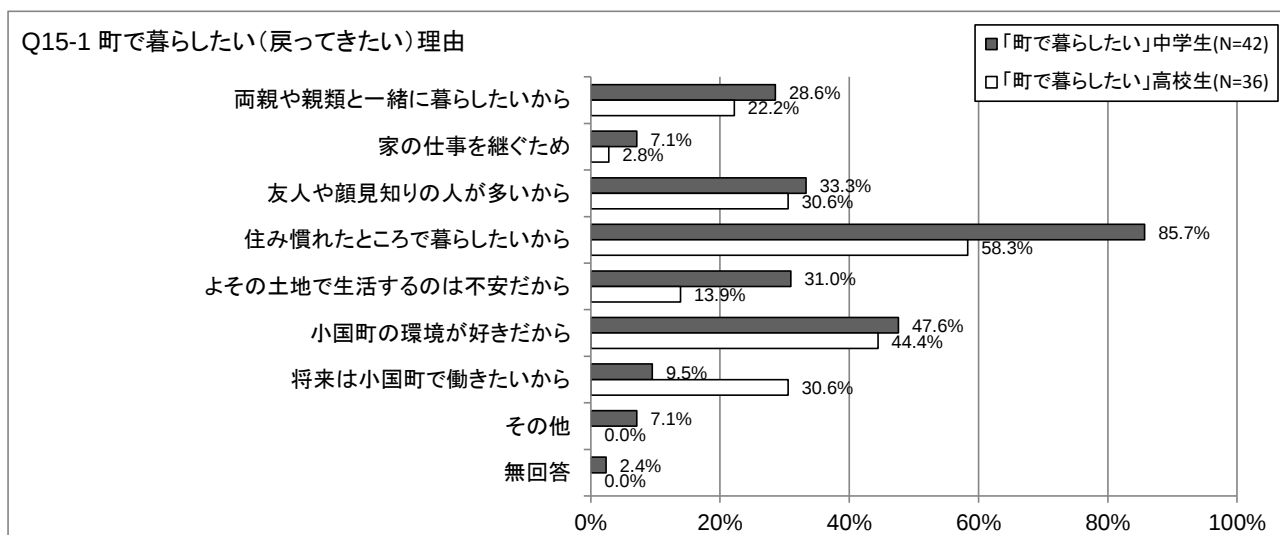
Q15 あなたは、将来も小国町で暮らしていきたいですか。(○は1つ)

- 将来の居住意向についてみると、中学生・高校生とも半数近くが「進学や就職等で町外に出るかもしれないが、小国町に戻ってくるかどうかはまだわからない」としているが、中学生の約3割、高校生の2割強は将来の小国町での居住意向を示している。すなわち、「町内で進学・就職し、将来もずっと町で暮らしていきたい」は、中高生とも6～7%程度みられ、また「進学や就職等で町外に出るかもしれないが、いずれは町に戻って暮らしたい」も2割前後みられる。
- 男女で比較すると、町外への転出意向は女子の方が高く、7割が「将来は戻るかわからない」又は「戻らない」としているのに対し、男子は3割強が小国町での居住意向を示している。
- 町生まれか町育ちかで比較すると、町生まれの中高生の方が町で暮らしていきたい、あるいはいずれは町に戻って暮らしたいという割合が3割近くと高い一方、町育ちの中高生では3割近くが「町には戻らない」としている。
- 将来の居住意向と町への愛着の有無の相関は高く、愛着があるという中高生の3割強は将来町で暮らしたいと思っているが、愛着はないという中高生は8割以上が将来町に戻るか分からない、あるいは戻らないと回答している。



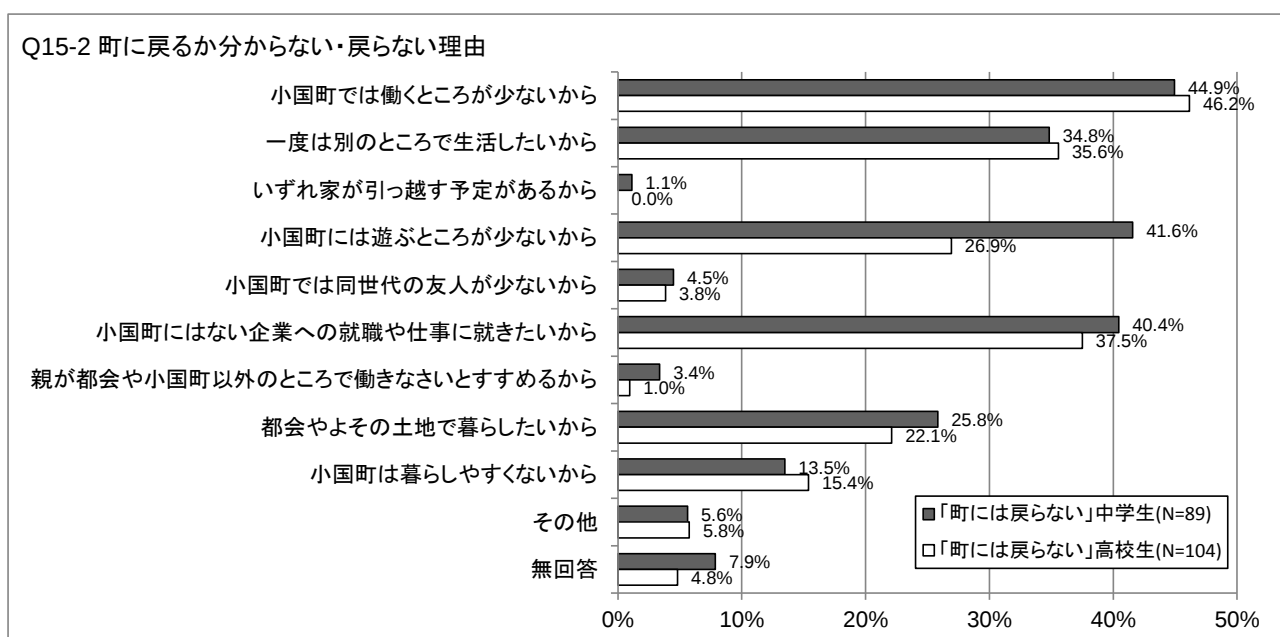
Q15-1 Q15で①または②と答えた方にお聞きます。将来も小国町で暮らしていきたい、または戻ってきたいと思う理由は何ですか。(〇はいくつでも)

- 町で暮らしたい(戻ってきたい)と思う理由を聞いたところ、「住み慣れたところで暮らしたいから」が最も多く、「小国町の環境が好きだから」も比較的高い割合となっている。



Q15-2 Q15で③または④と答えた方にお聞きます。小国町に戻るか分からない、または戻らないと思う理由は何ですか。(〇はいくつでも)

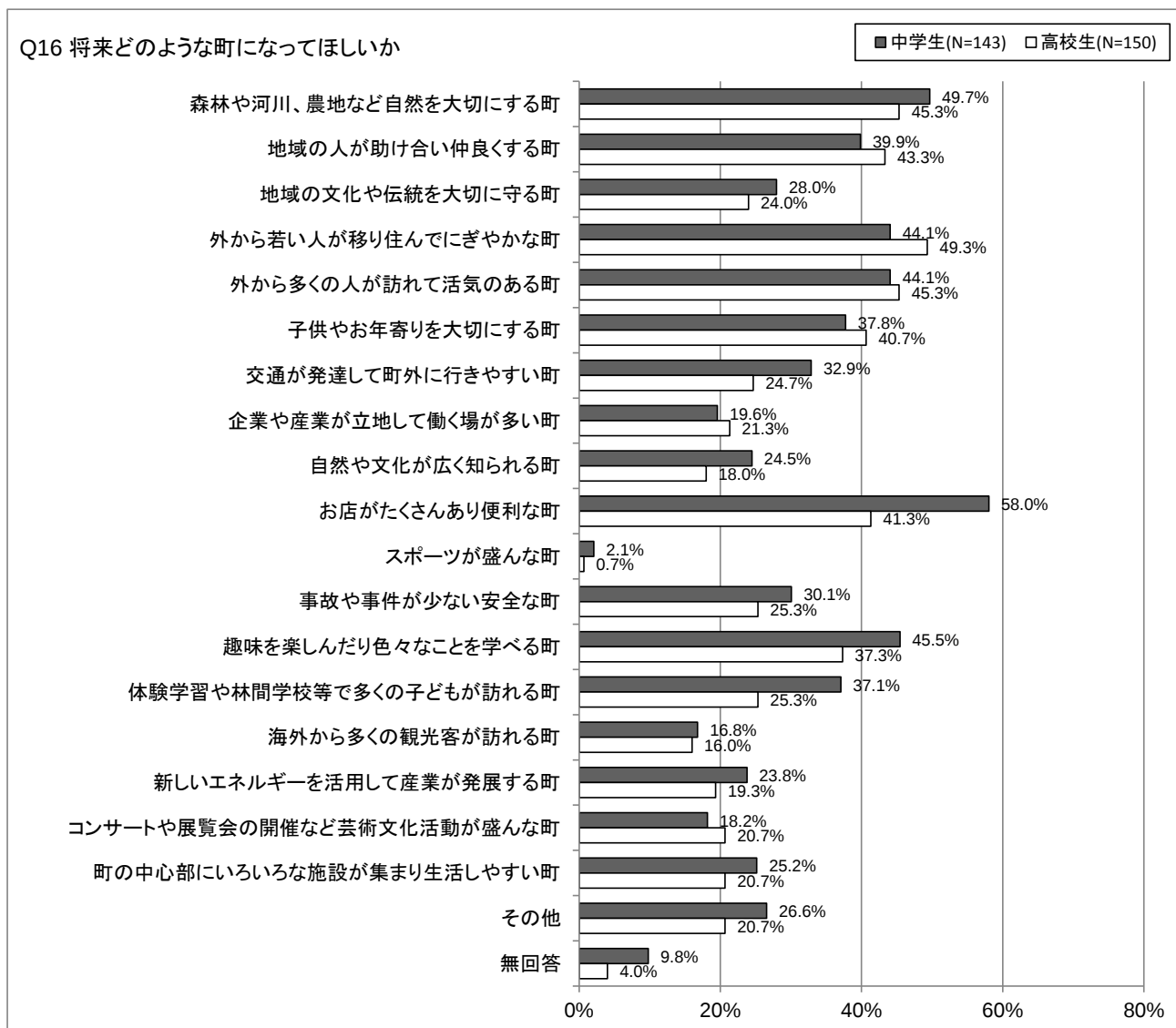
- 進学・就職等で転出し、町に戻るか分からない、あるいは戻らないと回答した中高生に対して、その理由を聞いたところ、「小国町では働くところが少ないから」が4割を超え最も多くから挙げられており、次いで中学生では「遊ぶところが少ないから」、高校生では「小国町にない企業への就職や仕事に就きたいから」が多く挙げられている。
- 「小国町は暮らしやすくないから」という理由を挙げた中高生は1割強とあまり多くないことから、生活環境への不満から転出を考えているというよりは、働く場がないことの方が定住を考える際のネックとなっていることがうかがえる。



(4) これからのまちづくりについて

Q16 将来、小国町はどのような町になってほしいと思いますか。(〇はいくつでも)

- 将来小国町がどのような町になってほしいかをたずねたところ、中学生では「お店がたくさんあり便利な町」が最も多く、6割近くから挙げられている。また、「趣味を楽しんだり色々なことを学べる町」も45.5%と3番目に高く、買い物の利便性や娯楽、生涯学習などの機会の充実を望んでいることがうかがえる。
- 一方、高校生の回答を見ると、最も高い割合となったのは「外から若い人が移り住んでにぎやかな町」(49.3%)であり、第3位には「外から多くの人を訪れて活気のある町」(45.3%)が挙げられていることから、移住・交流の促進により町に活気を取り戻すことを望んでいることがうかがえる。
- なお、中学生・高校生とも、「森林や河川、農地など自然を大切にする町」が2番目に高い割合となっており、町の良いところとして高く評価している豊かな自然環境について、今後とも大切にしていきたいことが望まれている。



Q17 Q16で選択したような小国町にするためのアイデアを教えてください。

- 112名（中学生 55名、高校生 55名、不明 2名）から様々な具体的アイデアが寄せられた。
- 最も多くの中高生が指摘したのが、商業施設や娯楽施設、病院、スポーツ施設など現在不足している施設の整備であり、特に商業施設については大型店の誘致を望む声も多く聞かれた。また、廃校舎を活用してスポーツ施設を整備するといった具体的なアイデアを示した回答もあった。
- これに次いで、外部にもっと小国町の情報や魅力を発信することを挙げた回答も 19 件と比較的多く、町の知名度を上げることが重要という意見もみられた。
- また、若い世代をターゲットとした取組を求める声も多く聞かれ、若者が集まる場や機会の創出、若い世代に働きかける情報発信等が指摘されている。

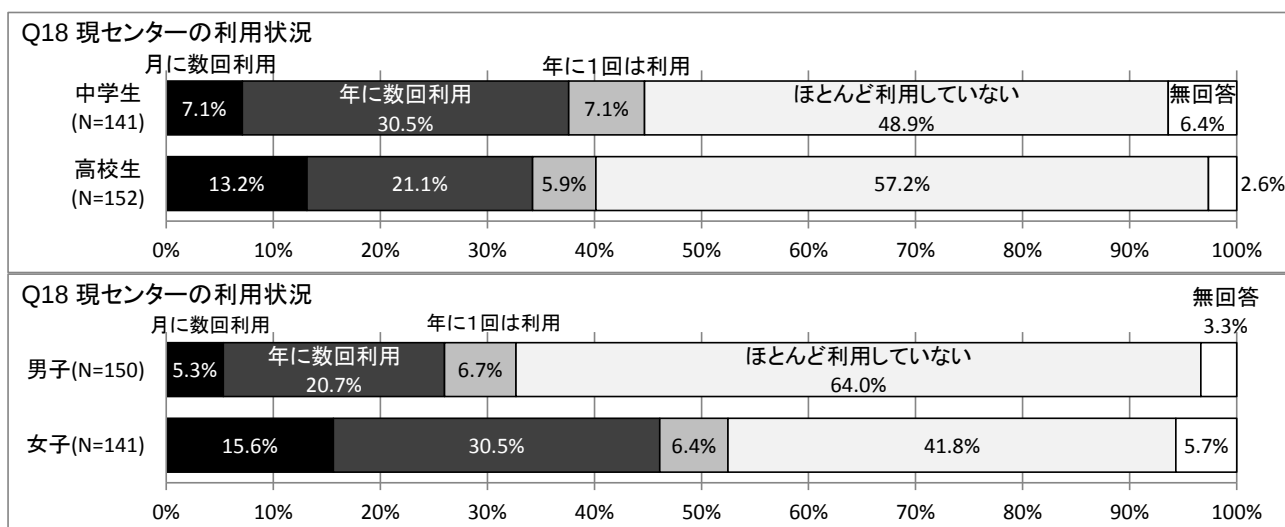
回答内容（分類）	件数
商業施設・娯楽施設・病院・スポーツ施設の整備	27
都市など外部への PR、小国町の魅力等についての情報発信	19
若者が集まる場や機会の創出、地域内外の若い世代への PR	17
多くの人が集まり賑わうイベント等の開催	17
まちをよくするための住民意識の向上と地域づくりへの参画拡大	15
人口増加（移住の促進や子育て支援等）	11
環境保全活動の推進、自然環境を活用した魅力づくり	10
小国町ならではの特産品・観光の目玉となる魅力の開発	9
その他	17

※複数内容に亘る意見があるため、件数の合計は回答者数より大きくなる。

(5) まちづくりの拠点施設について

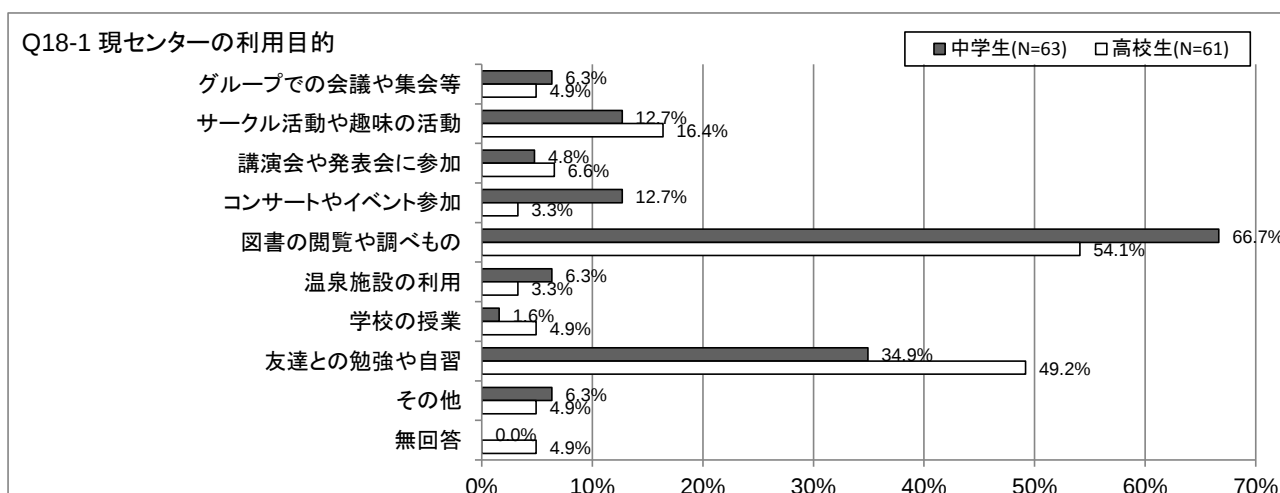
Q18 あなたは、おぐに開発総合センターをどのくらい利用していますか。(〇は1つ)

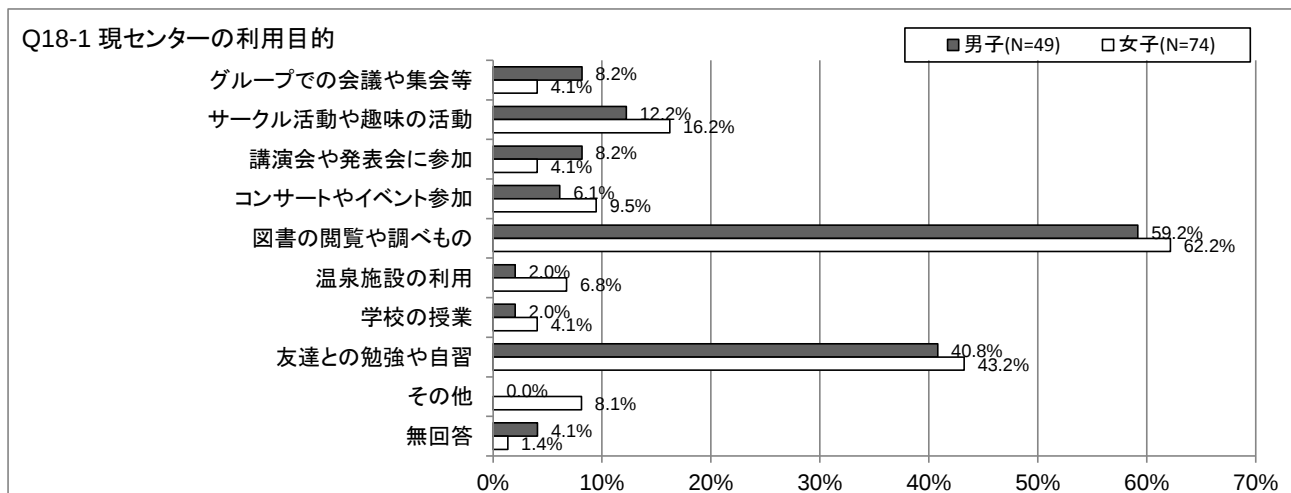
- 中学生の 44.7%、高校生の 40.2%が年に 1 回以上は現センターを利用しており、一般住民よりも利用頻度は高い (P26 参照)。
- 高校生の 13.2%は「月に数回程度」利用している一方、「ほとんど利用していない」も 6 割近くとなっており、利用している人としていない人に分かれていることがうかがえる。一方中学生では「月に数回程度」の割合は高校生よりも低いものの、約 3 割が「年に数回利用」している。
- なお、女子の方が男子よりも利用頻度が高い。



Q18-1 Q18で①～⑥を選択した方に伺います。どのような目的で利用していますか。(〇は3つまで)

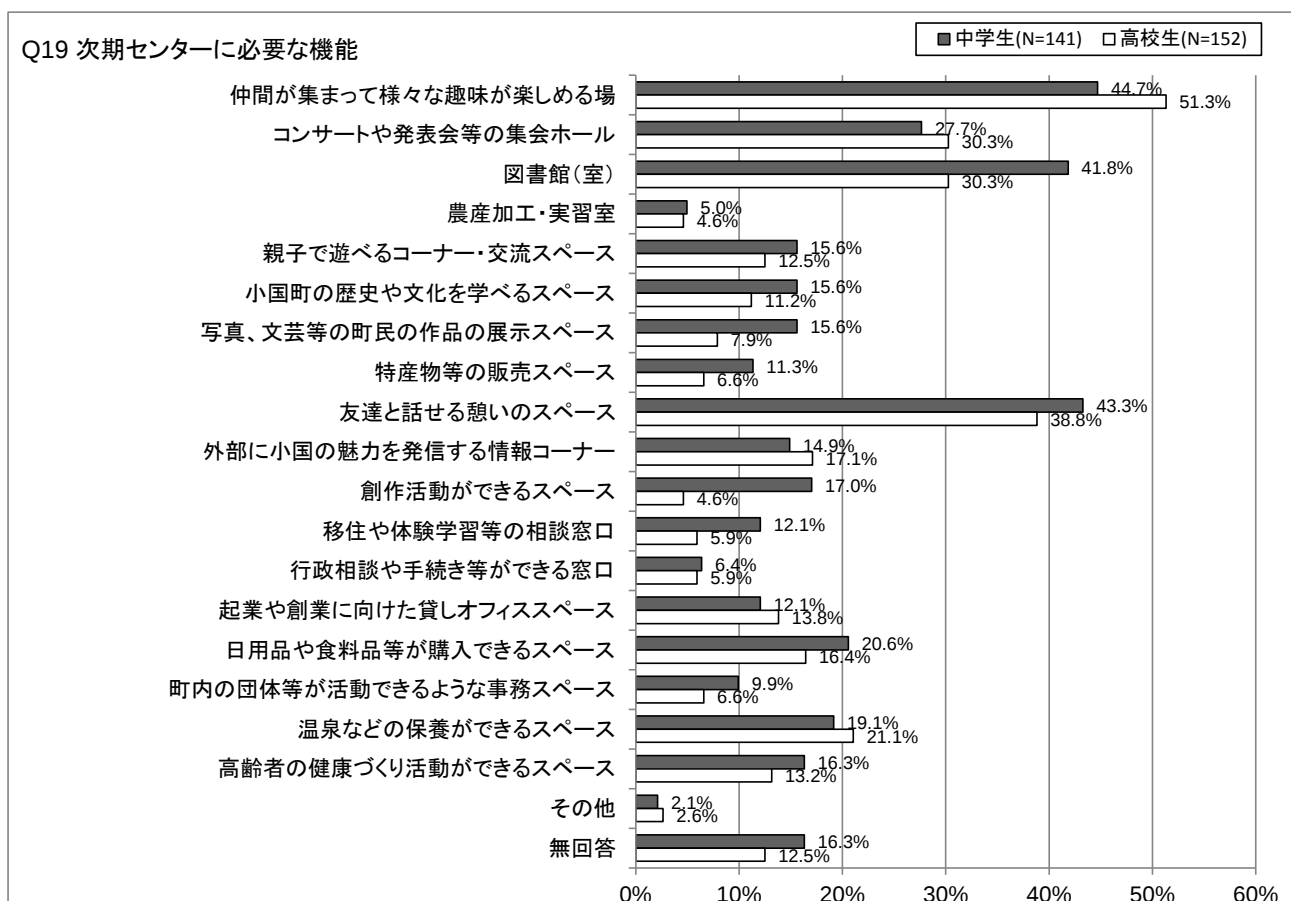
- 中学生・高校生とも、「図書の閲覧や調べもの」での利用が圧倒的に多く、特に中学生では 7 割近くとなっている。それ以外では、高校生では 5 割近くが「友達との勉強や自習」に利用しており、中学生 (約 35%) より多い。
- 性別でみると、上位項目以外で差がみられる利用目的として、女子は「サークル活動や趣味の活動」で利用する割合が男子よりも高い。

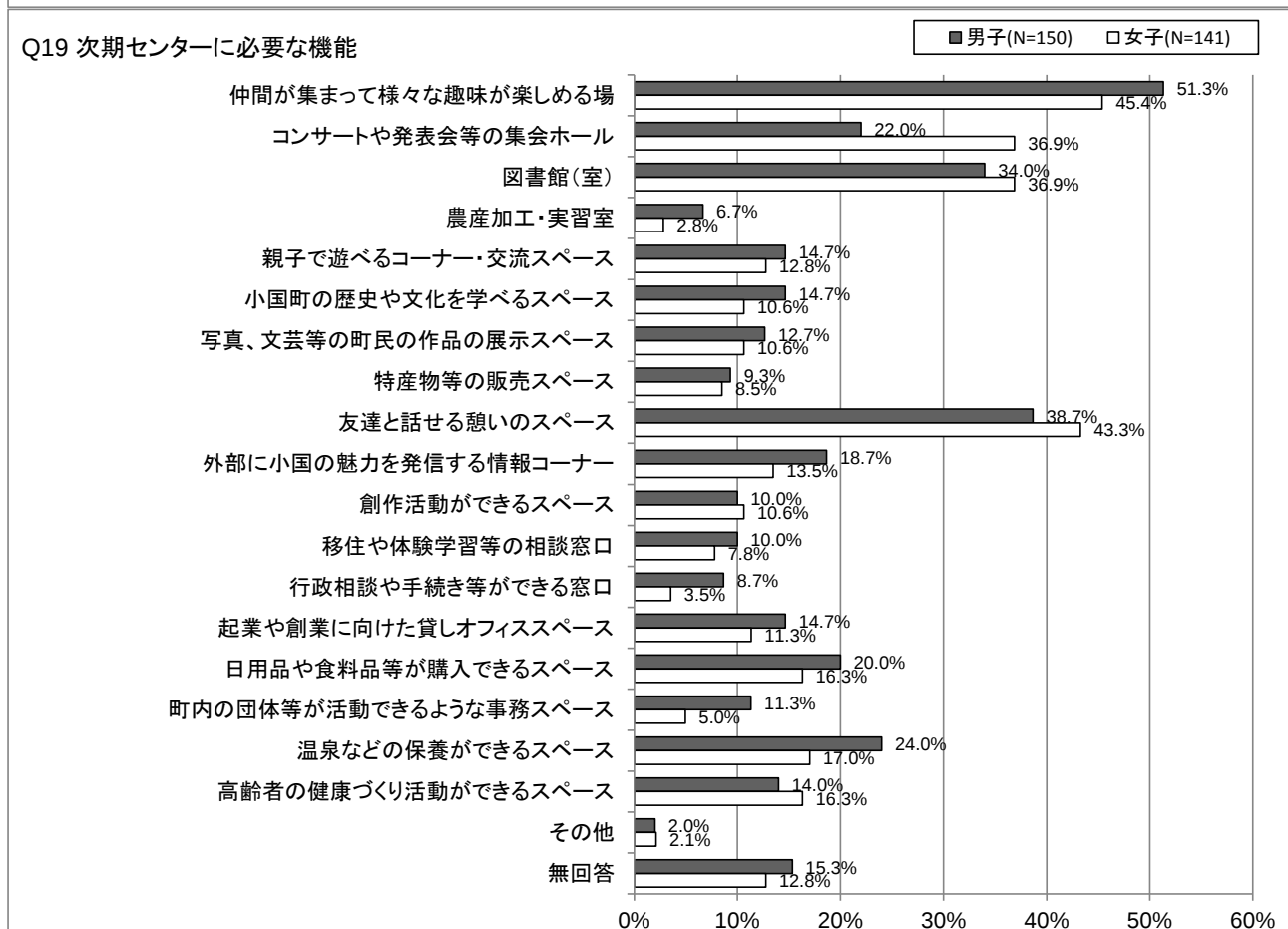
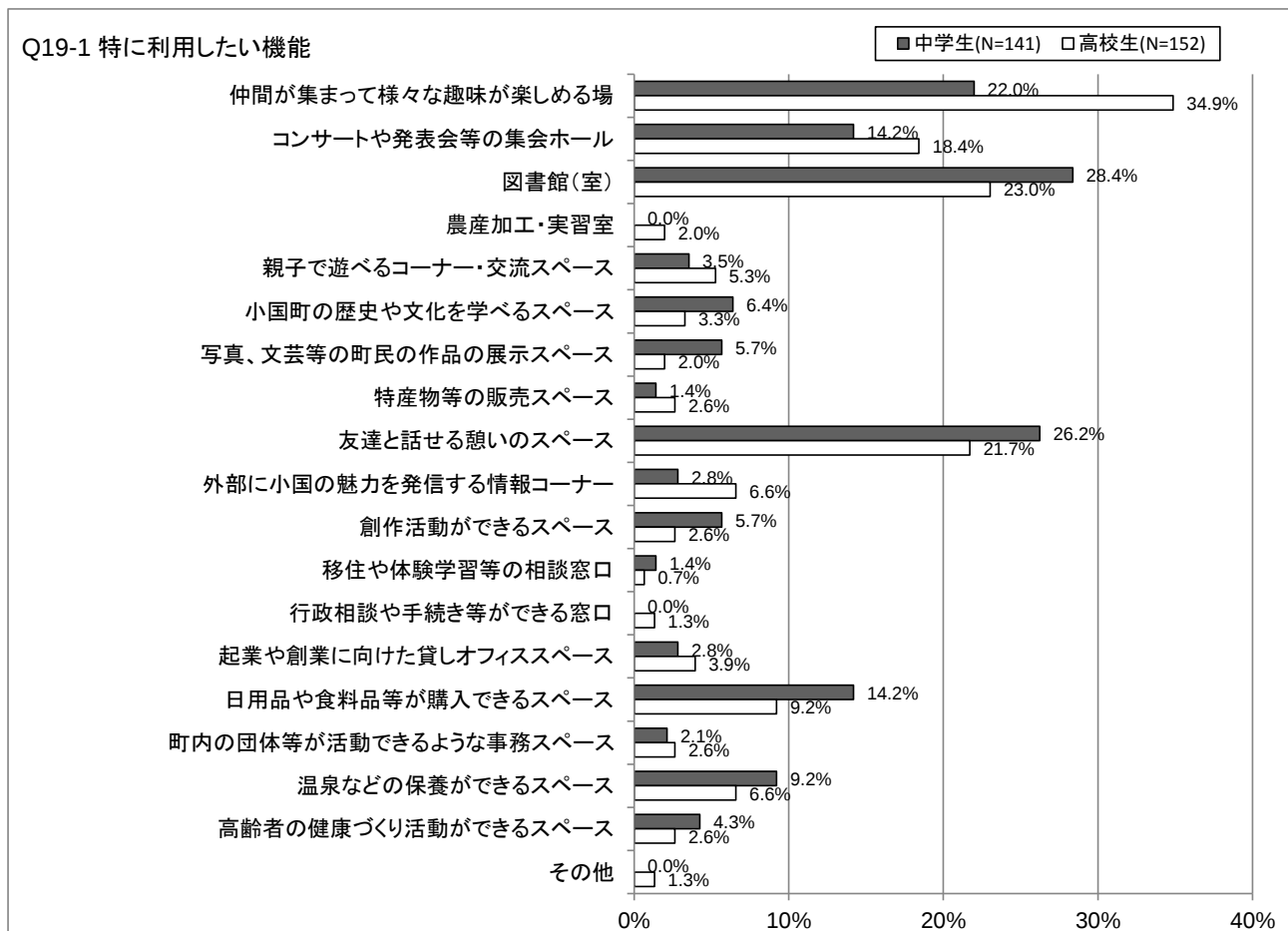


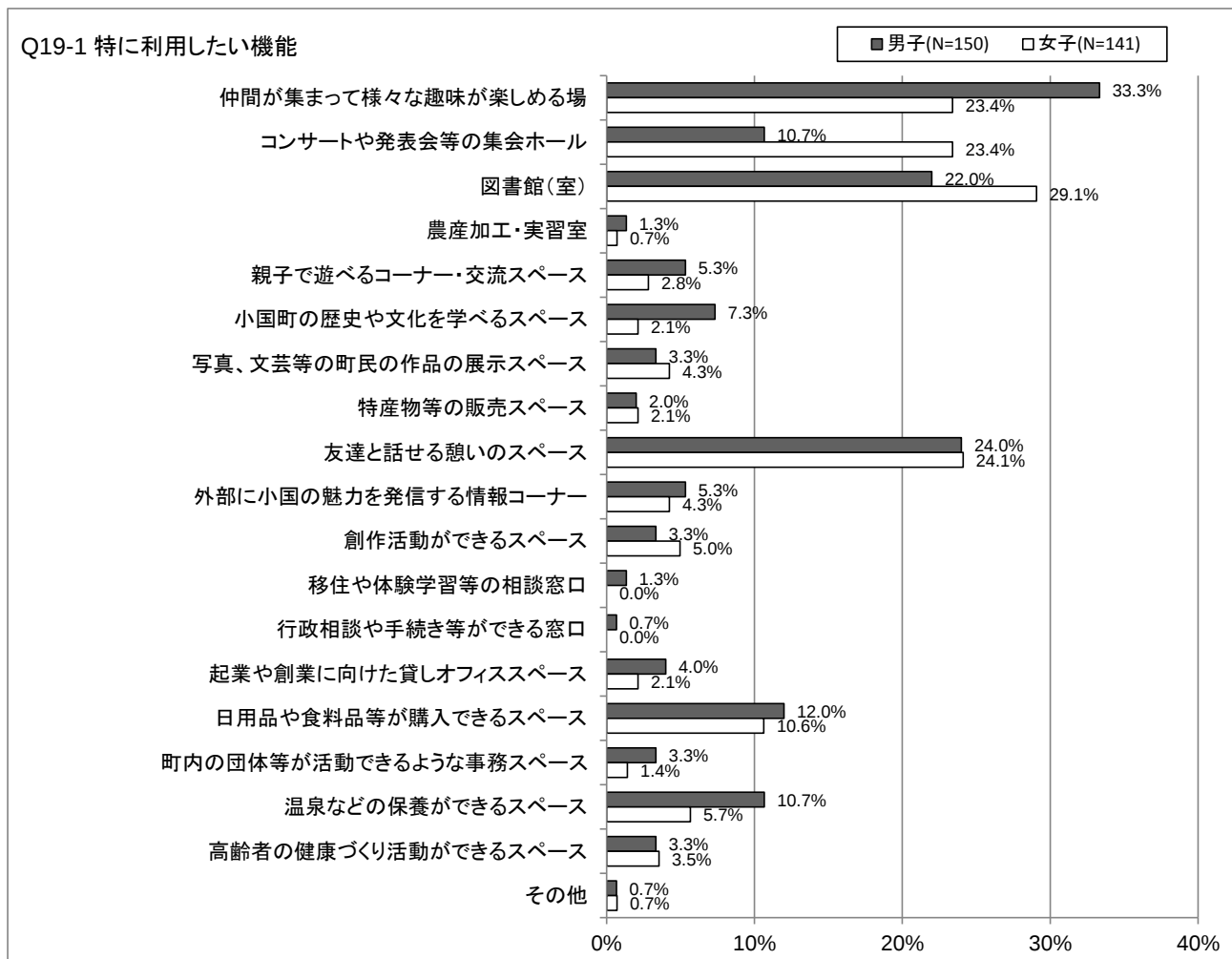


Q19 あなたは、これからのまちづくりの中心になる施設として、おぐに開発総合センターに代わる施設を建てるとしたら、どのような機能があれば良いと思いますか。(〇はいくつでも)

- 次期センターに求める機能として、中学生・高校生からは「仲間が集まって様々な趣味が楽しめる場」や「友達と話せる憩いのスペース」、「図書館（室）」を求める声が多く聞かれた。
- 男女別でみると、「仲間が集まって様々な趣味が楽しめる場」は男子が、「友達と話せる憩いのスペース」や「図書館（室）」は女子がより多く望んでいる。また、「コンサートや発表会等の集会ホール」は男女の差が大きい。



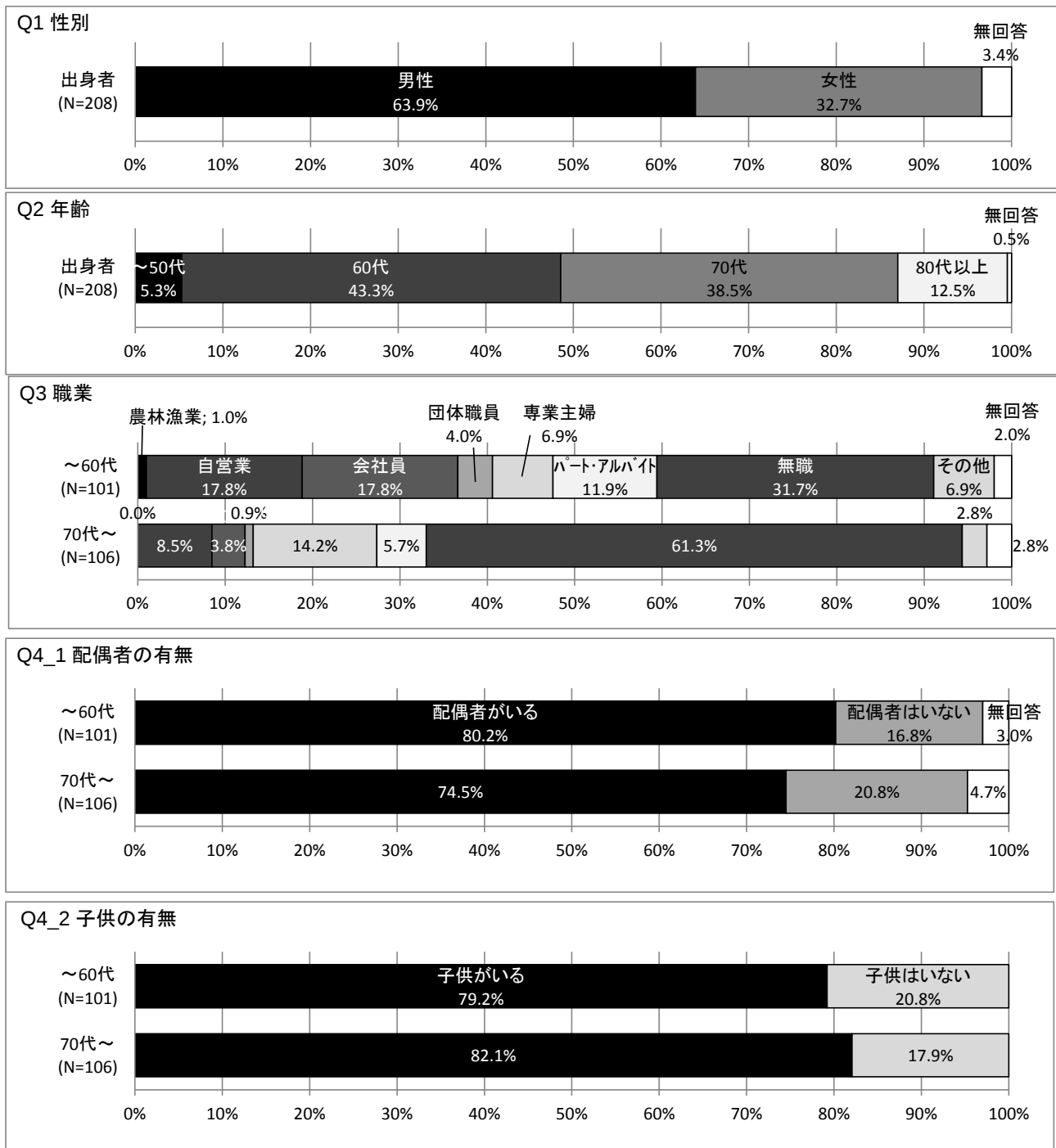




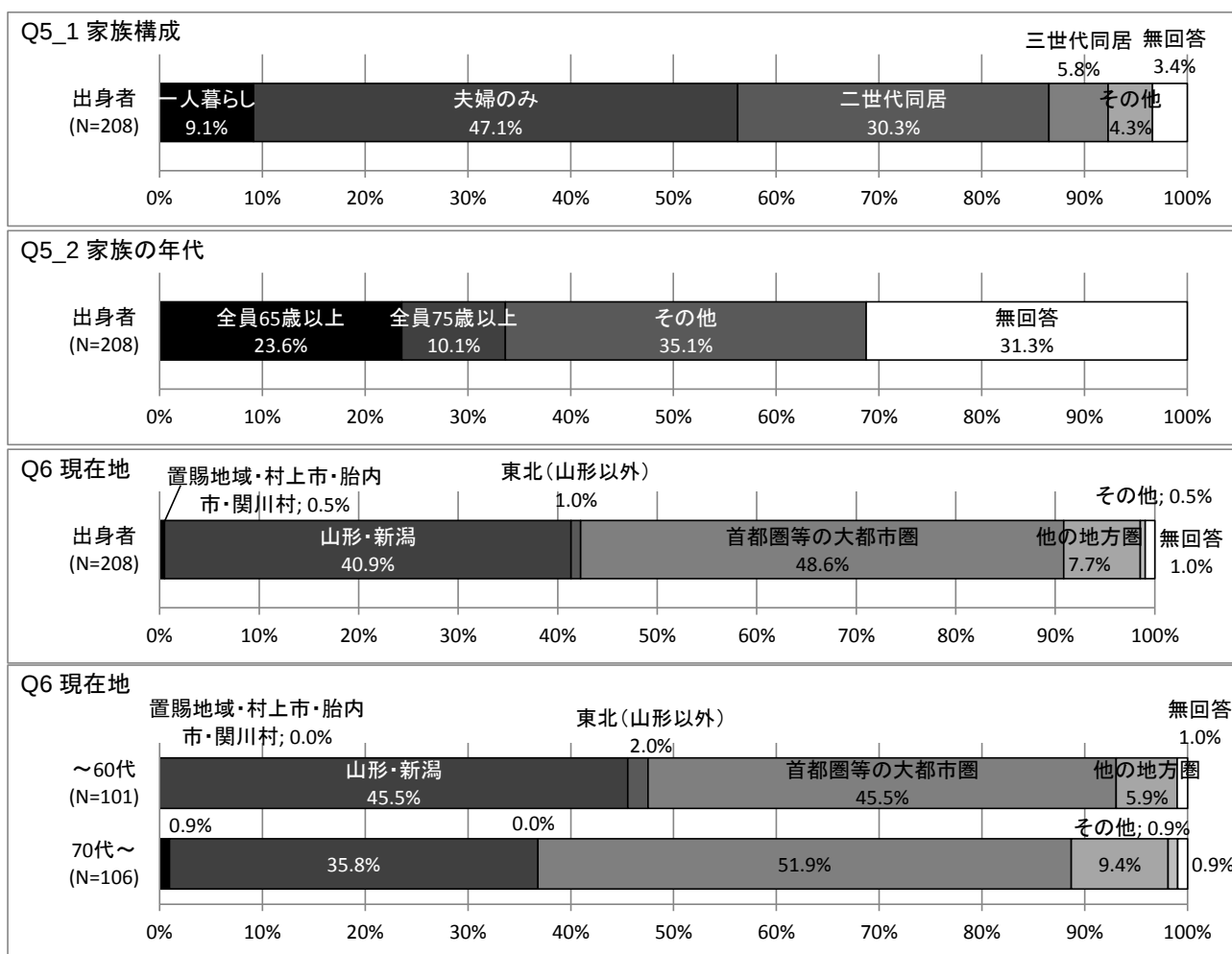
2-3. 町出身者アンケートの結果

(1) 回答者属性

- 回答者は男性が6割超を占めており、年齢構成は60代以上が大半を占めている。
- 回答者の職業をみると、60代までは「自営業」や「会社員」も2割弱みられるが、70代以上は「無職」が6割以上を占めている。
- なお、配偶者や子供がいると回答した人が大半以上を占めている。



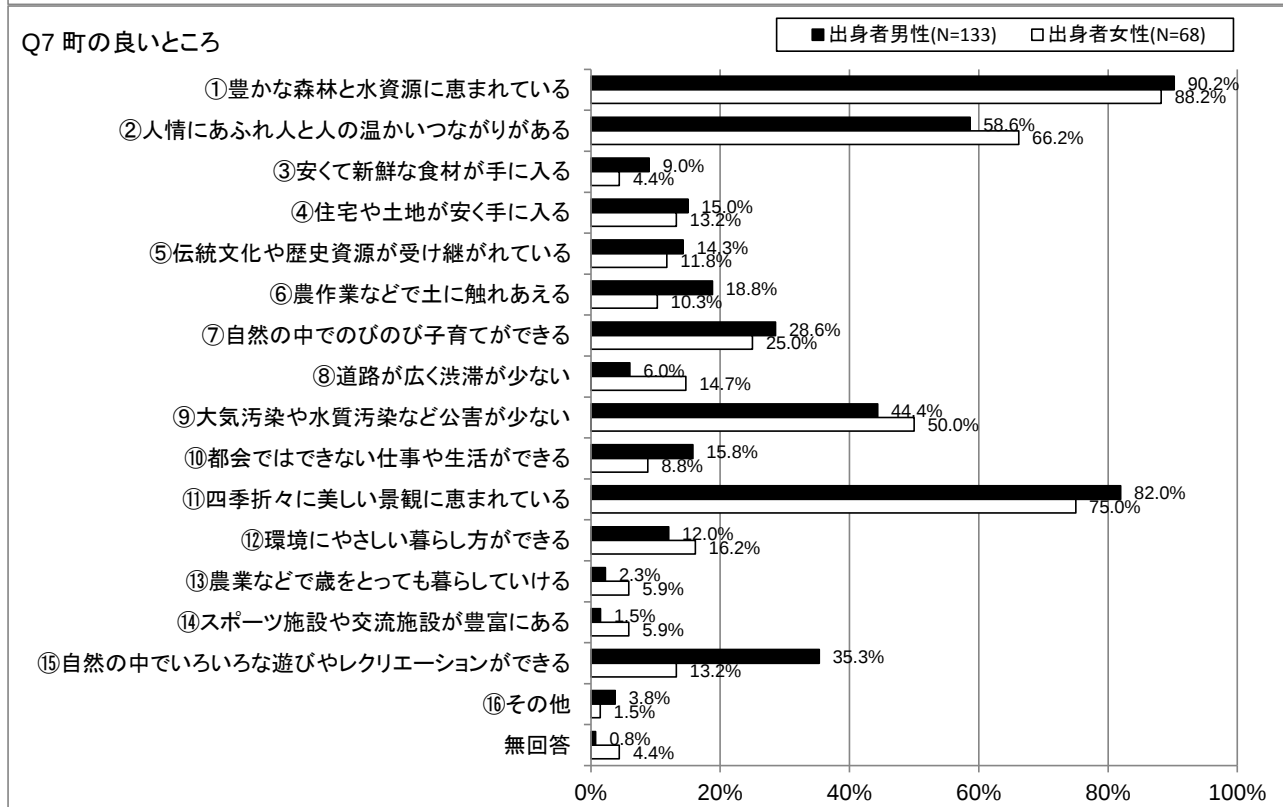
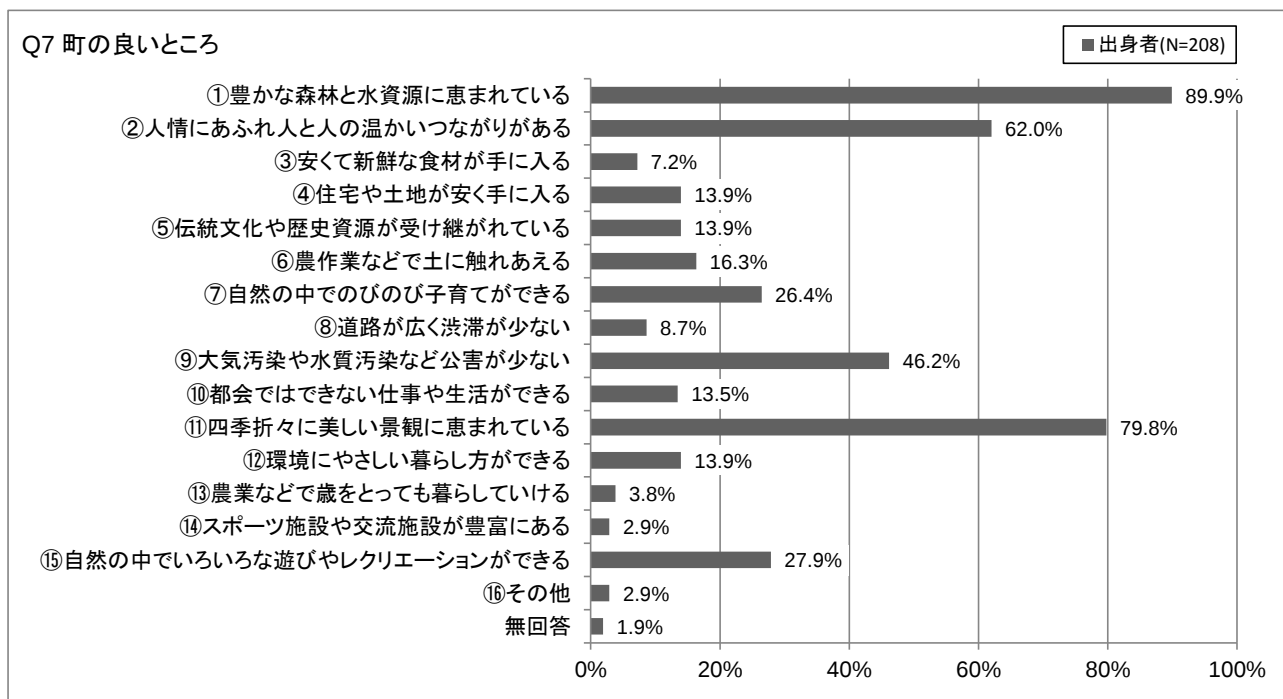
- 回答者の家族構成をみると、「夫婦のみ」が5割近くと最も多く、次いで「二世代同居」が30.3%であり、「一人暮らし」は1割に満たない。
- 現在の住まいをみると、「首都圏等の大都市圏」が約半数を占めており、次いで「隣接市町村以外の山形県・新潟県」が約4割である。
- 現在の住まいについて60代までと70代以上で比較すると、60代までは「隣接市町村以外の山形県・新潟県」に住んでいるケースが多い一方、70代以上では「首都圏等の大都市圏」が5割以上を占めている。



(2) 小国町の魅力・イメージ

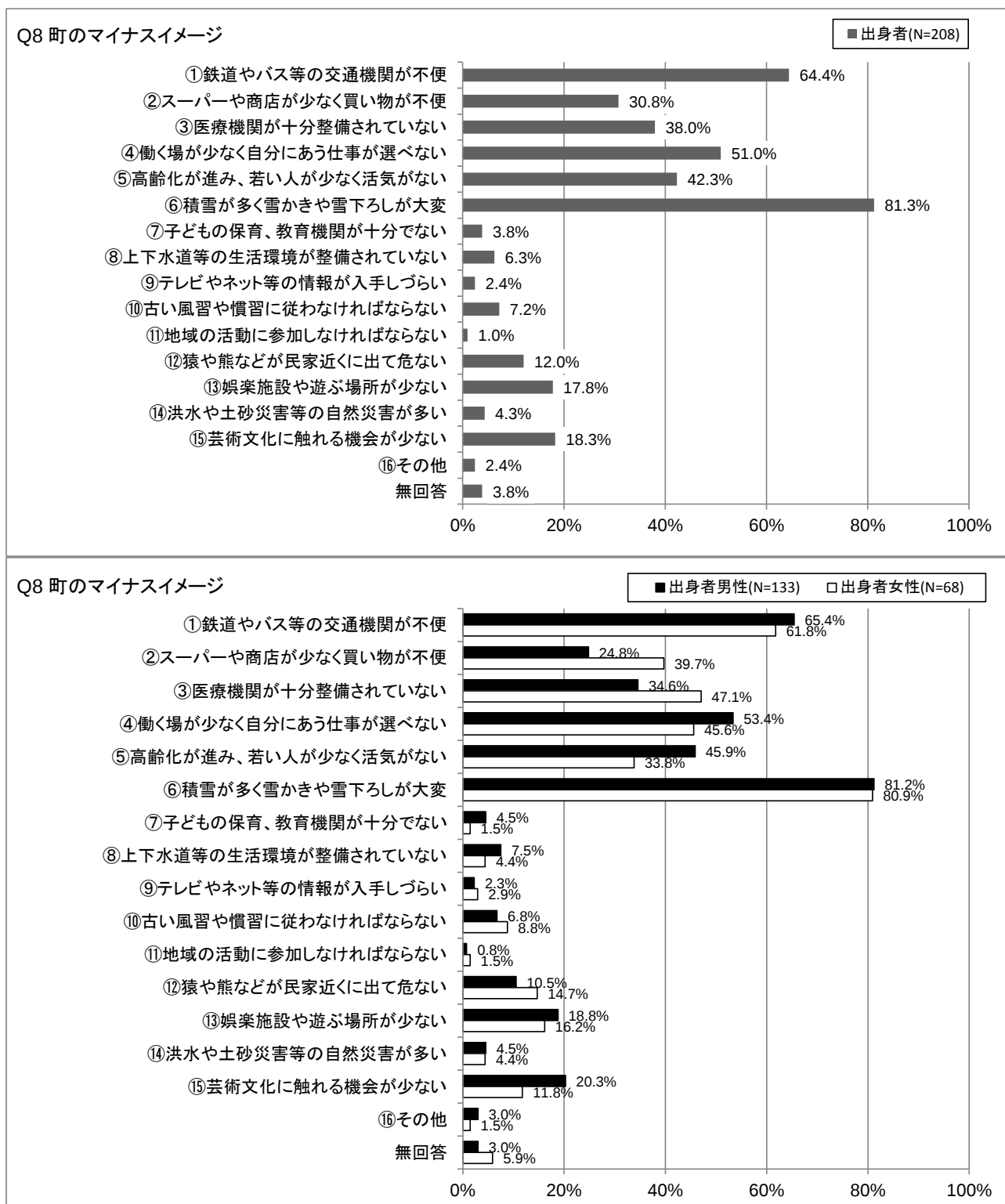
Q7 あなたにとって、小国町の良いところは何ですか。(〇は5つまで)

- 町出身者は特に「豊かな森林と水資源」及び「四季折々に美しい景観」に町の魅力を感じている。
- 性別で比較すると、自然環境を評価する声は男性の方が女性よりも多く聞かれる。一方、女性は「人情にあふれ人と人の温かいつながりがある」点をより町の魅力として感じている。



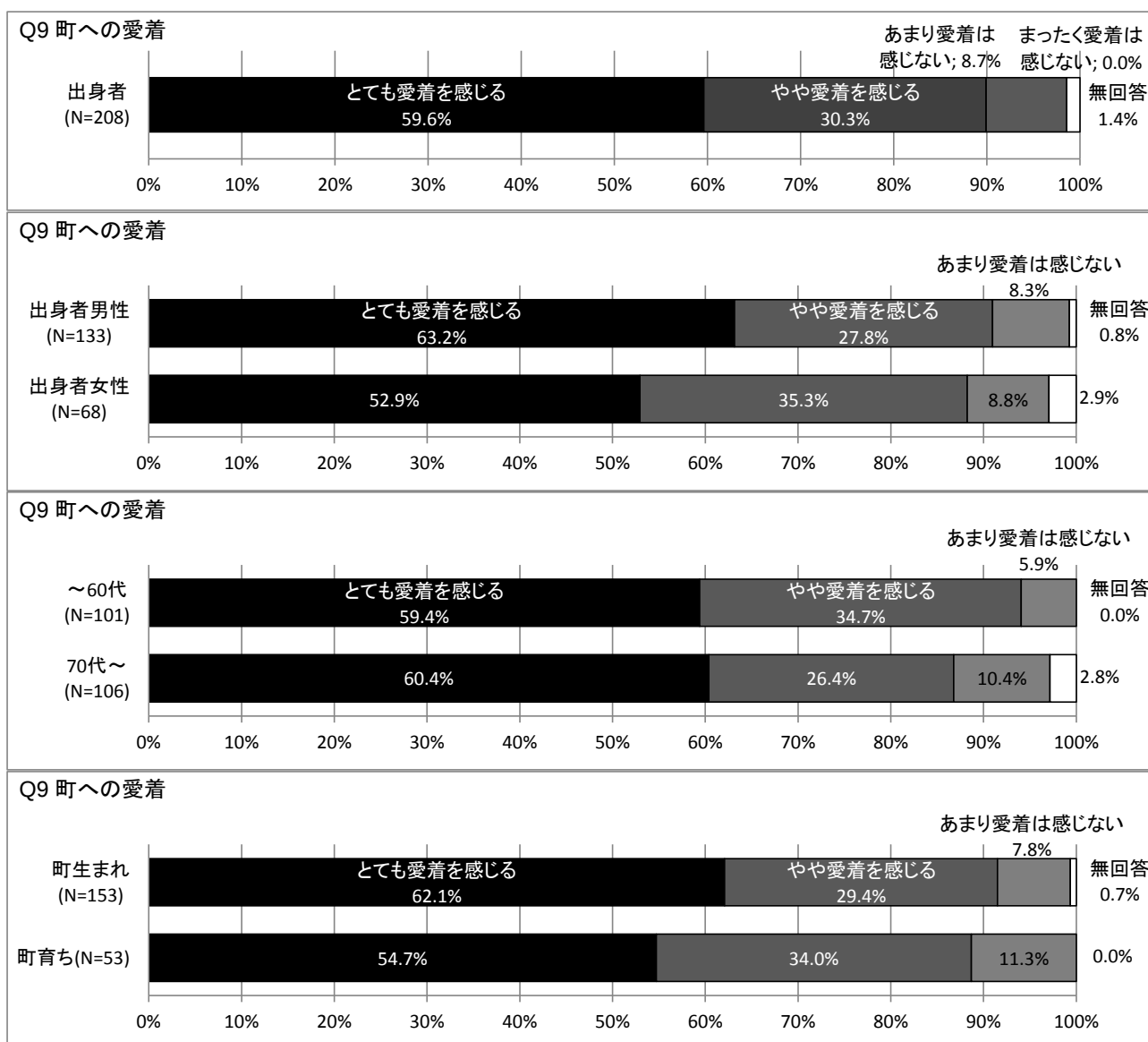
Q8 あなたは、小国町にどんなマイナスイメージをお持ちですか。(〇は5つまで)

- 町のマイナスイメージについては、「積雪が多く雪かきや雪下ろしが大変」が8割超と最も多くから挙げられており、次いで「鉄道やバス等の交通機関が不便」が約65%と、この2項目が特に高い割合となっている。
- 上位2項目以外について性別で比較すると、男性からは働く場がないことや若い人が少なく活気がないことが、女性からは買い物不便さや医療機関の不足がより多く指摘されている。



Q9 あなたは、小国町に愛着を感じますか。(○は1つ)

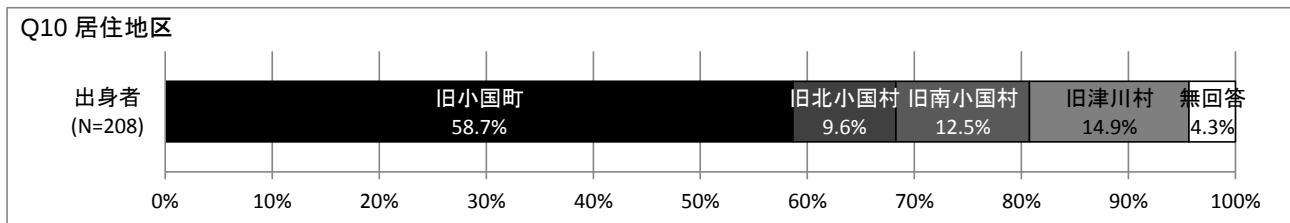
- 町出身者の9割が「小国町に愛着を感じる（とても感じる＋やや感じる）」としている。
- 性別で比較すると、男性の方が「とても愛着を感じる」とする割合が高く6割を超えている。
- 世代でみると、70代以上は「あまり愛着は感じない」が約1割みられる。
- 町に住み始めた時期（後述）とのクロスでみると、町生まれの人の方がより強く愛着を感じて居ることが分かる。



(3) 小国町との関わり

Q10 あなたがかつて住んでいた地区はどこですか。(〇は1つ)

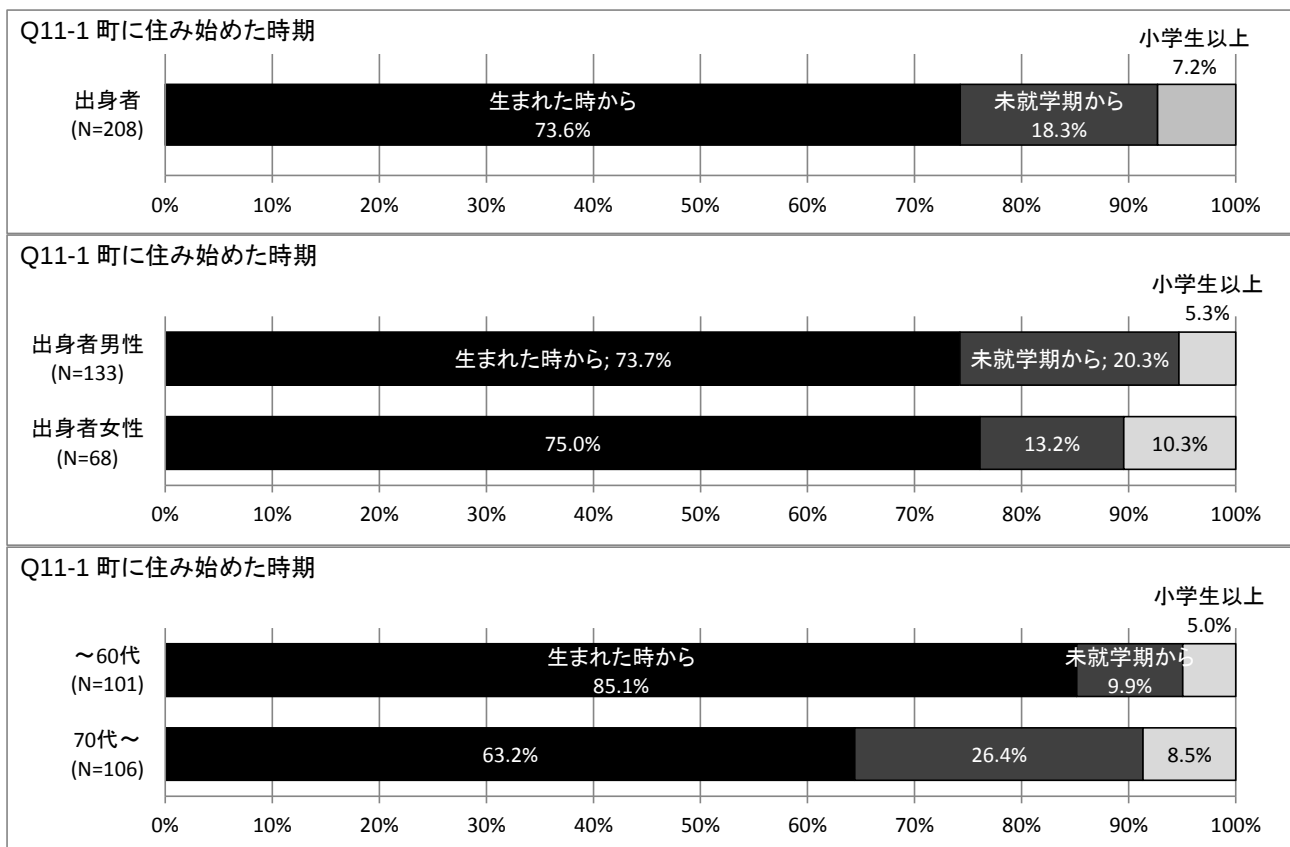
- 小国町に住んでいた時の居住地区をみると、約6割が「旧小国町」である。



Q11 あなたが小国町に住んでいた時期を教えてください。(年齢でお答えください。)

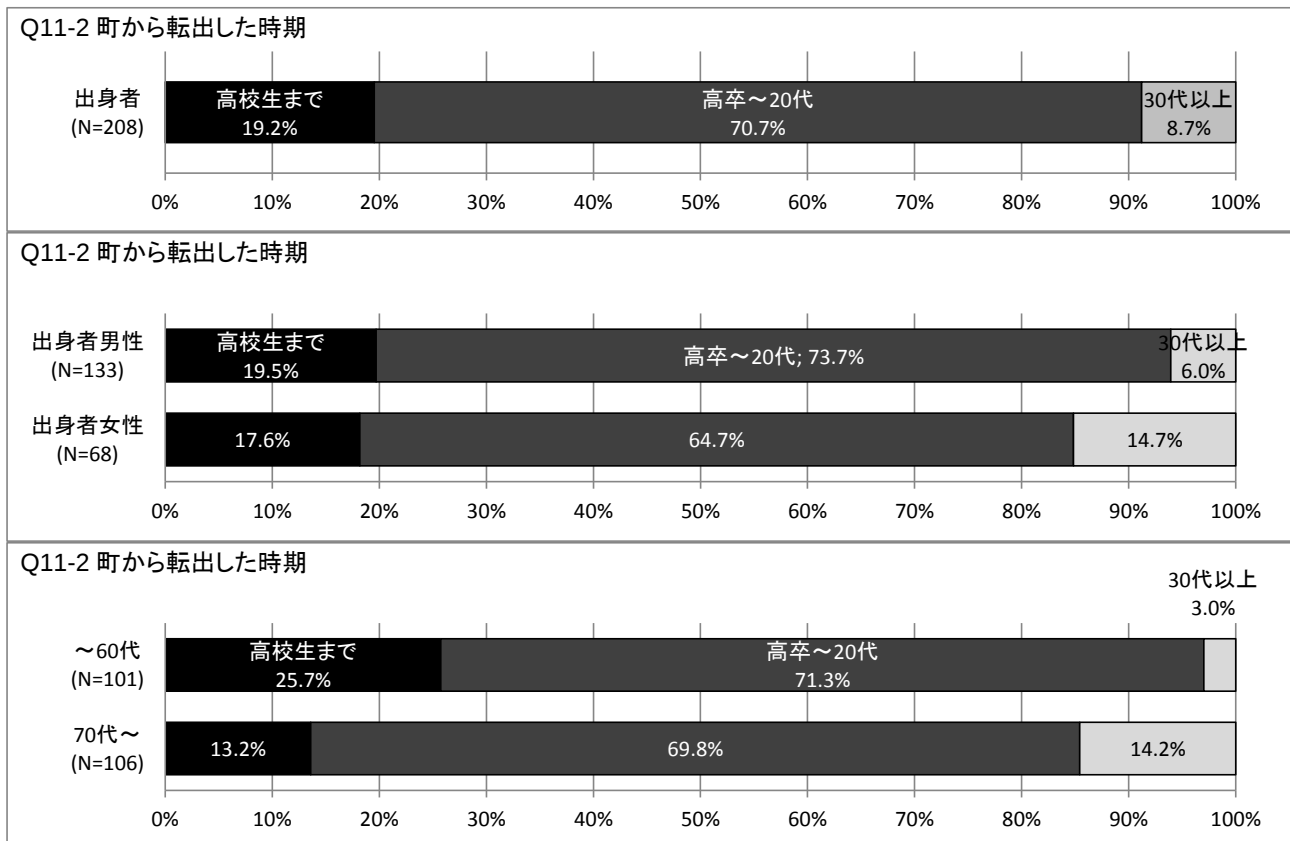
【住み始めた時期】

- 小国町に住み始めた時期をみると、「生まれた時から」が7割超と大部分を占めている。
- 性別で比較すると、男女とも7割超が「生まれた時から」としているが、男性は「未就学期から」が約2割を占めているのに対して、女性は「小学生以上」と比較的成長してから町に転入した人が1割程度みられる。
- 世代別で比較すると、60代までは「生まれた時から」が大部分を占めているのに対して、70代以上では、「未就学期から」が26.4%と高い割合となっている。



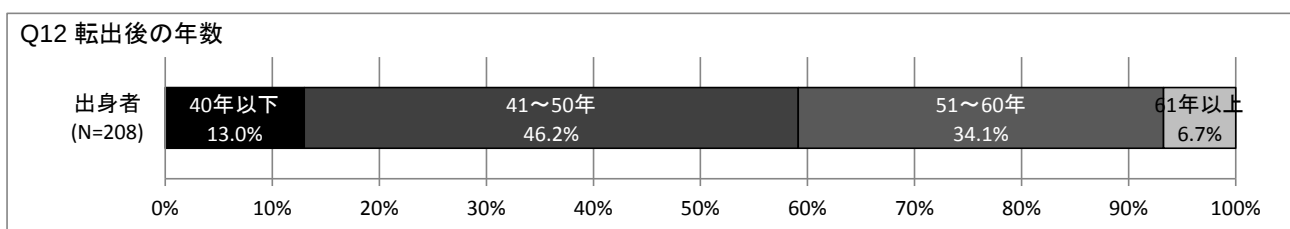
【転出した時期】

- 小国町から転出した時期をみると、全体では、高校卒業以降 20 代のうちに転出した人が 7 割を占めている。
- 性別で比較すると、30 代以上になってから転出した人の割合は女性の方が男性より倍以上大きくなっている。
- 世代別で比較すると、60 代までの世代では、高校生までの間に、すなわち就学期のうちに転出した人が 4 分の 1 を占めている。



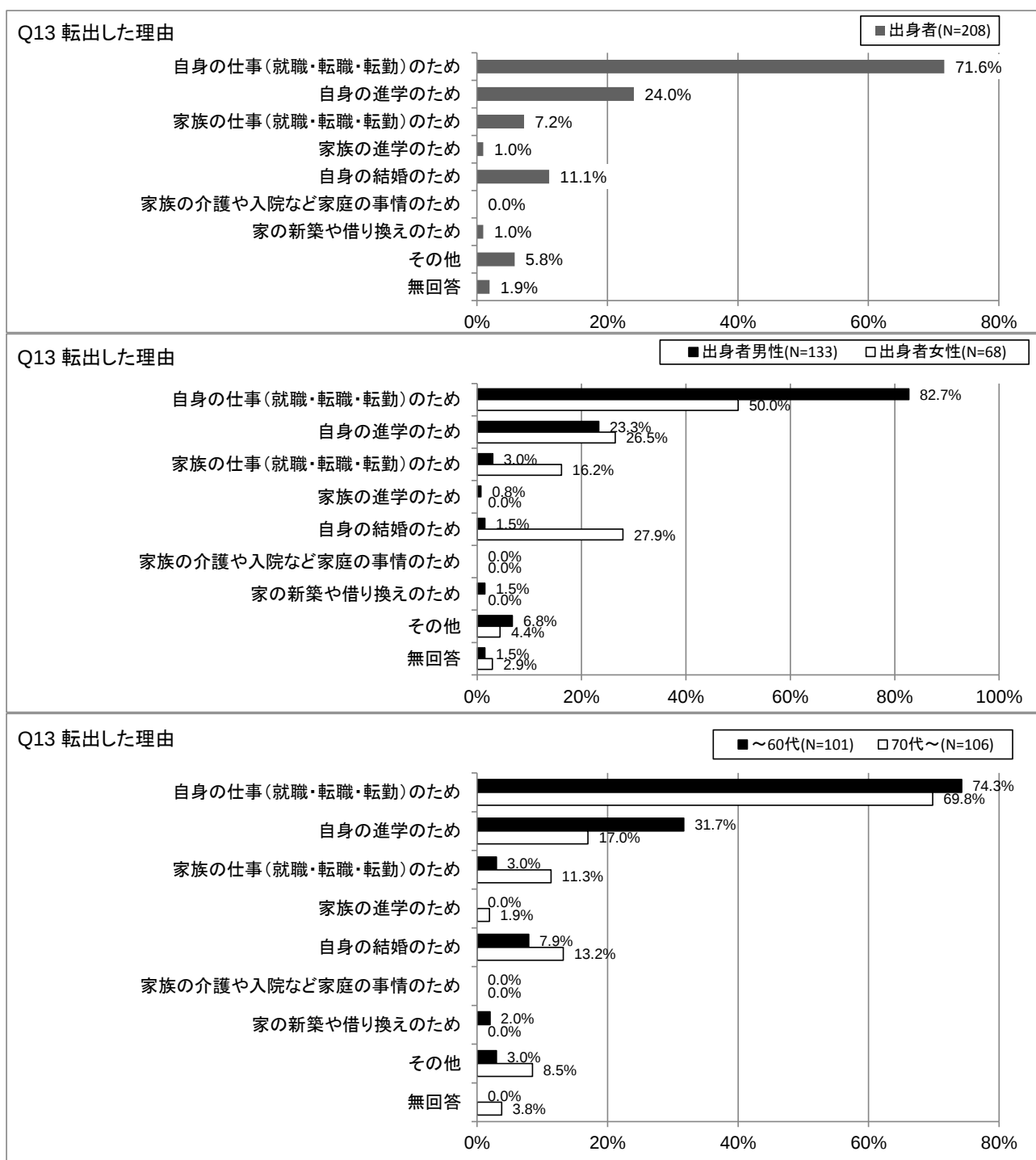
Q12 転出してからどのくらい経ちましたか。(年数でお答えください。)

- 転出後の年数は「41～50 年」が半数近くと最も多く、次いで「51～60 年」が 3 分の 1 強となっている。



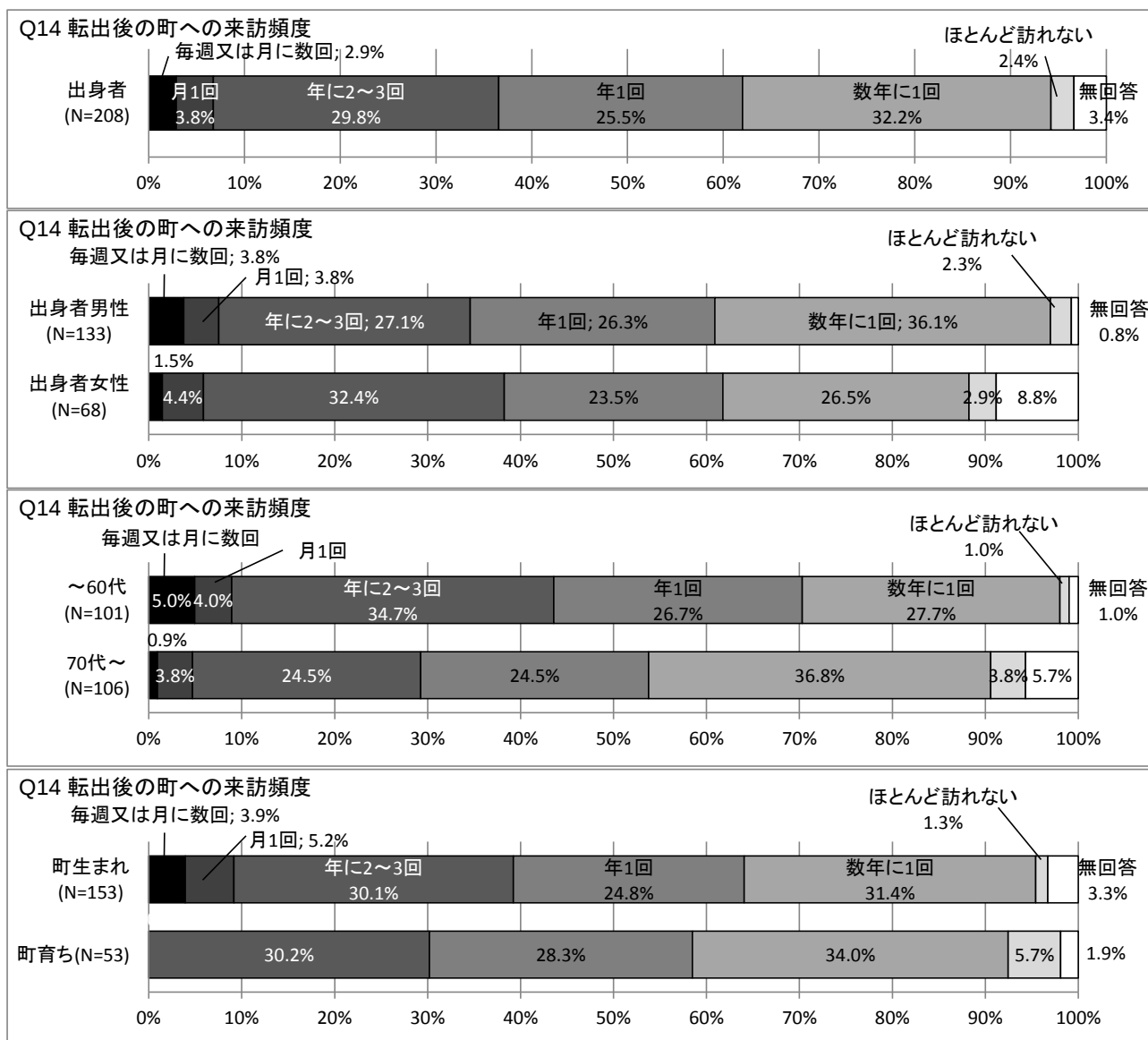
Q13 あなたが小国町から転出したきっかけや理由は何ですか。(〇はいくつでも)

- 転出理由は7割超が「自身の仕事のため」と突出している。
- 性別でみると、男性では「自身の仕事のため」が8割を超えている一方、女性は「自身の結婚のため」も3割弱みられる。
- 世代別でみると、60代までの世代では「自身の進学のため」の割合が70代以上よりも高く、より若い世代では進学のために転出したケースが増えていることがうかがえる。



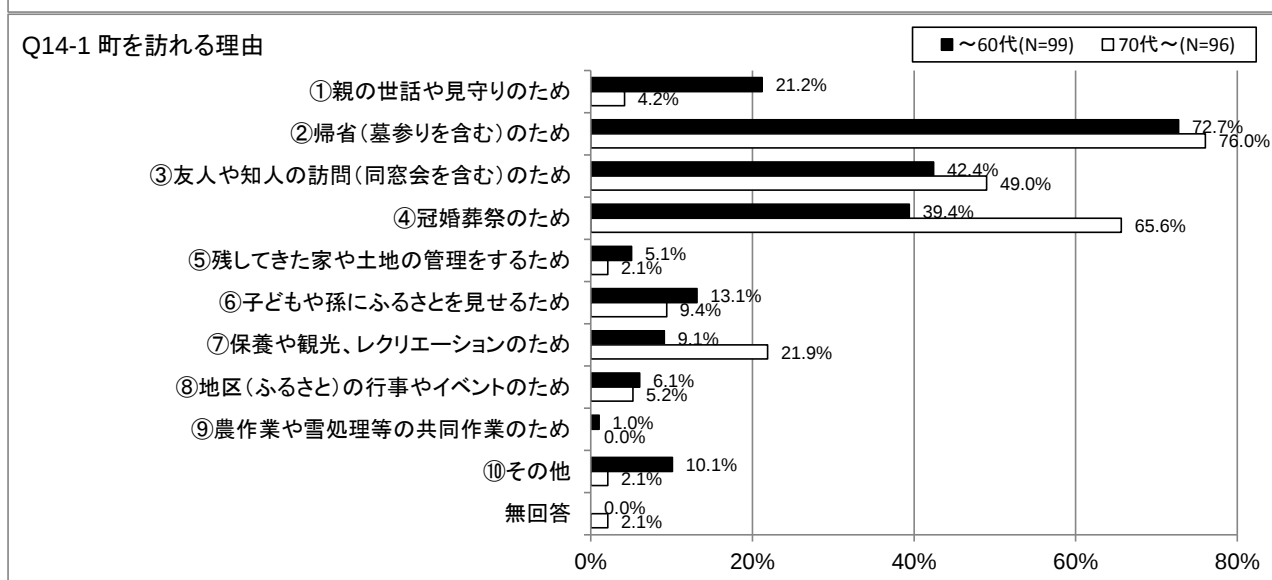
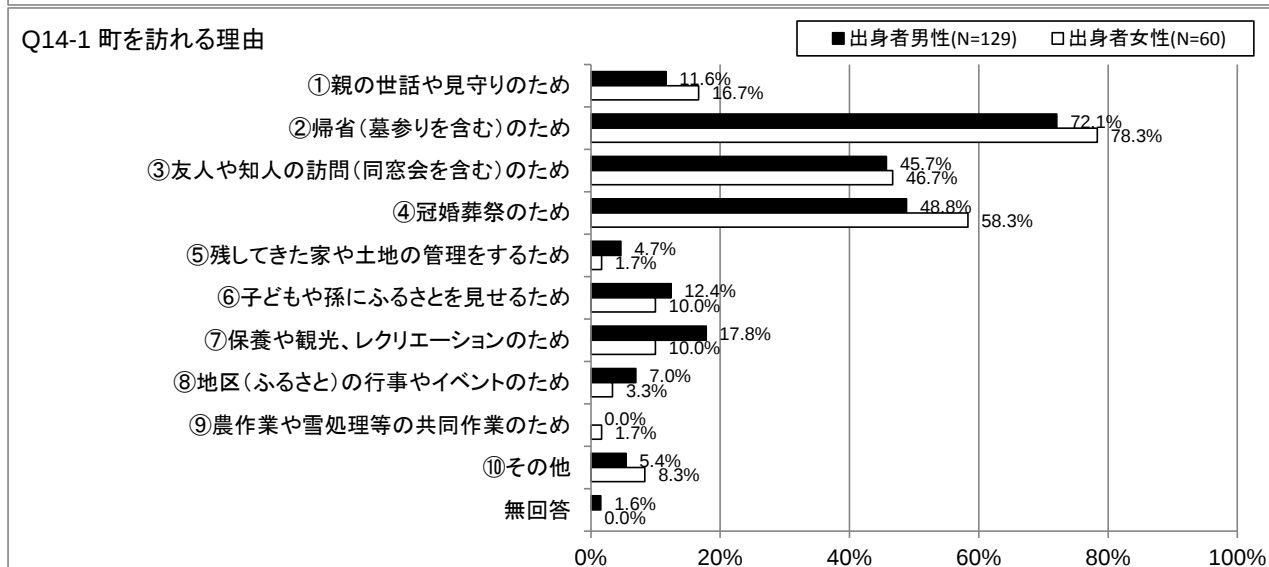
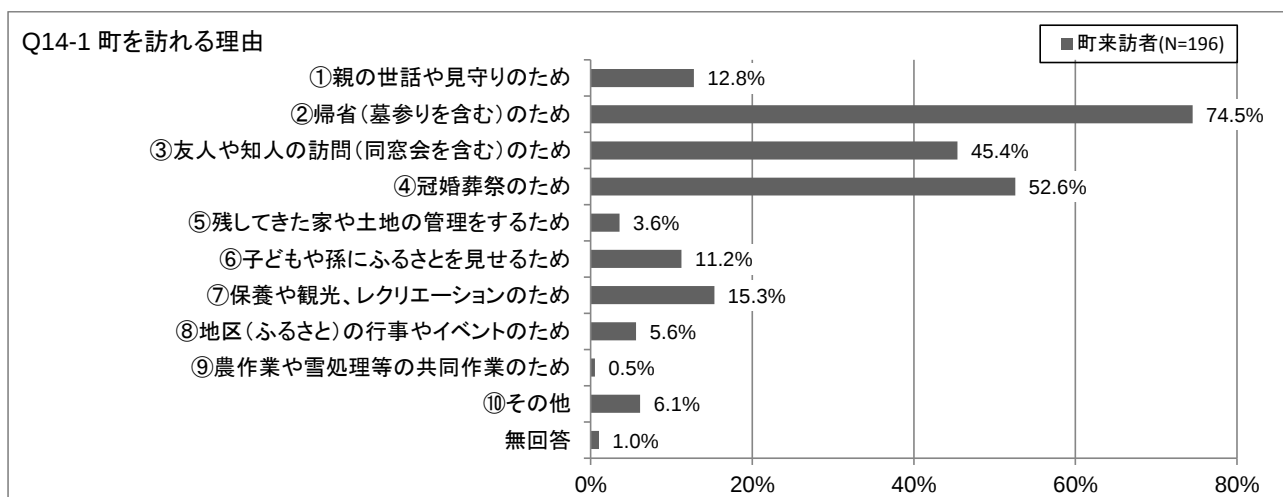
Q14 あなたは、転出された後どのくらいの頻度で小国町を訪れていますか。(〇は1つ)

- 転出後の町への来訪頻度をみると、全体では年に1回以上訪れる人が6割を超えている。
- 性別で比較すると、「年に2～3回」は女性の方が多く、「数年に1回」は男性の方が多い。
- 世代別でみると、60代までの世代では「毎週又は月に数回」と頻繁に町を訪れる人も5%程度みられる。
- 町生まれか町育ちかで比較すると、町生まれの人の方が来訪頻度は高くなっている。



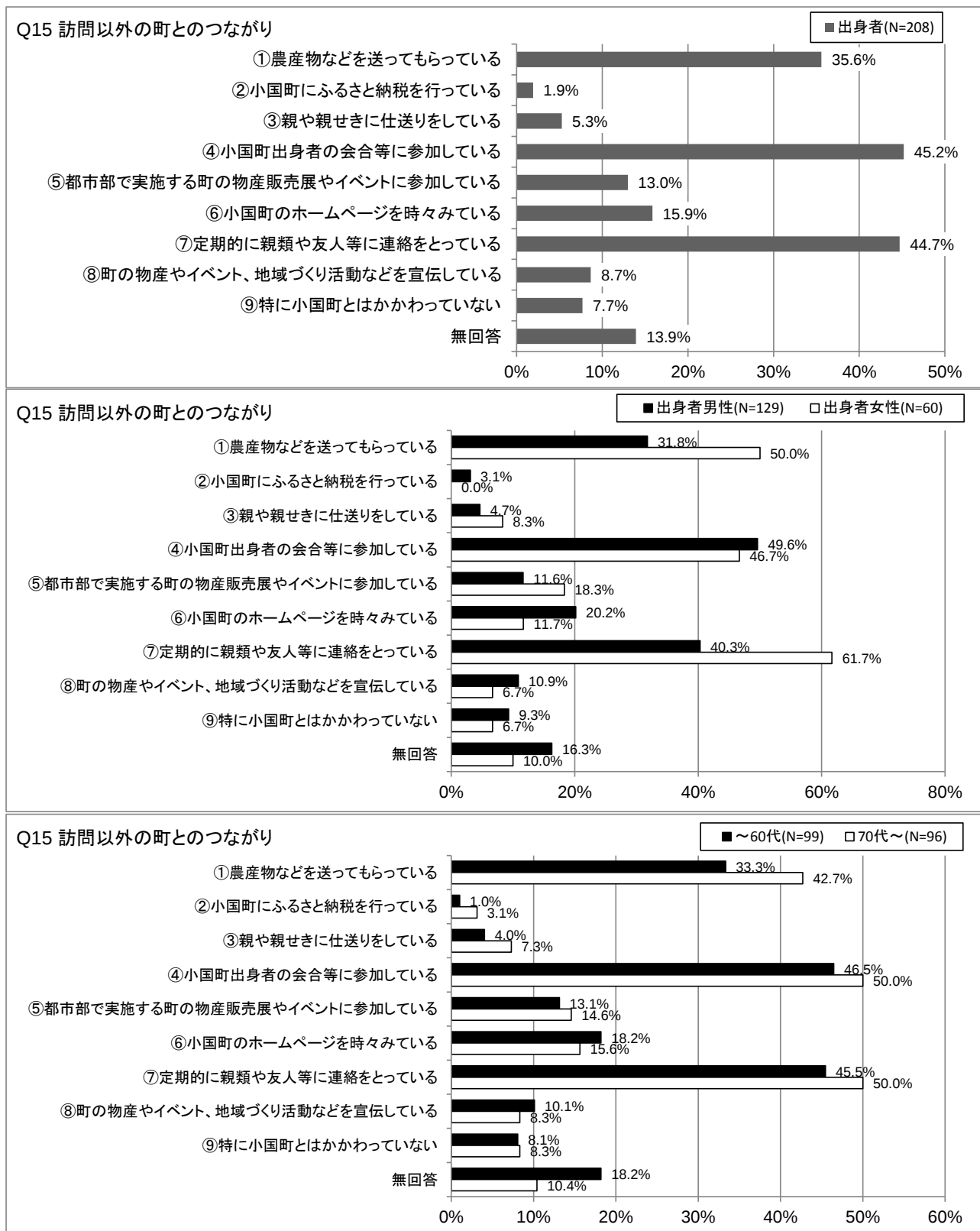
Q14-1 Q14で①～⑤を選択した方に伺います。転出後の小国町への訪問理由は何ですか。(〇はいくつでも)

- 来訪理由は「帰省」と「冠婚葬祭」が半数以上から挙げられており、特に70代以上では「冠婚葬祭」のために町を訪れる機会が多いことがうかがえる。



Q15 訪問以外に、小国町とのつながりがありますか。(〇はいくつでも)

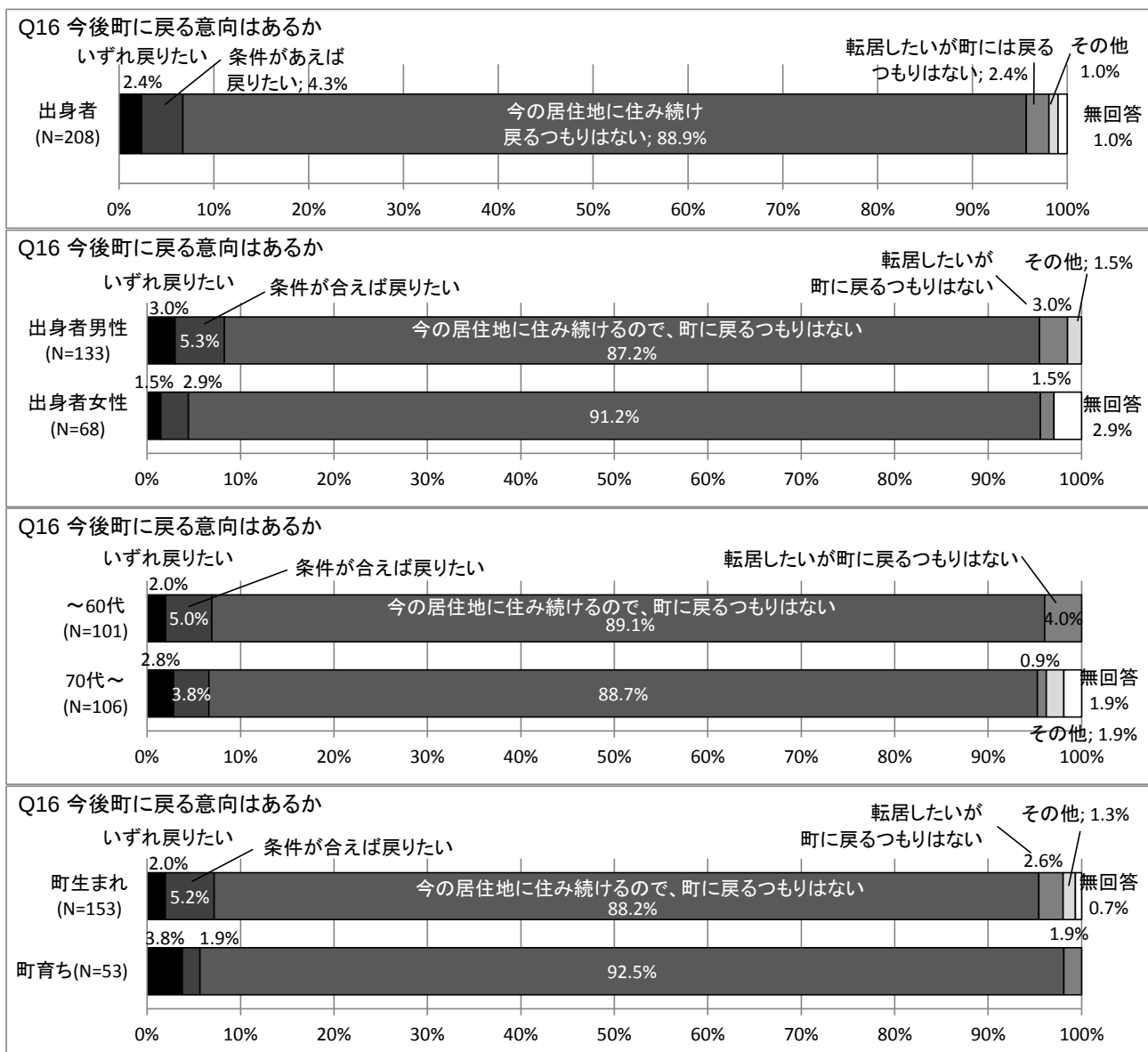
- 訪れる以外での町とのつながりとしては、「小国町出身者の会合等に参加している」「定期的に親類や友人等に連絡をとっている」「農産物等を送ってもらっている」等が多くみられる。



(4) 今後の小国町との関わりに関する意向

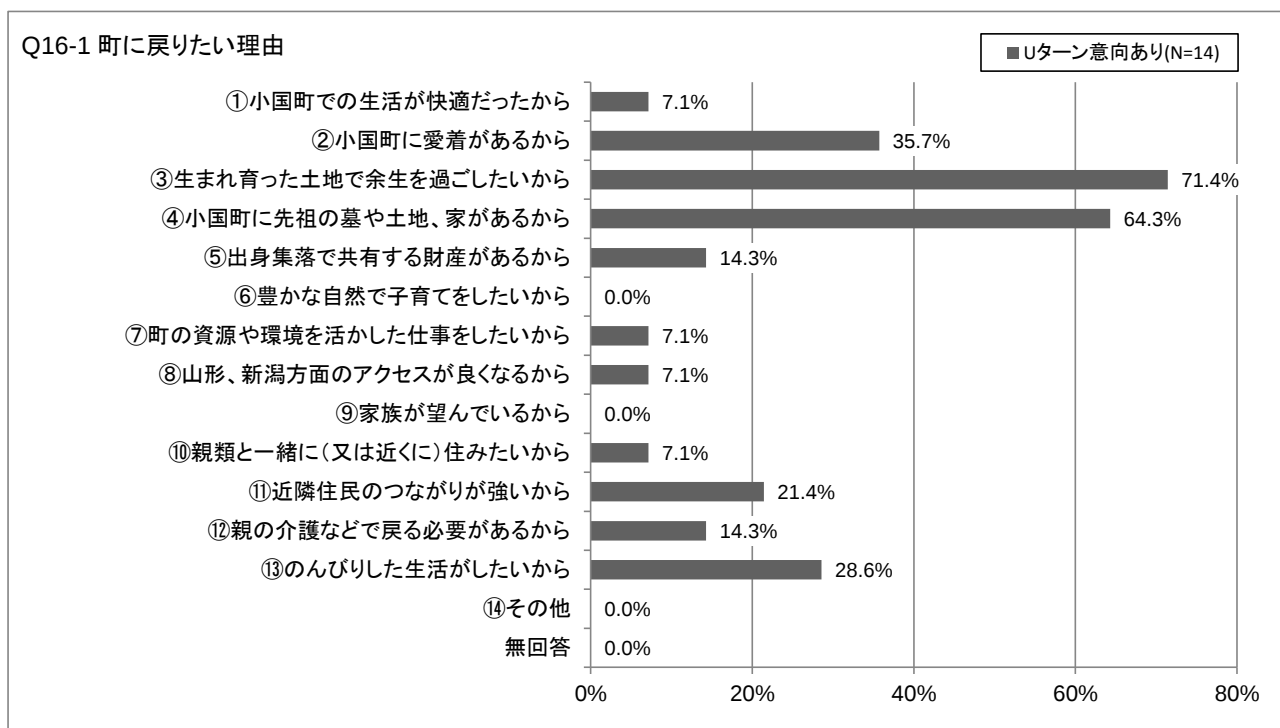
Q16 将来、小国町に戻る意向はありますか。(〇は1つ)

- 町への U ターン意向をみると、9 割近くの人が「今の居住地に住み続け、町に戻るつもりはない」としている。
- 男女で比較すると、男性の方が戻りたいと思っている人が若干多いが、世代ではあまり大きな違いは見られない。
- 町生まれの人は 5.2%が「条件が合えば戻りたい」としているのに対して、町育ちの人が「いずれ戻りたい」が 3.8%と、町生まれの人よりも若干高い割合となっている。



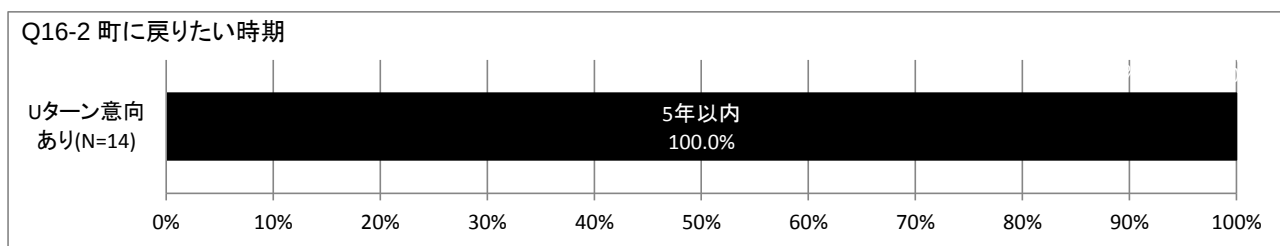
Q16-1 Q16で①または②を選択した方に伺います。小国町に戻りたいと思う理由は何ですか。(〇はいくつでも)

- 町への U ターン意向を示した人(「いずれ戻りたい」+「条件が合えば戻りたい」)にその理由を聞くと、「生まれ育った土地で余生を過ごしたいから」が7割超、「町に先祖の墓や土地、家があるから」が6割超と特に多くなっている。
- これらの他には、「小国町に愛着があるから」や「のんびりした生活がしたいから」などが比較的高い。



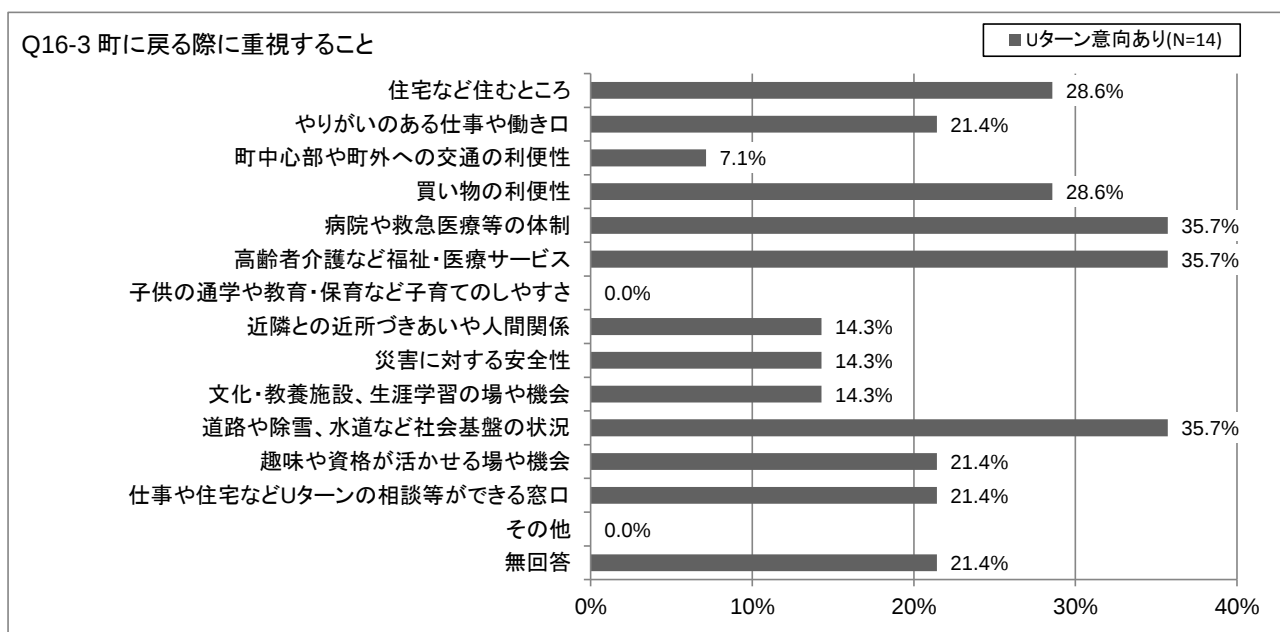
Q16-2 Q16で①または②を選択した方に伺います。いつごろ小国町に戻りたいと思いますか。(〇は1つ)

- 町に戻りたい時期については、全員が「5年以内」と回答している。



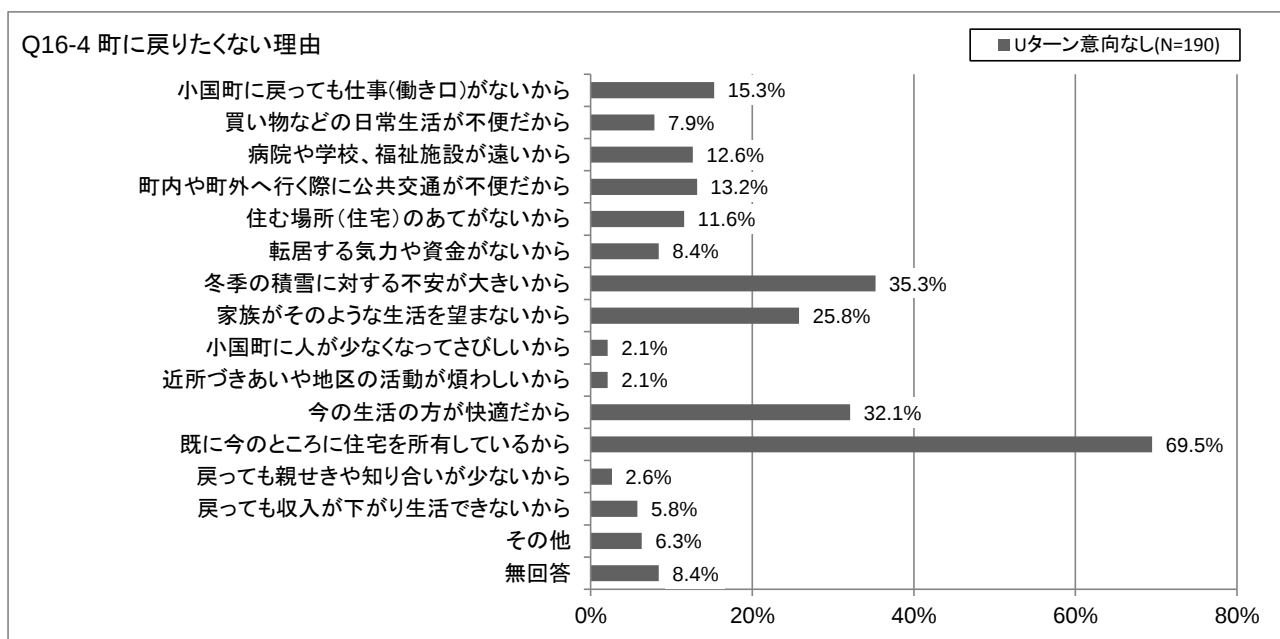
Q16-3 Q16で①または②を選択した方に伺います。小国町に戻る際に重視することは何ですか。(〇は
いくつでも)

- 町に U ターンする際に重視することとしては、「病院や救急医療等の体制」「高齢者介護など福祉・医療サービス」「道路や除雪、水道など社会基盤の状況」が比較的高い割合となっている。



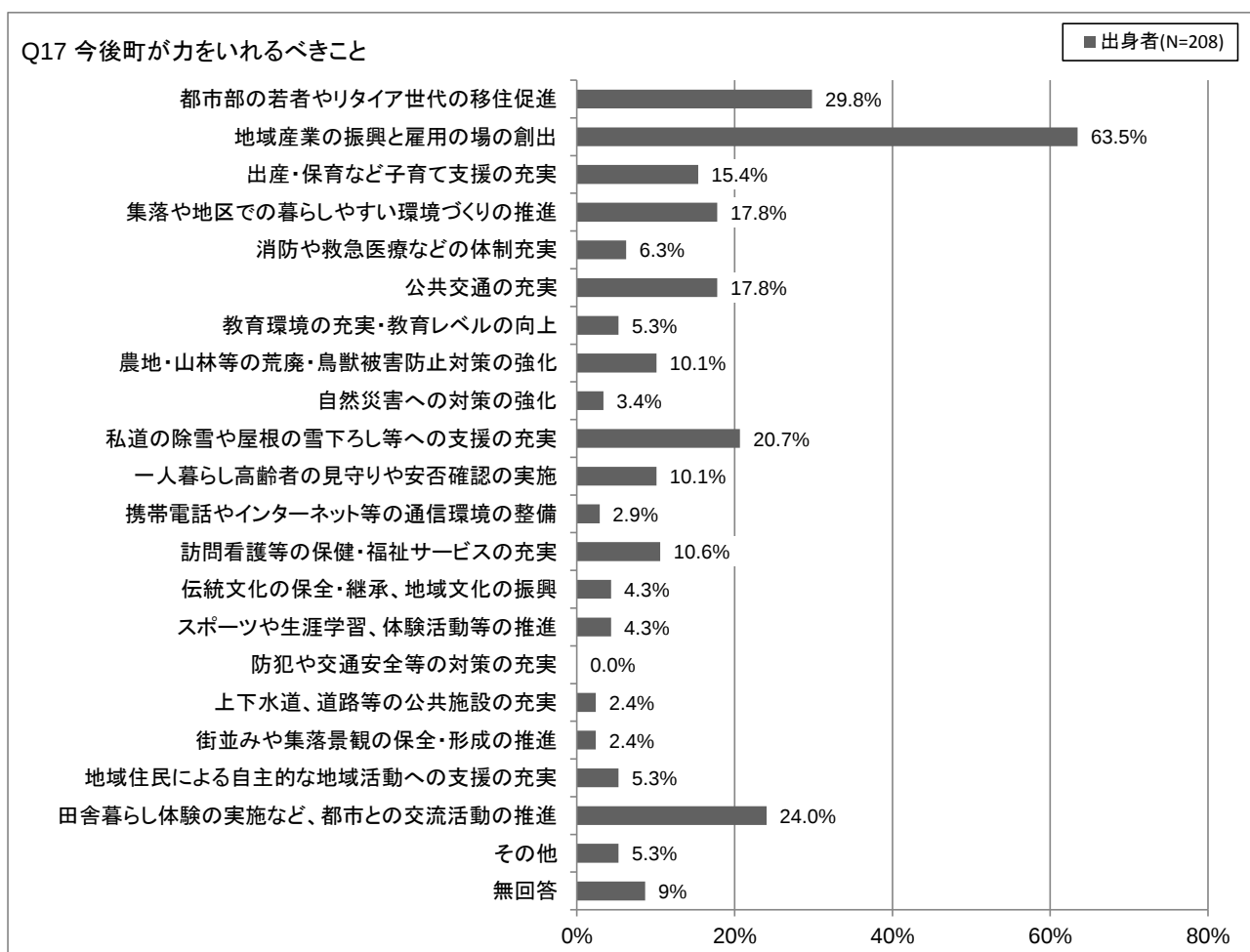
Q16-4 Q16で③または④を選択した方に伺います。小国町に戻りたいと思わない理由は何ですか。(〇
はいくつでも)

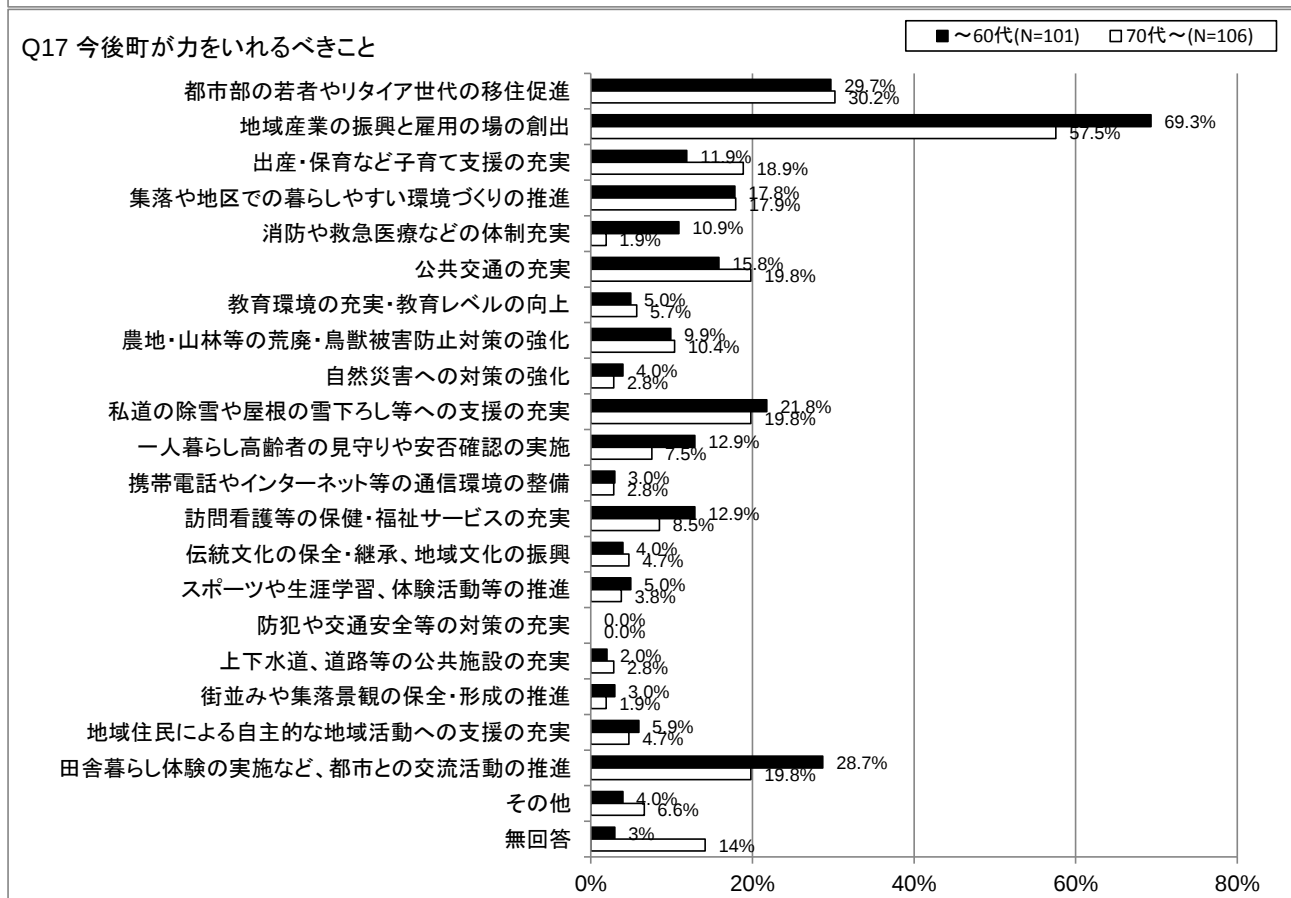
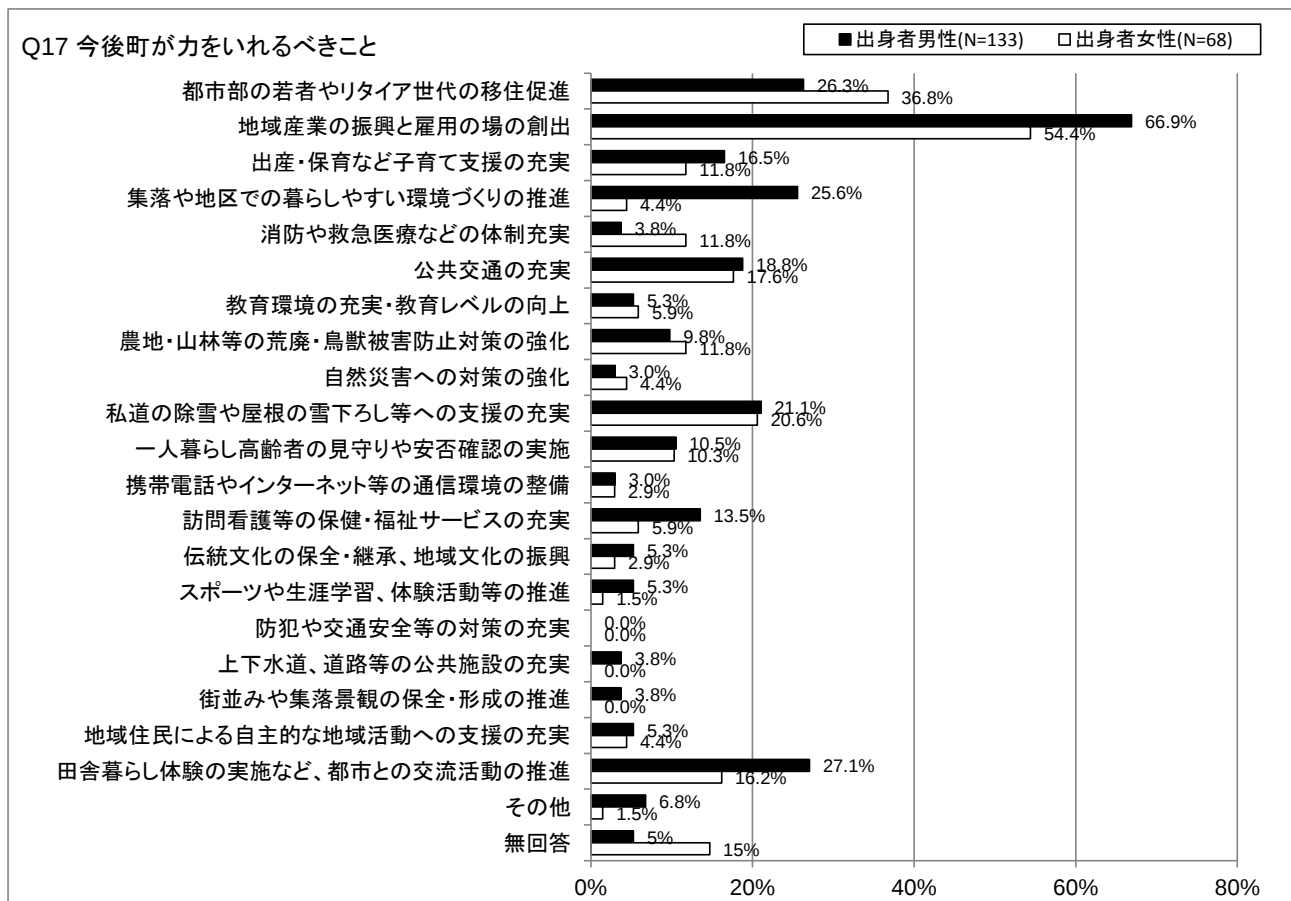
- 町に戻るつもりはないと回答した人に対し、その理由を聞いたところ、「既に今のところに住宅を所有しているから」が約7割と突出しており、この他には、「冬季の積雪に対する不安が大きいから」「今の生活の方が快適だから」等が比較的高い割合となっている。



Q17 あなたは、これからの小国町のまちづくりにおいて、どのようなことに力を入れるべきだと思いますか。

- 今後の小国町のまちづくりに対しての町出身者の意見をみると、全体としては「地域産業の振興と雇用の場の創出」に力を入れるべきとの声が6割以上と最も多く聞かれている。
- この他には、「都市部の若者やリタイア世代の移住促進」や「田舎暮らし体験の実施など、都市との交流活動の推進」等が比較的多くみられる。
- 「地域産業の振興と雇用の場の創出」や「田舎暮らし体験の実施など、都市との交流活動の推進」については男性からより多く指摘されており、女性は「都市部の若者やリタイア世代の移住促進」に力を入れるべきとの意見が男性よりやや多い。
- また「地域産業の振興と雇用の場の創出」については、60代までの世代の方がより多く指摘している。

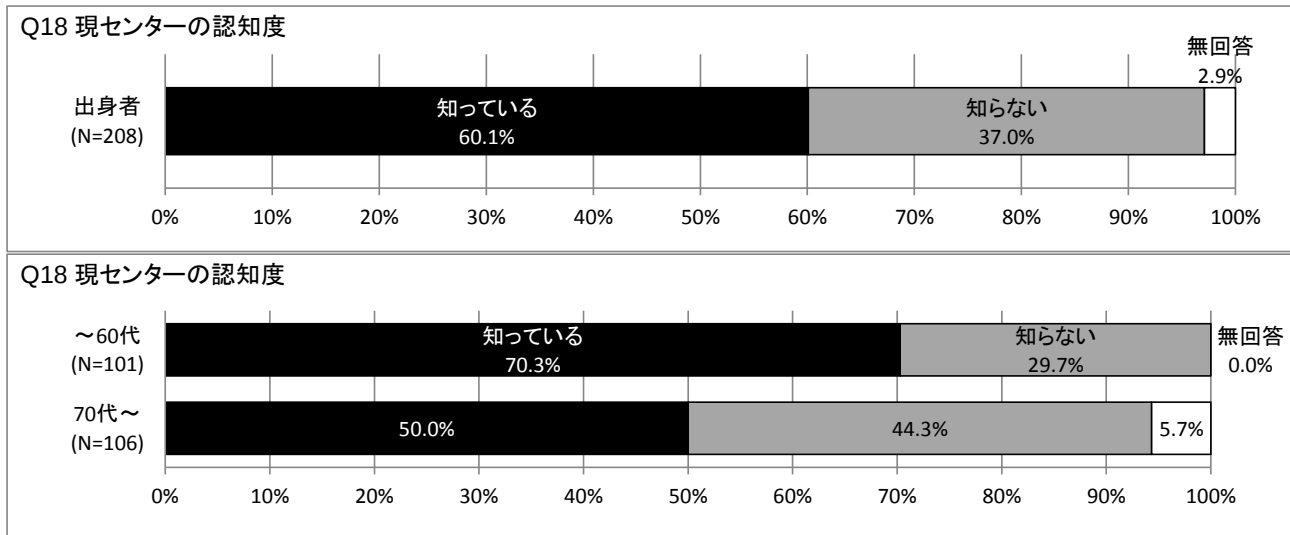




(5) まちづくりの拠点施設について

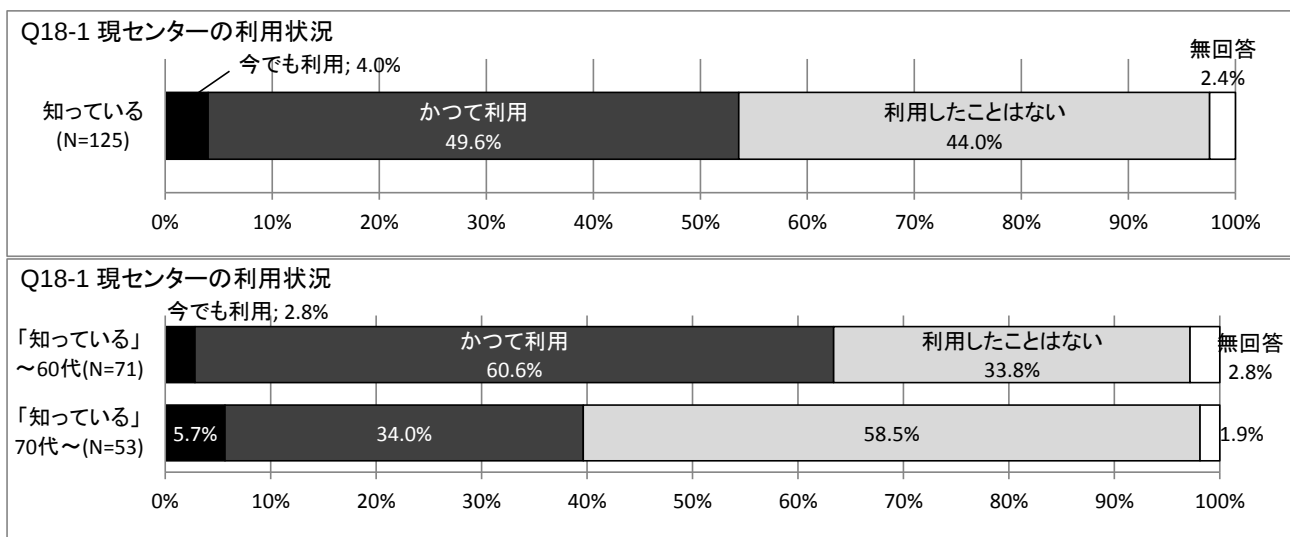
Q19 あなたは、“おぐに開発総合センター”を知っていますか。(○は1つ)

- 町出身者の約6割は現センターのことを知っており、60代までの比較的若い世代の方が認知度は高い。



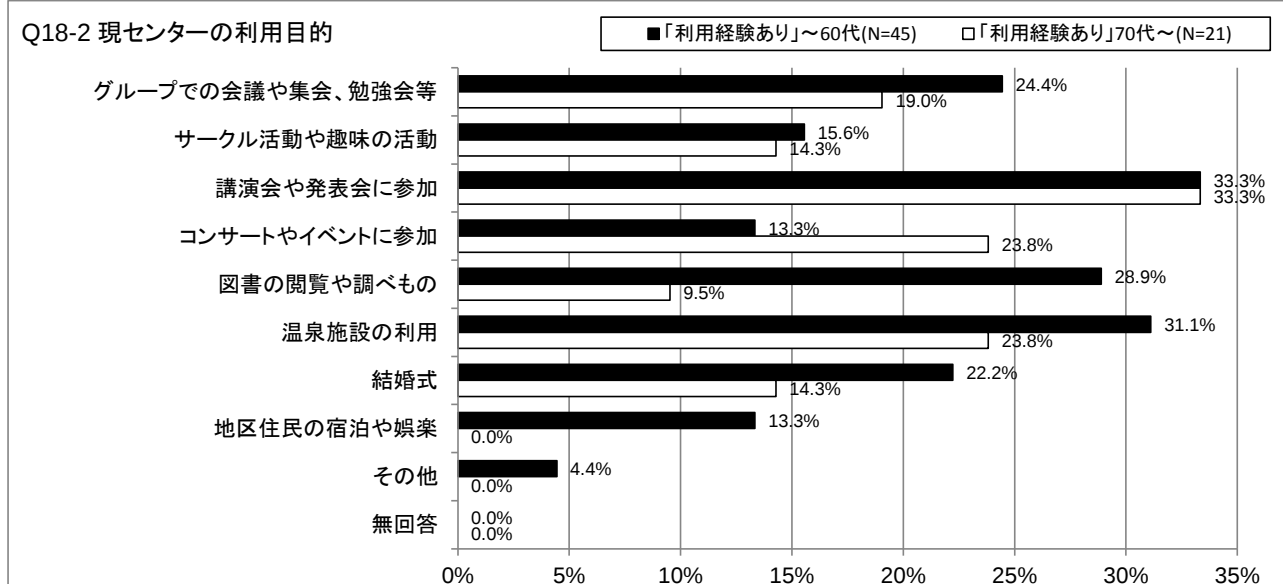
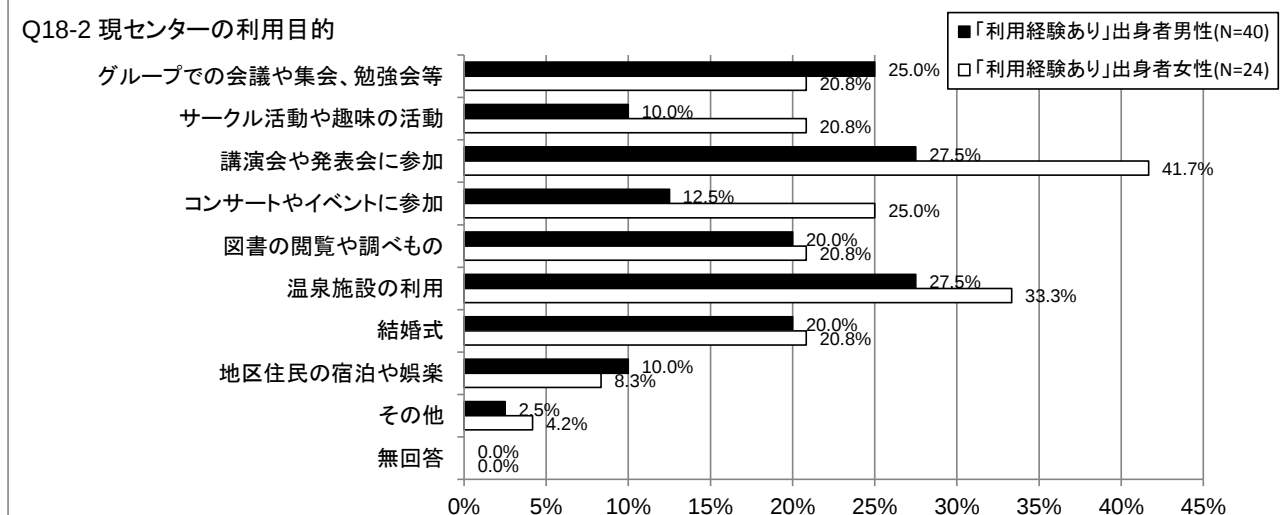
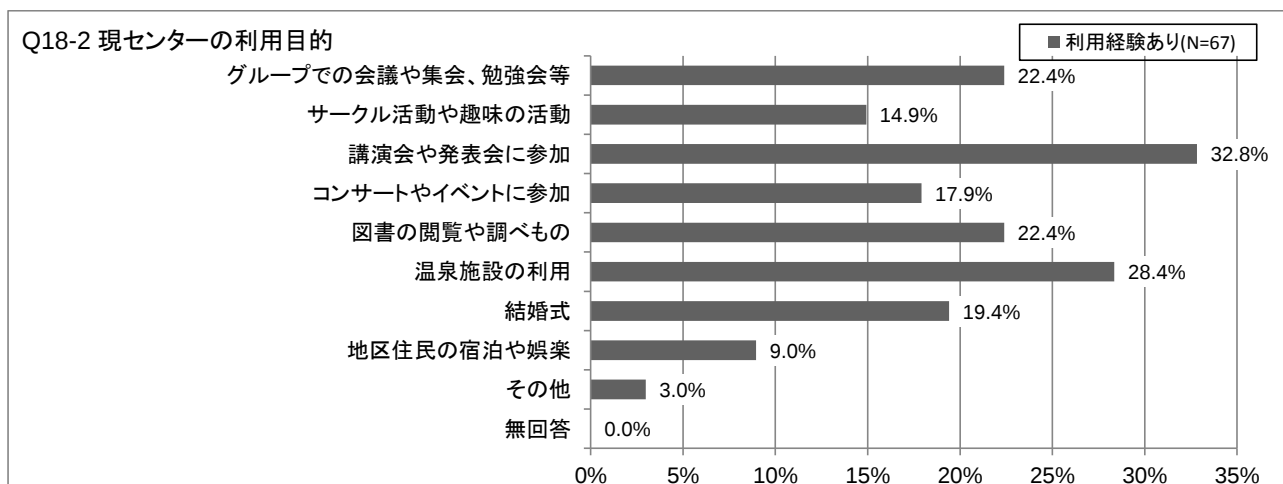
Q19-1 あなたは、おぐに開発総合センターを利用したことがありますか。(○は1つ)

- 現センターを「知っている」町出身者の約半数は、「かつては利用していた」としている。
- 利用状況についても、60代までの世代では6割超が「かつては利用していた」としており、70代以上よりも高い利用状況を示している。



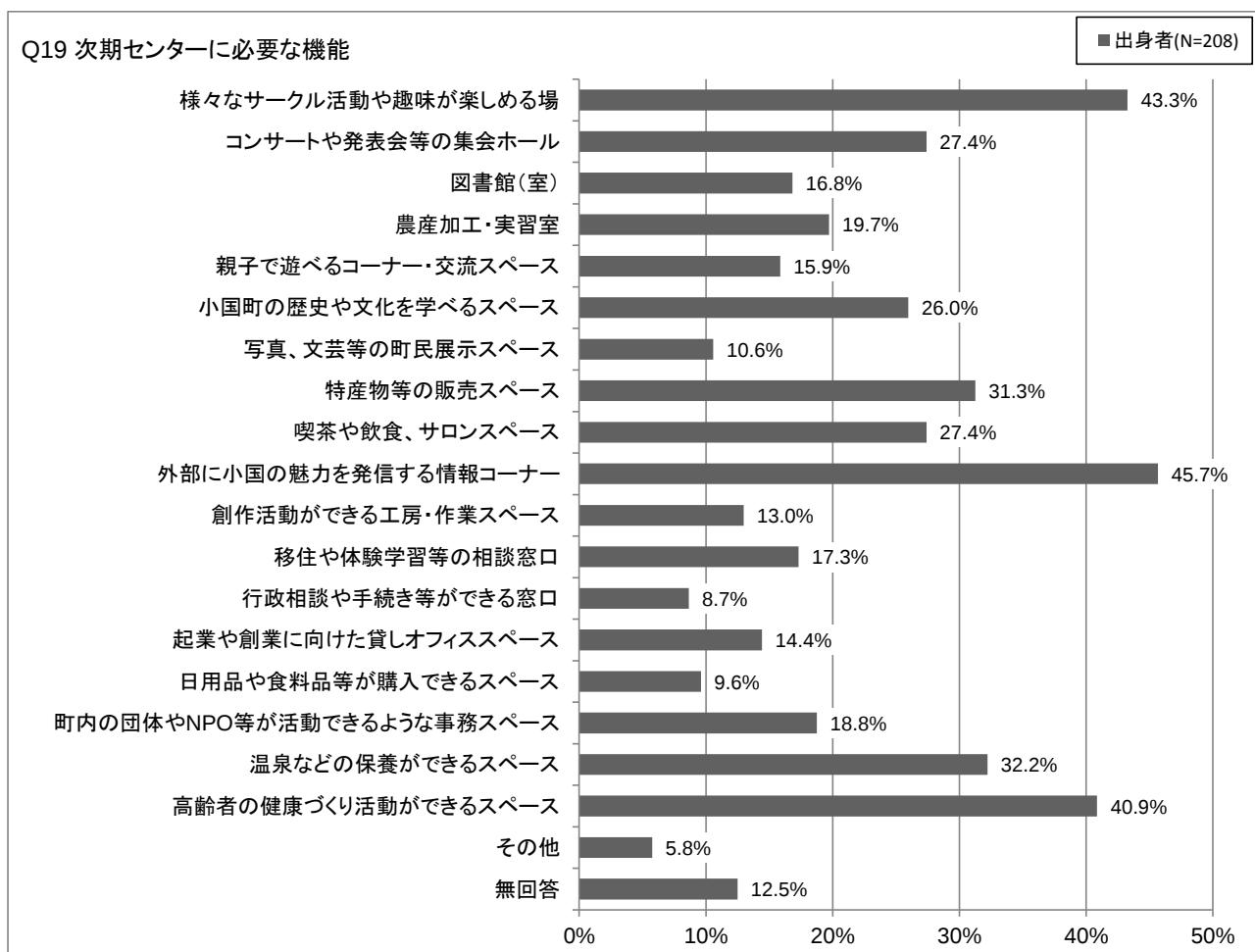
Q19-2 Q19-1で①または②を選択した方に伺います。どのような目的で利用しましたか。(〇は3つまで)

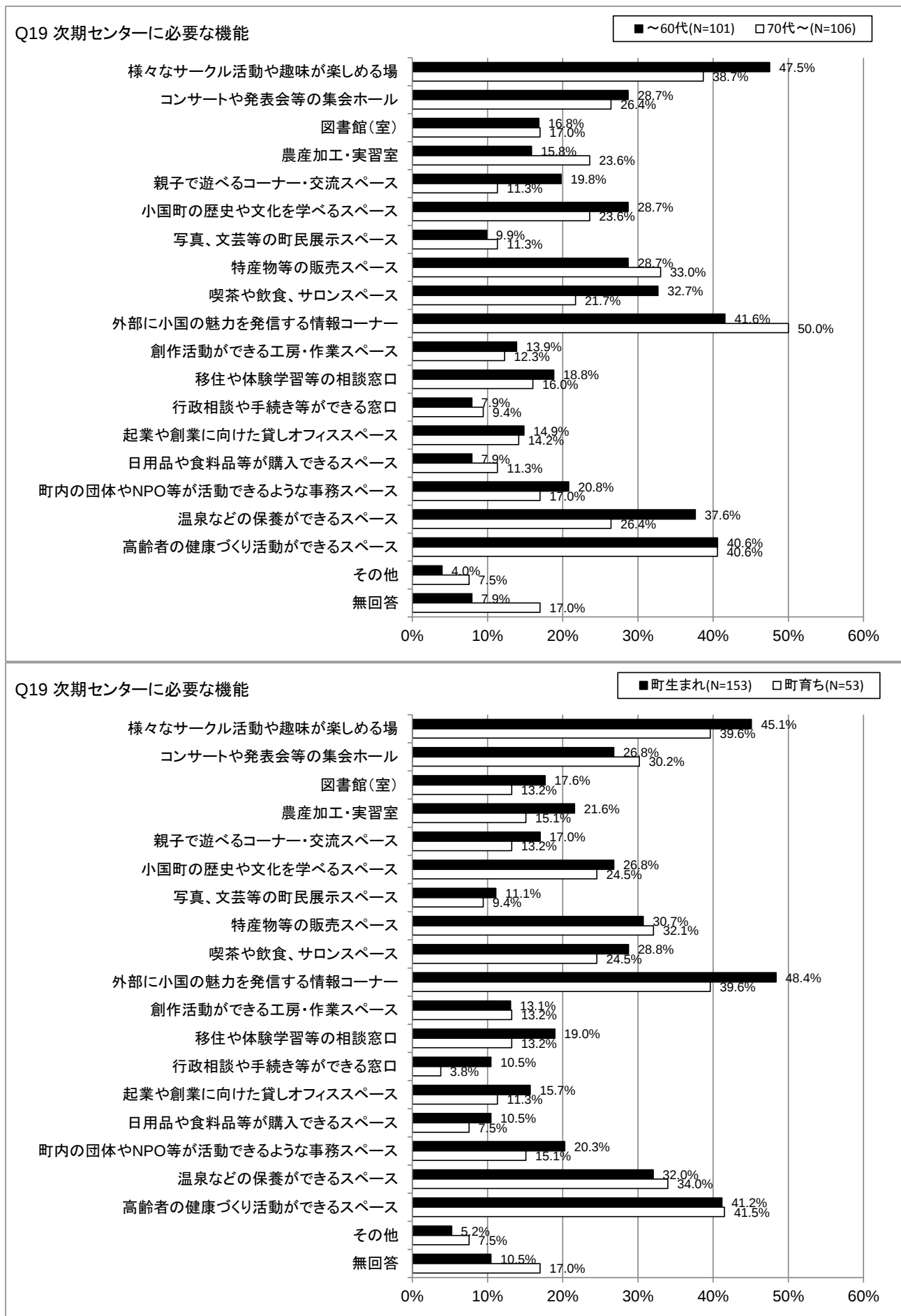
- 現センターの利用目的をみると、「講演会や発表会に参加」が最も多く、次いで「温泉施設の利用」や「グループでの会議や集会、勉強会等」、「図書の閲覧や調べもの」の順となっている。
- 「講演会や発表会に参加」は女性で特に高い割合となっている。



Q20 あなたは、小国町にこれからのまちづくりの拠点となる施設をつくるとしたら、どのような機能が必要とお考えですか。(〇はいくつでも)

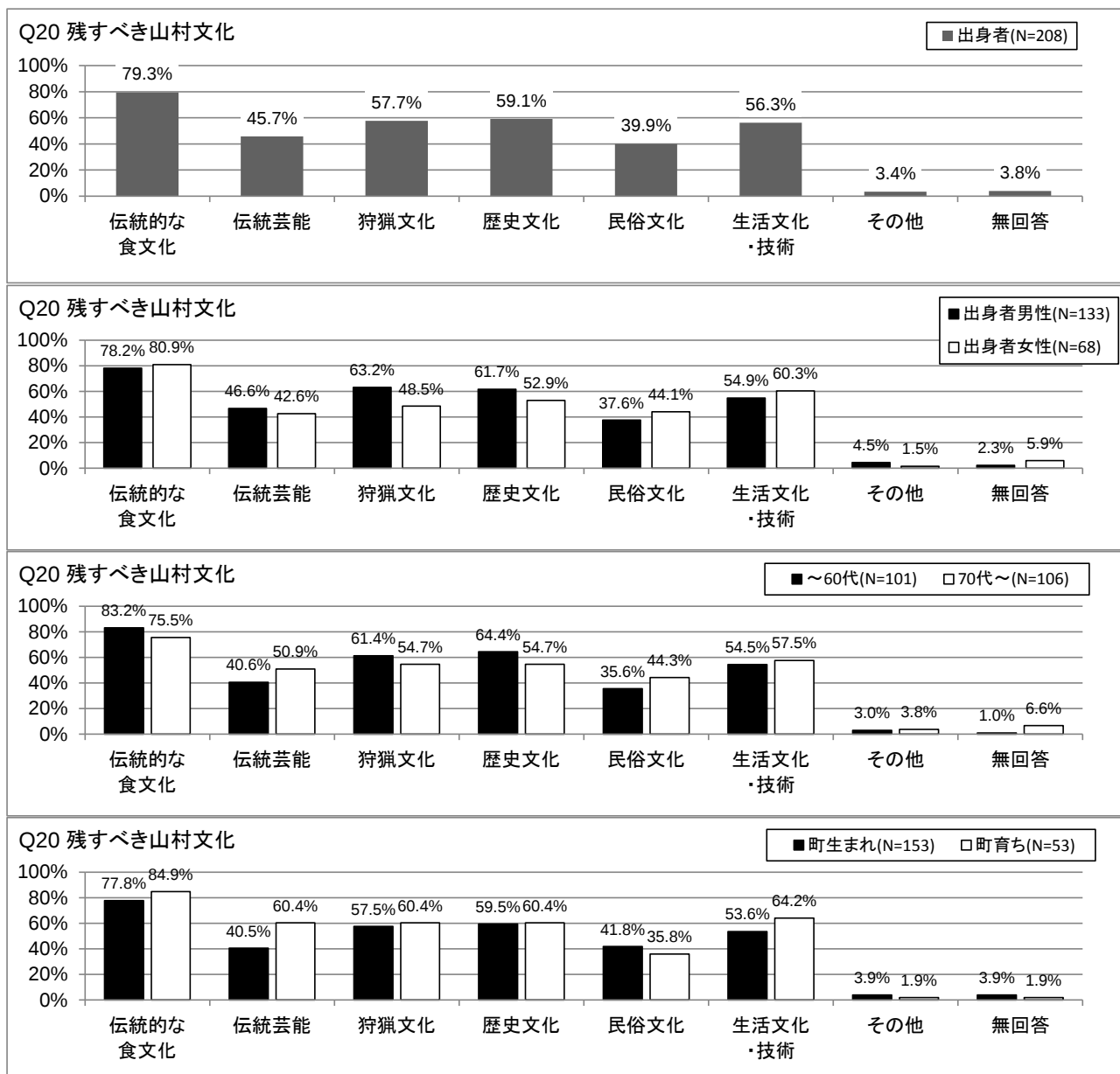
- 町出身者からみて、次期センターに必要な機能として最も多く挙げられたのは、「外部に小国の魅力を発信する情報コーナー」であり、次いで「様々なサークル活動や趣味が楽しめる場」、「高齢者の健康づくり活動ができるスペース」等が多くなっている。
- 年代別でみると、「外部に小国の魅力を発信する情報コーナー」を求める声は 70 歳以上の出身者の方がより高く、逆に「様々なサークル活動や趣味が楽しめる場」は 60 歳までの世代の方がより高い割合となっている。





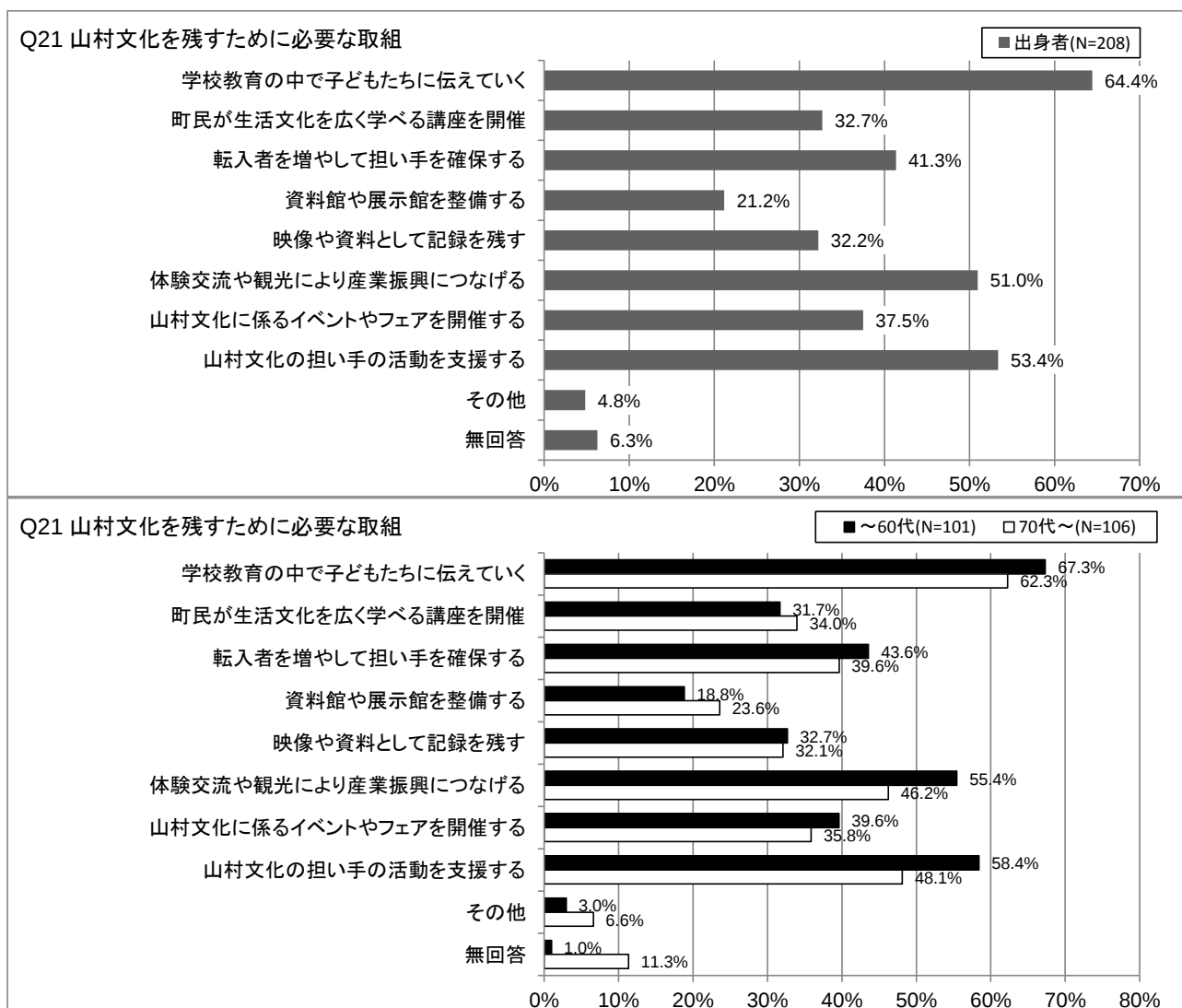
Q21 小国町には全国的にみても独特な山村文化があります。こうした小国町の文化のうち、あなたが後世に残したいと思うものは何ですか。(〇はいくつでも)

- 町独自の山村文化で後世に残すべきものとして、町出身者の約8割が「伝統的な食文化」を第1位に挙げており、次いで「歴史文化」や「狩猟文化」、「生活文化・技術」が5割以上と比較的高い割合となっている。
- 男女別でみると、わずかな差ではあるが、「歴史文化」や「狩猟文化」は男性の方が、「伝統的な食文化」や「生活文化・技術」は女性の方が高くなっている。
- 出身別で比較すると、上位項目はいずれも町生まれの人よりも町育ちの人の方がわずかながら高い割合となっている。



Q22 小国町独自の山村文化を後世に継承していくためにはどのような取組が必要とお考えですか。(〇はいくつでも)

- 町独自の山村文化を後世に残すために必要な取組としては、「学校教育の中で子どもたちに伝えていく」とする回答が最も多く、約3分の2がこれを挙げている。このほか、「山村文化の担い手の活動を支援する」や「体験交流や観光により産業振興につなげる」、「転入者を増やして担い手を確保する」などが一般住民と比べて高い割合となっている。
- 世代別でみると、60代までの世代の方が様々な取組について必要とする人の割合が高く、特に産業振興につなげることや担い手の確保が必要という意見が70代以上の世代よりも多い。



3. 調査結果のポイント

以上の調査結果のポイントを整理すると以下のとおりである。

■豊かな自然環境や美しい景観は、世代を問わず、また現住民・元住民のいずれからも当町の魅力として高く評価されているが、雪の多さについては居住環境として評価する上でマイナスと感じる人が多い

豊かな森林資源や水資源とそれらが創り出す四季折々の美しい景観については、中高生を含むいずれの世代の町民からも町の魅力として高く評価されているが、一般町民以上に町出身者においてこれらへの評価が高くなっている。都市部等を含む様々な環境での生活を経験してきた他出者による高い評価は、小国町の豊かで良好な自然環境が客観的にみていかに優れた地域資源であるかを示唆するものである。

一方、冬季の積雪は、住民等から高く評価されている「豊かな森林資源や水資源」を支えている自然環境の構成要素の一部ではあるものの、冬季の積雪の多さに対してはマイナス要素と評価する人が多くなっている。町の除雪体制や冬の交通体制に対しては約半数が「満足」としている一方で、「冬期の雪下ろしや雪かきが大変」という声が6割近くと多く聞かれており、家や敷地廻りの雪処理の苦勞から、暮らし続ける場所として評価する際には、こうした雪の多さがマイナスと感じられていることがうかがえる。

■町への愛着は町で生まれ育った人ほど強く、また愛着が強いほど居住継続意向やUターン志向も強いが、働く場があるかどうか住み続ける(Uターンする)上での大きな障害となっている

町への愛着は転居経験のない人、すなわち町で生まれ育った人の方が強く、さらに町への愛着が強いほど高い居住継続意向が示されている。この傾向は中高生にも同様に見られ、町で生まれ育った子どもほど町に愛着を感じており、将来も町で暮らしたいとしている。

しかし、全体としてみると、将来も町で住み続けたいという町民は約5割にとどまっており、特に40歳までの働き盛りの世代ほど転出意向が強く示されている。そして今後力を入れるべき施策として「地域産業の振興と雇用の場の創出」が特に多くから指摘されていることを踏まえると、こうした若い世代の転出意向の背景には就労環境に対する不安があることがうかがえる。

町への将来的な居住について消極的な回答をした中高生からも、その理由として、町には働くところが少ないことや、町にはない職種・企業への就職を希望することなどが上位に挙げられており、就職への不安が暮らし続けることへの不安に直結していることが示唆される。

一方、町出身者をみると、回答者の大部分は60代以上で、余生を生まれ育った土地で過ごしたいという思いからUターンを希望している人が多いため、今後町に戻る際には医療や介護・福祉の体制を重視するという声が多いが、そのような町出身者から見ても、今後町が力を入れるべき施策の第1位が「地域産業の振興と雇用の場の創出」で突出しており、自身の就職への不安という意味合いではなく、町の今後の発展を考えたときに、産業振興と雇用の場の創出が最大の課題と捉えられていることが分かる。

■総合戦略での3つの基本目標は住民からも力を入れるべき施策として指摘されており、特に地域間の交流促進による新しい人の流れの創出は、町出身者からより強く必要性を指摘されている

町で暮らしやすくしていくために今後力を入れるべきこととして、総合戦略での柱となる3つの基本目標に沿った項目が上位に挙げられた。すなわち、「地域産業の振興」を筆頭に「子育て支援の充実」、「若者やリタイア世代の移住促進」に関わる施策の推進が最も多く望まれており、総合戦略の基本フレームとして想定している方向性が住民の認識と合致していることが把握された。

また、特に「都市部の若者やリタイア世代の移住促進」や「田舎暮らし体験の実施など、都市との交流活動の推進」の必要性については、一般住民よりも町出身者から多く指摘されている。町出身者は一歩離れた目線で客観的に町の魅力を評価しているからこそ、その魅力やポテンシャルを活かし、地域間交流等により外部から人の流れをつくることが重要と考えていると示唆される。

■町出身者の方が一般住民よりも町独自の山村文化に対する評価は高く、その継承に向けた取組の必要性も町出身者の方がより強く感じている

町の独特な山村文化に対しては、残すべき資産として一般住民も高く評価しているが、町出身者の方がその評価は総じて高く、特に伝統的な食文化については約8割の町出身者が残すべきとしている。

そして、この独特の山村文化を次代に継承する手法について、一般住民と町出身者の回答を比較すると、「山村文化の担い手の活動を支援する」や「体験交流や観光により産業振興につなげる」、「転入者を増やして担い手を確保する」などについては、町出身者の方が一般住民よりも高い割合となっている。このように、新しい人の流れやしごとづくりに資する取組と絡めることで町独自の山村文化の保存・継承を図るべき、という意見が、現在町に住む住民よりも、むしろ今は町を離れ、客観的に町の魅力や長所・短所を評価する目線を持つ町出身者から多く挙げられた点は注目すべきである。

■しごとづくり、子育て支援、多世代の交流などの拠点となるまちづくりの中核施設が望まれている

現センターの利用状況から、集会やサークル活動、図書の閲覧機能を中心に、世代を超えた社会教育機能を現在も有していることが明らかとなった。また、次期センターに必要な機能としては、一般住民、中高生ともに「集い」と「学び」をキーワードとした機能に対してニーズが多く寄せられた。

一方、町出身者からは、次期センターに求める機能として、「外部に小国町の魅力を発信する情報コーナー」が最も多くから挙げられた。上述のように、町出身者が一般住民よりも町独自の山村文化に対して高く評価していることを踏まえると、それらを積極的に外部に発信していく情報発信機能やそれらを活かした交流活動等の推進機能を有するまちづくり拠点を整備することにより、山村文化の保全・継承と課題であった産業振興を同時に果たしていく必要性を町出身者が強く認識していることが示唆される。